

特集 きょうだいとは
他人のはじまり

女子学生会館物語

母の特別養護老人ホーム入所

読んで、書いてネットワークキング





有斐閣 新刊案内
(定価は税込み)
東京・神田・神保町2/Tel.03-3265-6811

● 図書目録送呈 ●

女性のデータブック 第2版

井上輝子編
江原由美子編

A5判並製力バー付
定価三〇〇円

日本の現代女性と彼女たちをとりまく環境を、見やすい図表と専門研究者の簡潔な解説で活用する。女性問題・女性史のサイードリダーとして、ソースブックとして、広く受け入れられた初版を、データをさしかえ項目を組み替えて、装いを新たにしました。

男女同一賃金

中島通子・山田省三・中下裕子著 均等法が施行されて一〇年になろうとしているのに、女性の賃金が非常に低いのはなぜか。諸外国で実現されつつある「同一価値労働同一賃金」は日本でも可能だろうか。その実際と行方を検証する。
(有斐閣選書 定価一八五四円)

夫婦別姓への招待

●いま、民法改正を目前に 高橋菊江・折井美耶子・二宮周平著 夫婦別姓制度や非嫡子の相続分差別の撤廃等を内容に盛り込んだ民法改正要綱試案が発表され、家族をめぐる法律は大きく変貌しようとしている。好評を博した初版以後の動きをフォローしつつ全面的に内容を見直した。四六判並製力バー付 定価二九五七円

わかりやすい育児休業法新版

労働省婦人局婦人福祉課編著 育児休業を取得しやすいように、休業期間中に給付金が支給されることとなるなど、条件整備がすすんだ。この改正点を簡潔に解説するとともに、巻末に育児休業申出書等の書式例を収録して便を図った。A5判並製力バー付 定価九二七円

東京都文京区本郷3-25 〒113

社会思想社

☎03-3813-8101 振替00160-2-71812

大地のアルバム

▼ある中国残留日本人家族——法村善吾子他著
終戦後も中国に残留し、八路軍と共に行動し新中国建設に参加した一家の稀有な記録
四六判上製・定価二〇〇〇円

素敵な思いだけ感じて、
生きていたい。

**本は男より
楽しい**

大津波悦子・柿沼瑛子 著

**本は男より
役に立つ**

大津波悦子・柿沼瑛子 著

哲学からエンタテインメントまで、著者の感性がとらえた502冊。

本書には、男女の枠を超え世代を超えて共感する

たくさんの「人生」が詰っています。

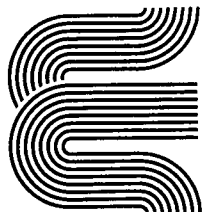
四六判上製・定価＝各1600円

目次▶見る、聞く／飲む、食べる／見つける、遊ぶ／出会う、別れる／生きる、働く／サツ／エンタテインメント／索引／書き下ろし対談(大津波・柿沼)

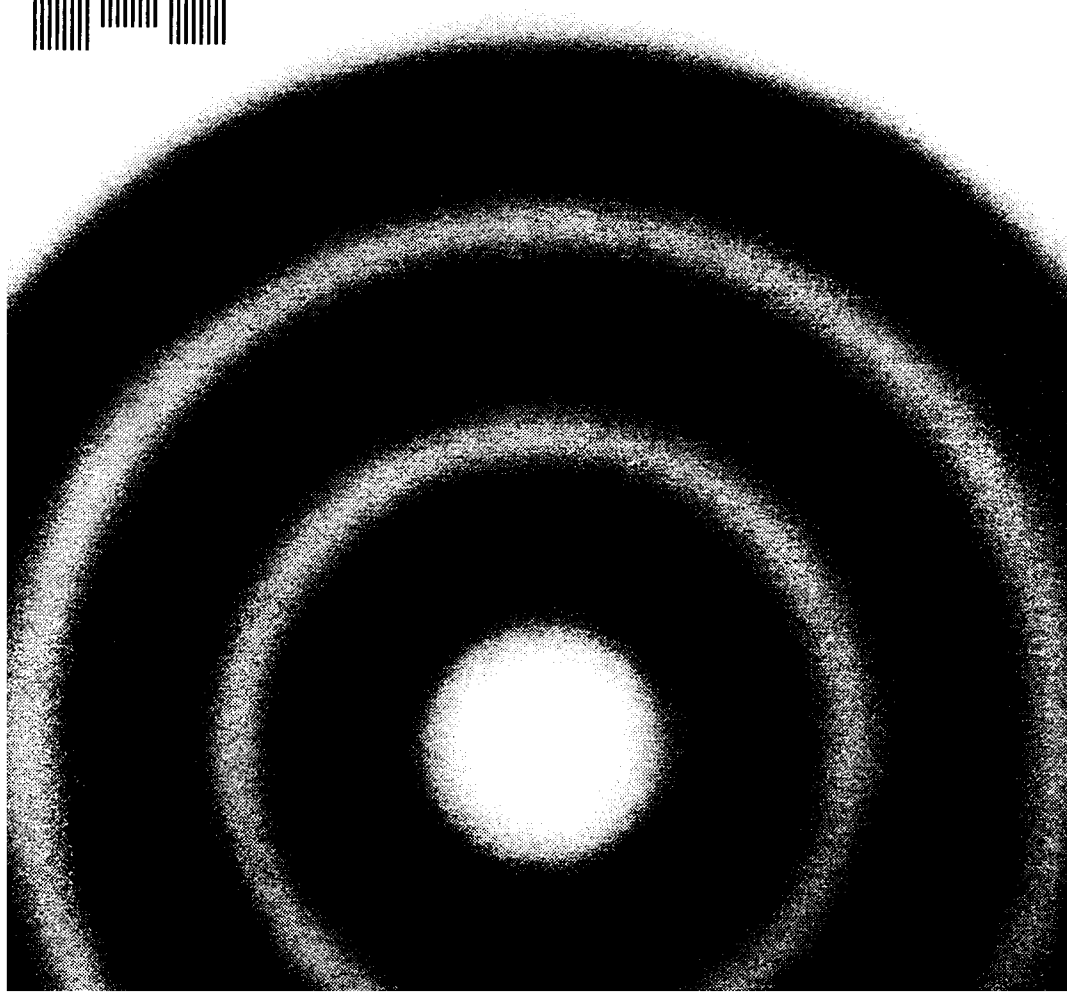
目次▶生きる、働く／知る、学ぶ／飲む、食べる／見つける、遊ぶ／出会う、別れる／見せる、装う／読む、遊ぶ／索引／書き下ろし対談(大津波・柿沼)

小説 土井たか子

大下英治著 憲政史上初の女性の党首として、土井アトムを巻き起し、また初の衆議院議長に就任した土井たか子が、再び注目されている。現代教養文庫・760円



●—— 読んで、書いて ネットワーキング



読んで、書いてネットワークキング わいふ二五四号

目次

4 ヴアラエティ・ライフ②

保母を選んで20年
平田幸枝さん
写真提供／文・平田幸枝さん 撮影／佐々木恵子

特集 きょうだいは他人のはじまり

- 10 美しい姉 三井早穂子
17 可愛がってやればよかった 匿名
22 バレンタインのチョコレート 三谷良子

28 エッセイスト・クラブ

福田由利子・大庭杷子・橋本あゆみ

33 スパリー言

三野友子・伊藤琴子

戦後50年記念連載

- 38 シベリアの青春② 福井秀雄

49 おさない子を育てる

村瀬智子・潮田京生子
加藤泰子・岸田麗子

59 平成おつたまげーション② 西田淑子

60 女子学生会館物語 香山なおみ

67 忘れ得ぬ人々

深田加奈・楠元くみ子

70 婚姻届と私 T・A

74 家族と私

横山のり子・松本とみよ

80 大人になりかかった子供たち

柴田照代・工藤愛子

87

サーブレシーブ

大庭杷子・横山のり子・望月千枝
安斉みちよ・福田豊子・十文字圭子
黒崎和子・加藤泰子・重松順子

128

時事放談Ⅳ「社会党——この奇妙な政党」
有澤妙子・梶本玲子

96

戦後50年記念連載②

私と英語 酒井智恵子

140

ファム・ポリテイク編集室より 田中喜美子

105

おすすめの一冊

辻浦知津代

142

コミック●痛快ノ一般人②⑦ 栗田笑

106

ブック情報

146

老人ホーム情報センター発

109

フリースペース

萬匠範子・時尾松子
井川真弓・高松恭子

147

わいわいがやがや

118

母の特別養護老人ホーム入所(続) 田中慶子

神山寿子・和子 S カンパネッタ

次号投稿募集 149
編集だより 152

投稿規定 150

わいふ原稿整理方針 15
自費出版はわいふへどうぞ 35
お友達にわいふを 52

バックナンバ 25
文章講座のおすすめ 45
添削希望の方へ 149

■表紙/レイアウト・工房はやし
■AD・林 佳恵

イラスト・梅村蒔・奥島千恵子・小沢恵子
カステラネンコ・小林正子・小宅昌枝
佐藤瑞江子・田沼千恵・田村幹代・鳥居禎子
橋本美智子・山田京子



東京都立萩山実務学校に勤務されている保母歴20年の

平田幸枝さん



私は現在五十八歳。三十六歳の時、子育て後の人生に就いて真剣に考えました。その結果保母資格取得のため学校に通い、取得後すぐ保育園に勤め、四十歳間際、東京都福祉局試験合格。重度精薄施設、教護院、身障施設、児童養護施設等に勤務して、再び教護院に戻り現在に至ります。

その間、家事、子育ても平行し、五人の子供達は今三十二歳をかしらに皆社会人となりました。

忙しい毎日の連続。やっとホッとした今、停年という時期が目前にせまっています。今後の人生を考えなければならぬ時期です。



取り込んだ洗濯物、ほころびなど無いか、点検
(押し入れの襖が張替中のため、開放されている)



正門前にて



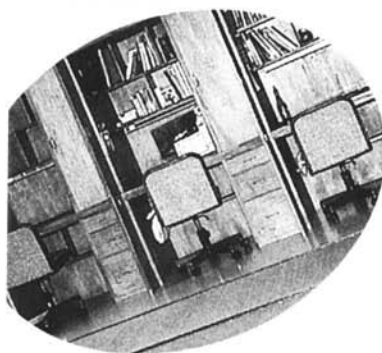
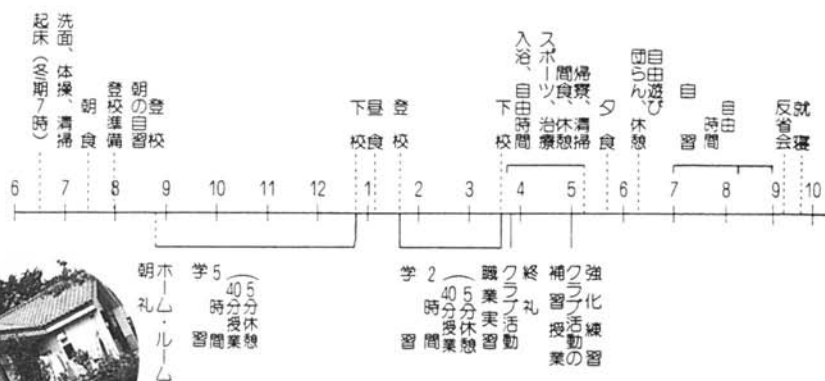
食事片付け後の点検



公務室にて 事務的仕事もたくさんあります

教護院、知らない方が多いと思いますので
紹介いたします。都立教護院は二カ所あり、
その一つがここ萩山実務学校です。
本校は、いろいろな悩みを持ち、家庭や学
校に適應できない児童、生徒が入所し、職員
やほかの児童、生徒と生活をともにしながら、
将来、社会で生活していける力を身につけて
いくための施設です。広い敷地、豊かな自然
の中で、小学生から高等部までの児童、生徒
が、元気に生活しています。

日 課 表



もうすぐ夏野菜の種まき、苗植えです。夏場の雑草とりは大変です

入所した児童、生徒は、寮で生活します。各寮十三〜十四名で、男子寮(四寮)、女子寮(二寮)、高齢児寮(一寮)の六寮です。指導員(二名)と保母(三名)が毎日交替で泊まり込み、一緒に生活します。

規則正しい生活と毎日の運動で、体力と努力する気持ちを養います。掃除、洗濯、食器洗いなど、みんなのことをみんなで作って、生活していく自信と、仲よく生活する楽しさを学びます。みんな、一〜二カ月で、心も体もとても健康になります。

学習指導は、毎日同じ敷地内にある学校に通い、一般の小中学校と同じ勉強をします。小人数のクラス編成で、基礎学力の向上に重点を置いています。年間授業時間数は一般学校より少し多めです。「木工」、「農場」の授業も本校の特徴です。働くことを学びます。進学、就職にむけても、きめ細かい対応をしております。



夏祭り



水泳大会



相撲大会



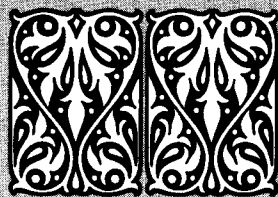
校内マラソン大会でタイムを計る



寮ポーチで洗濯物の取り込み

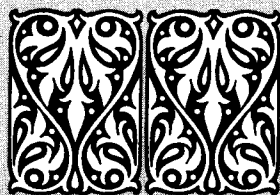


寮舎周辺



特集

きょうだい
は
他人のはじまり



特集

きょうだいは他人のはじまり

美しい姉

東京都中野区●三井早穂子

美人薄命

六人兄弟の中の女ふたり。間に次兄をはさんで姉とは七歳離れている。子供のころの七歳の差は、決定的に支配する側とされる側である。

まだ幼かった私は、そのおかれた立場を初めから当たり前のこととして、なんの疑問も抱きはしなかった。

派手好みの母方の親戚は姉を可愛がり、わが担任の教師はかつてのお気に入り、の生徒だった姉と比較しては、小言を言ったものである。それでもまだ鈍感な私はそれだけ姉が優れた人なんだと、その妹であることが嬉しく、姉を手本にしたいとさえ思っていた。

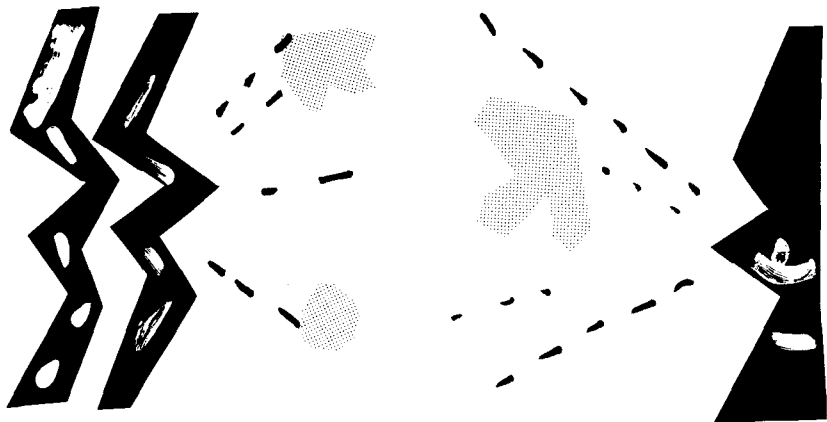
そうしたある日、姉が不用意に吐いたひと言が幼心に深い傷となって、のちに思春期から大人になるまで私に影響を及ぼしたのだった。それは私の生まれるまえに亡くなっていた一人の叔母の写真を、姉と眺めていた時である。

「あたしも長生きできないんじゃないかしら」

叔母は母と違って美しい人であった。従兄が五歳の時に三十三歳で結核で死んだのだという。だから自分も結核で若死するかもしれないというのだ。

当時は戦争が本格化してきたところで栄養状態も悪く、女学生の間には肋膜炎や結核になるケースがめだったからなのだけれど、「さっちゃんは大丈夫よ、ぜったい長生きできるから」とつけ加えたのである。それが妙にあたしとさっちゃんは出来が違うのよと拒否されたような気がして、六歳の私を打ちのめしたのを記憶している。

しかしそれでもコンプレックスより、憧れと誇りのほうがまさって、姉



と連れ立って映画や買い物にでかけるのは晴れがましく楽しかったものだ。

少女時代、さまざまな男性が姉に近付くのを見ていた。時には姉が目的で私にやさしかった男性もいた。

外部からそうした差別をされてもなぜ鈍感でいられたのか、それは両親が平等に六人の子供を扱ったからだと思う。というよりも世間並の価値観がうちの親には欠如していたのだ。健康でやさしい心に育ってくれたらそれであり、きわめて志の低いところで満足している親であった。どんなに悪い成績をとってきてもそれで叱られる兄弟を見たことがなかったし、母方の祖母が私の器量を嘆息しようと、あとで必ず父が「おまえはとても可愛いよ、素直でいい子だ」と親バカ丸だしでフォローする。

たとえ親がわけ隔てなく育てても世間の、特に男たちの目が自分にそがれるという体験をかさねて「おんな」の部分に自信をつけていった姉。一方、思春期から花の盛りの二十代をさ

まざまな事情からコンプレックスの塊みたいに生きていた冴えない妹。

しかしその時の苦しみ方の差が、結婚生活において問題にぶつかった時どう対処できるか歴然と現れてきたのだった。

恵まれた人は弱い

エリートコースにいた男性と結婚をした姉は、十数年のちに心を病むことになる。

姑との確執、そして海外赴任先での言葉の問題など、旧制女学校を戦争で繰り上げ卒業した姉には、英語を学ぶチャンスがなかったこともあって、身も心も病んで帰国し、最終的には鬱病の診断で入院生活が数カ月続いた。

嫁姑問題で妻をかばえなかった義兄は、その罪滅ぼしのように姉をいたわった。面倒な問題はみんな義兄が処理した。娘たちを中学受験させる時も義兄が指導して、受験にも付き添ったほどだ。ふた昔も前のことである。

何もかも任せきりにして、時には自分の仕事まで自宅に持ち帰って手伝わせるわが夫と比べては、そのころの私は義兄をやはり頼もしく思い、姉をひそかに羨んでもいた。

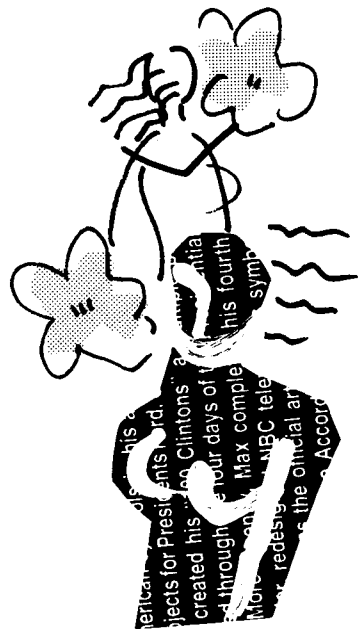
先にも書いた通り、父が明治生まれの男にしては進歩的な考え方で、子供の躾はもとより料理によつては父親がしゃしゃり出る家庭であつたから、男尊女卑という言葉は、教科書では知つていても家庭の中で実感しないまま来てしまつた私は、女房とは男を気持ちよく働かせるための小道具、程度の意識の舅姑と、そこに育つた夫との出会いは、かなりのカルチャーショックだつたわけである。

兄嫁がきて実家に居づらくなつた娘のとるべき道は、当時はよほどの技能や学歴を持たない限り自立は不可能に近く、結婚は永久就職ともいわれ、多くの娘たちがそんな気持ちで結婚に踏みきつたのではなかつたらうか。

もとより私も例外ではなく、愛だの人間性だのといつていられない年齢ま

で追いつめられて決めた結婚だから、私自身に責任はあるのだけれど、ゆくゆくは離婚もと考へないではない日々であつた。

一方、そうした中で退院後の姉は、心の不安を解消するために私に頻繁に電話を寄越すようになる。鬱の患者には、話を聞いてあげることがケアになるのだと言われても、これが身内だと意外に難しい。過去から全部知つてい



分で解決できないの?と思う。

三人の息子たちのさまざまな問題、PTA活動、パートなどなど時間がいくらでも欲しかった私には、姉からの電話は時間泥棒!と叫び出したくなるようなストレスとなり、電話のあつた日はぐったりと疲れる。そうなると思ひ対はそつけなくなつたり、時には皮肉まじりの返事をするにもなつた。

すべてに私より優れていると思ひ込んでいたころは許せていた姉の生活が、その実像が少しずつ私の中で崩れてくると、勝手な思ひ込みではあつて

も、私たち兄弟から突出した豊かさを享受しているのが不合理に思えてくる。

世の男たちがいかに外見で女を評価するかを、小説や他人事では理解できるのに、それが身近な存在ゆえに割り切れないのだ。

鬱病を病んだのも、それまでに精神的に乗り越えるハードルに出会わなかったからではなかったかと、私のなかに意地悪な快感が芽ばえた。

それでも、お互いがそれぞれの家庭を守っている分には問題は起きない。電話の回数も徐々に遠のいて、当たり障りなく付き合っていけばそれで済むはずなのであった。

母の介護をめぐって

それが六年前、「お母さんの様子を見に行ってくれないか」という電話からことは始まった。当時母は八十六歳、家業を継いだ長兄夫婦と暮らしていた。夜中に便所に行こうとして階段

で怪我をし、近くの整骨院に通っていた。姉はすでに娘の運転で見舞ってたという。

「例によってM子さん（兄嫁）は付き添ってくれないらしいのよ。だからさっちゃんが連れてってあげて。それから、シーツも薄汚れてたから、洗濯してきてね」

長い間の習慣で、姉からこう言われると「うん、わかった」と二つ返事で引き受けてしまう。

実家までは電車、バスを乗り継いで五十分かかる。翌日母を整骨院に連れていった後、その間にシーツや寝間着類をコインランドリーにもって行って洗濯。約束の時間がきて母を迎えにゆくと、今しがた兄嫁が連れて帰ったと言う。私はとって返したが母も兄嫁もまだ帰っていない。整骨院とは一本道なのに何処で見落としたのだろうと気をもんでいると、母はふらふらの状態で兄嫁にすぎるようにして歩いてくる。「ちょっとあちこちお使いしてたもんで」と兄嫁。その夜から母の意識は薄

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 頃↓ころ 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで 良↓よい 沢山↓たくさん 中々↓なかなか 苦↓はず 更↓さらに 但し↓ただし 何故↓なぜ e t c.

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変る↓変わる 浮ぶ↓浮かぶ 話合う↓話し合う 気持↓気持ち 行う↓行なう 表す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

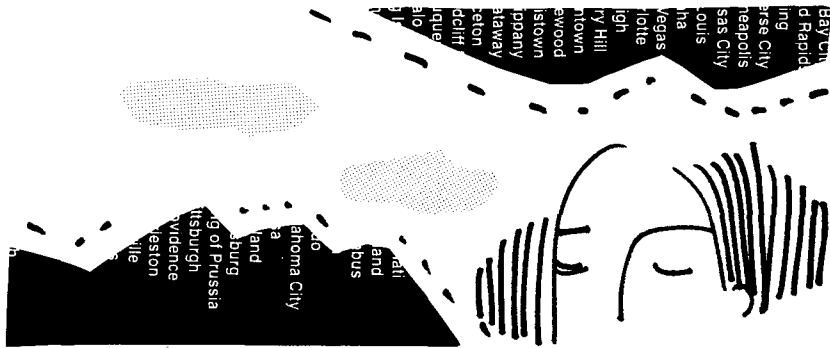
れていき、オムツをされてもわからな
い状態になった。

かかりつけの医者からは、年齢も年
齢だから親戚には連絡するようにと指
示され、遠方の親戚まで次々と訪れて
くれた。

私たち兄弟もいよいよその時が来た
のかと、医者のすすめるように自宅で
看護をしようとその態勢を相談するこ
とになった時、姉と真っ向から意見が
対立したのである。

実家の紳士服業は父の死後、時代の
流れも変わり従業員はいなくなつて、
末の弟が兄を助けて細々と営んでいる
だけだったから、とりあえず母の介護
は兄嫁をまじえてこの三人が当たると
いつてくれたのだ。

けれども姉は、兄嫁の看護の仕方が
粗雑であれでは母が可哀そうだと言
う。姉がせっかく作って持っていた
オムツも使い捨てにしている。だから
私に一日おきにでも通って欲しいとい
うわけだ。兄嫁も私も家計の足しに
パートの仕事を持っている身である。



「そんなに心配ならお姉ちゃんが自分
で行けば？」だってあたしは無理よ。
娘たちの都合もあることだし」「娘の
運転で行こうと思うから無理なんで
しょ。電車があるじゃないの」

すると姉は「ウチもあたしの体を心
配して一人で出歩くなと言ってくれて
るのよ」。

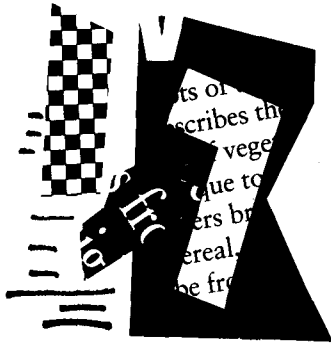
もう我慢ができなくなった。そうか
そうか、そうして義兄は姉を甘やかし
てきたわけだ。考えてみればこの間の
電話だっておかしなものである。シー
ツの汚れに気がついたのならなぜ自分
で洗わなかったのだ？ すると姉は
「お母さんの手をさすってあげてたの
よ」とぬかす。馬鹿か。もうおいそれ
と姉の指図にひっかかるものかと思
う。

オムツの使い捨てを非難するけど私
だって姑だったらそうするかも知れな
い。ましてこの時期、紙オムツだつて
あるのだ。

「じゃあ、もしあたしが通うとしたら、
パートの収入がなくなるわけよ、おね

えさん（兄嫁）だって収入を棒にふってお母さんの介護をしてるわけだから、紙オムツ代くらい負担してくれる？」姉は即答せず、翌日の電話で断わってきた。つまり義兄に相談したところ、母の世話は大正生までもある義兄に全面的に責任をとるのが筋だと言われたという。大正生まれで長男でもある義兄にしたらずそれは当然の考えであつたろう。

たいていのことを自分で処理してきた私は、そんなことまで夫に相談したのかとびっくりだ。



労働力を出せないなら少しずつ金銭を負担して欲しいと、私は一軒あたりにしたら一万円にもならない金額を提示したのだ。それくらいは主婦の裁量でなんとかなるのではと思ったし、十万もする留め袖を作ったと聞いていたからだ。

たしかに私たち兄弟は父の死後、兄が母の面倒をみるという約束で相続放棄の手続きをした。しかし兄が母の分も含めて相続したものは、今住んでる土地と店舗兼住宅だけである。それがないくは兄たちは生活できないのだし、そんなものは税法上、資産価値はあるだろうけど今現在使える現金には結びつかないではないか。それとも義兄は土地を担保にして融資を受け、それで母の面倒をみるという意味なのだろうか。

才覚のない兄は父の残した得意先を守るのが精一杯、いやその人たちも老いて、徐々に死亡していくからじり貧である。父の遺言もあって兄を助けてきた末弟は転職も考えていたけれど、

母が生きてるうちは店を辞めないよと頑張ってくれている。だからもし医者の言うように、これが母の最後になるのなら弟も解放され、兄嫁も肩の荷が下りるだろうと考えていた私は薄情なのか。しかしいつも現実にくよくよの三家族なのだ。

決裂

姉はただただ母を失いたくないと取り乱して、夫婦そろって入院をすすめた。

入院して三日目、母の意識は戻った。整形外科の治療以外は、ただ老衰ということで内科的な病名はないまま、半年間入院した。

母が命拾いしたのは確かに姉のお陰ではある。とりあえず第一回目の入院生活は無事に終わり、末弟も自分の将来を考え転職していった。

しかしそれからの生活が母にとって、針の筵のような日々となったのだ。『こんなボロ家買ったって、いつまで

も長生きされたんじゃ引き合わないわ」「ああ、いつになつたらわたしたち水入らずになれるのかしらね」と、弟が昼間姿を見せることがなくなつてから、兄嫁のいやがらせは母の目の前でエスカレートしていった。

そして三年前再び骨折で入院、母はすでに九十歳、兄嫁も、五十八歳、あの時よりは体力も落ちているはず。母の快復力は呆れるほど順調で、それに反比例するように兄嫁が体の不調を訴えて、医者通いが始まった。近くの都立病院、大学付属病院、個人病院と通いつめ、しまいにはC・Tスキャンでも診てもらったが病気は見つからない。母の退院の許可は出ているのに兄から「待った」がかかって退院ができず、母の年金の蓄えは病院の費用でみるみる減って気が気ではない。

そんな時、夫が家に引き取つたらどうかと言ってくれたのだ。夫にしてみれば自分の母親を時々連れてくる都合上、「ここでおまえにも借りを返しておきたい」と言う。

下心はともかくこの申し出は夫の株を上げた。

結局、姉と私の家で都合三カ月ほどを過ごしその間、やはり本来の自分の家に帰りたいという母の気持ちを汲んで、兄夫婦にどう渡りをつけるかと他の兄弟で話し合った。

最初に母が寝込んだとき、兄嫁はかなり機嫌よく看病に当たってくれたのだ。姉に言わせれば「あの時は先が見えたと思つたからよ」と。でもその気持ちは私にもわかる。また母が退院してくればいつ終わるかわからない同居を思つて神経症になつたのだとは気が付いていたけれど、それを本人が自分で気付くようにそれとなく仕向けるに留めて、特に指摘するのは逆効果だという私たちの意見に、納得しなかったのは、なんと自分にも覚えのある姉なのだった。兄夫婦を前にして、親族会議をしようという。

私には、以前から兄嫁が姉を快く思っていないこと、姉の言葉が兄嫁の神経を逆なですることがわかつていた。

そして兄や母が、まったく兄嫁に頭が上がないのも、もとはといえば兄に働きがないからであり、その憂さ晴らしに弱い母がいじめにあっているのだ。経済的苦労を結婚以来味わっていない姉には、兄嫁のその気持ちを理解できないいらしかった。

兄嫁の仕打ちを、電話料金など気にしないで済む姉は遠方の親戚にまでかけまくる。問い合わせが来てその始末にあたるのはいつも私なのだ。姉は長女としてどれほど母を心配しているか、そして解決するために自分が主導権を取らねばと思つていたらしいが、もはやそれは私が握つてしまつていた。

兄嫁を前にするのなら姉は同席しないよう、と私が言ったことが姉の自尊心を碎いてしまった。以来連絡はない。自尊心……そんなもの初めから無縁だった私には何ほどのことでもない。

姉とはもう、冠婚葬祭で会うだけだ。不思議なことに、あれほど似ていないと言われたのに、近ごろでは似て来たさうだから気の毒な氣もする。

可愛がつてやれば よかった

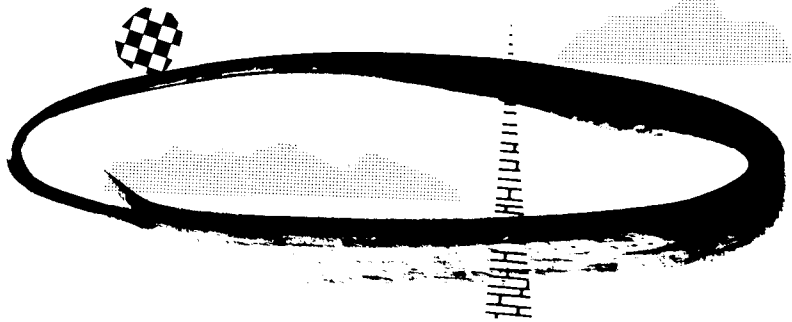
匿名

私には四歳下の妹がいる。子供のころ、この四歳の差は大きく妹は私の遊び相手とはならず、私はもっぱら二歳上の姉とばかり遊んでいた。末っ子の妹は長い間母にべったりくっついていたが、成長するにつれ少しずつ私達に遊んでもらいたがるようになった。

あんたは生まれていなかったはず

私と姉は妹を足手まといに感じることもあったが、妹がそばへ寄ってくればそれなりに遊んでやり、可愛がりもした。が、それにはいつもひどい「おまけ」がついた。

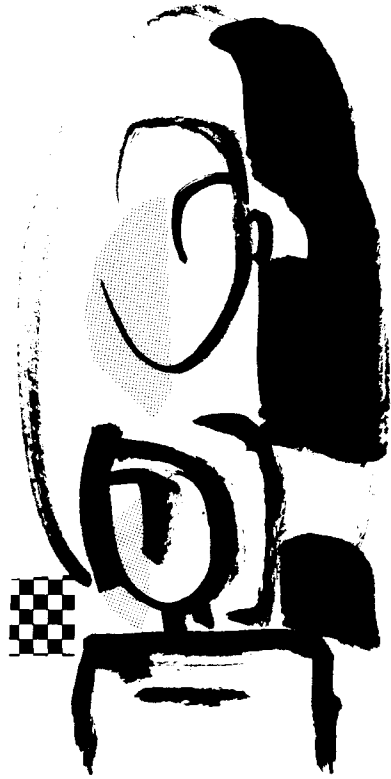
そのおまけとは妹をからかうことである。子供でも五、六歳になれば周りの大人達の会話をよく聞いているもの



である。私達はそんな大人の会話から自分達に関わるものだけを拾い上げて妹に話して聞かせた。

姉の上にわが家には一人男の子がいた。が、この子は産まれてすぐに死んだという。父や母はこの子のことは決して口にしなかったから、たぶん他人の言葉だったのだろう。それとも私と姉の創作だったのかもしれないが、もしこの男の子（兄）が生きていたら妹は産まれていなかったらう——というのが私達の口ぐせだった。

父母は男の子が欲しいがために、三人も子供を産んだのだ。二人っ子が主流の時代、わが家は女の子が三人も、ということとで周りからずいぶんいろいろなことを言われた。女ばかりではしょうがない、あの子が生きとったらのうとか、妹が産まれた時、「また女か。もう顔もみたくない」と父が言ったとか。父から直接聞いたわけではない。たとえ事実であったとしても、父は妹のことを可愛がっていた。やはり末っ子は可愛かったのであるう。



無遠慮な言葉を浴びせる大人達は大勢いた。私達の目の前で、あるいは私達に向かって話された、無神経な言葉は私達を傷つけた。私と姉はそこで自分たちが傷つかずにすむ方法を見つけた。それが妹をからかうことだった。あなたは本当は産まれてなかったんだよ、あなたさえ男の子だったら父は落胆せずに済んだのに。幼い妹に向

かい、私達は飽きもせず何度もこの話をした。仮定が何の意味ももたないことに気づきもせず、子供がどうやら産まれるのか、産まれないのか想像すらできないのに、したり顔で妹に言っているのである。

妹は笑っていた。いつもニコニコ笑っている子だった。この話をするとちょっとだけ困ったように眉をひそめ

たが、すぐ元のニコニコ顔に戻り、笑いながら私達のあとをついてきた。このからかいの種は、妹が小学校三、四年になるまで続いた。

支配する姉

幼稚園に入ってから、私には内弁慶という言葉がついて回った。外では小さくなって一言も口をきかず、家に帰ったとたん機関銃のようにしゃべり出すのである。しゃべる相手は妹である。私が唯一、いばってえらそうにふるまえるのは妹だけである。外では自分を抑えて同級生のいいなりになっているので、その分家で妹をいいなりにしないと気がすまない。

ただ姉である、年上であるという理由だけで私は妹に命令口調で話し、服従させた。妹をストレス解消の的にしているという気はなかった。姉だからいばっていいんだ、当然なんだと思いいこんでいた。妹はまたニコニコして私の要求を受け入れてくれた。

呼び方も変えさせた。それまで妹は姉のことをお姉ちゃん、私のことを○○ちゃんとか名前で呼んでいた。私はそれが気に入らず、私のこともお姉ちゃんと呼ぶことを強要した。母が二人もお姉ちゃんがいたらどっちかわからんから、と反対したにもかかわらず、私は強引に○○姉ちゃんと名前をつけて呼ぶよう指示した。次の日から妹は一所懸命に○○姉ちゃんと呼びかけてきた。

次第に私は妹を管理するようになっていった。父母は妹に甘いので（私にはそう思えた）、私が厳しく鍛えなければと思ひ実行した。妹が犬を飼いたいと言った時は、世話できるはずがないとつぶねた。修学旅行に行くのに新しいスカートがほしいと母にねだっていたのも、姉も私もそんなものは買わなかったと却下。

私は妹にとってよい姉ではなかった。ひたすらこわい姉だった。妹を思いやってやることはなかった。私は妹の心をどれだけ傷つけてきてしまったろ

う。傷つけていたと気づいたのさえ、ごく最近だった。

妹は中三の時、登校拒否を始めた。



原因はわからなかった。今思えば、幼いころからの心的外傷が思春期に表面化したのかもしれない。でも当時私に

それがわかるはずもなく、私は妹のわがままだと決めつけた。母を、甘やかすからこうなるんだと責めた。

妹は部屋に閉じこもり、友達が来ても、電話がかかってきても絶対出ようとはしなかった。最初のうち、私は妹に声をかけた。学校行かないとだめじゃない、と優しく言ったつもりだったが、妹にとっては威圧的でしかなかったのだらう。ふとんをかぶったまま返事もしない妹に私はさじを投げた。

私だって学校ではつらい目にもあってきたのだ。友達が一人もいなくて、お弁当の時間、まわりが机を寄せあって談笑しながら食べている時、たった一人ポツンと離れて黙々と箸を動かしていたこともあった。それでも私は休まず学校へ行った。妹のことをなんて弱虫なんだと思った。以降、私は妹のことを無視した。声をかけることもなくなった。家族うちで妹のことを話し合うことはなかった。父も母も私の前では沈黙していた。ご飯は母が部屋へ運ぶのだらう。妹は食事時になっても



部屋から出ず、父母と私の三人はテレビの音だけをたよりに食事を進めた。姉は就職によって家から出ていた。

母は一人で奔走していた。学校へ行き、医者へ行き、自身の勤めも農作業もあった。車に乗れない母があちこち動こうとするだけでも、苦勞を伴う。でも母に助力者はいなかった。一番身

近にいた娘の私さえ、何の協力もなかった。すべての問題は妹自身と、母の育て方にあると信じて疑わなかった。

母の努力が実ってか、妹は中学を卒業させてもらった。高校受験もし、無事合格した。わが家に平和が戻ってきた。妹は学校へ行くようになったし、笑うようになった。私ともたわいない

話をするようになった。だれも登校拒否の話を持ち出すようなことはなかった。そのことはもうすっかり解決したことと思っていた。それなのに――。

妹のせいだ

一年ももたず、妹はまた学校を休み始めた。最初は体の不調を訴え、二日、三日と休み、また学校へ行く。それが頻繁になりついには部屋に閉じこもり、まったく学校へは行かなくなってしまった。やはり原因はわからない。今度は母の努力は実らなかった。高校は義務教育ではない。出席日数の足りない妹は退学となってしまった。このことによって困ったのは私であった。

ちょうど就職の時期を控えていた私は面接で必ず、家族一人一人何をされていきますかと聞かれるのに閉口した。妹のことを一体何と言えばよいのか。高校生ではない。かといって働いてい

るわけでもない。機転をきかせて高校生ですとか予備校生ですと言えばよかったのかもしれない。これぐらいの嘘で先方が困ることはなかったはずだ。が、まだ世なれない私はいつも口ごもり、小さな声で家にいますと答え、理由を聞かれたりした。

それが原因かどうか、就職はなかなか決まらず、私はそれをすべて妹のせいにした。母に、あの子をなんとかしてよとあたりちらした。あのまま一生部屋に閉じこもったままでいるつもり？ ご近所にだってかっこ悪いし、私の人生だってめちゃくちゃだよ！

家の中でやつあたりし、わめきちらすことで私は外で平静を保っていた。

妹はちがった。小さなころからニコニコ笑ってるだけでかんしゃくを起こすことはなかった。感情を内に秘めて持ち続けてきた妹のほうが、私よりずっと強い子だったのかもしれない。学校へ行かないということが、妹の強い意思の表われだったのだ。

何年かすぎたある日、会社から帰る

と妹は家にいなかった。父が言うには県外に就職が決まり寮に入るようになった。母がついて送っていったという。青天の霹靂というやつだ。何の相談もなくと怒るわけにはいかない。妹のことを無視していたのは私なのだ。自分だけの生活にかまけていて妹の将来のことなど考えてやらなかった。私は妹のことを部屋から一步も出ない臆病なやつと思っていたが、いつの間にか妹は動き出しており、固い殻を破り、この家からとび出していった。

妹の幸福

見下していた妹に追いこされていったようで、私は打ちのめされた。次の日母は一人で帰ってきた。「行っってしまう」という声に力がなく、私は一人になって泣いた。やっと十八になったばかりの妹。一人で見知らぬ土地でやっていくのはどんなにつらいことだろう。一番可愛い末っ子を早々に手離さなければならなかった父や母は、ど

んな思いで妹を見送ったのだろう。もっと可愛がってやればよかった。やさしい言葉をかけてやればよかった。後悔だけが押しよせる。妹が家を出て初めて、私は姉らしい心遣いができるようになったのである。

父母が着る物や季節の物を妹に送る時、私もいっしょになって妹の喜びそうな物を探した。電話がかかってくれば私もかわってもらい、がんばってる様子を上げましたりもした。妹がお金をとられたと泣きながら電話してきた時は、負けたらあかんと言い、すぐにおこづかいを送ってやったりもした。そうすることで私はうめ合わせをしたかった。小さなころからずっとひどいこととしてごめん。悪い姉ちゃんやっただけと許してな。声には出せないけどそう言いたかった。

現在では妹も私も家庭を持ち、顔を合わせることもなく、年賀状をやりとりするだけの他人同士のような仲ではあるが、一緒に暮らしていたころよりずっと私は妹の幸福を願っている。

バレンタインの チヨコレート

東京都●三谷良子

母の死

あら、妹の声がする。突然に私の家
の中で子どもと話している声が。

「今日バレンタインなので、お兄さん
とたかしとみのるにチヨコを持ってき
たの」

鬱でねている私の耳に、貴女の声が
入る。貴女の声を聞くと私の心は、怒
りと悲しみで乱れる。何で来た、前ぶ
れもなく、何で私の許可なしに、私の
心の中にドンドンと土足で入りこむ。

静かな解決に向けてやっと心おだや
かに、そう五十何年間やってきた貴女
の姉としてでなく「私を生きる」とい
う営みに光がさして、その光のわずか
なあたたかさに身を寄せて、背中を丸

めいっときの休息を取ろうとうたたね
をはじめた私の所へ。

「やはり手術が必要なんだって。入院
三週間の手術。今年もちがう大学病院
でみてもらったら、やはりそうだっ
て。だから切ってもらおうと思つて。

手術に家族のサインがいるの」

私は布団をかぶり、寝たふりをして
貴女の声をきくまいと耳に手をやる。

それでもなお貴女は、

「お姉ちゃん、じゃあ、もう一軒病院
を変えて調べてみようか」
と、声をかけてくる。

これで私の知るかぎり、大きな病院
は五軒目くらいじゃあないか。一年前
も、その前の年も私は心配して病院に
ついて行き、貴女と不安をともにした
ではないか。

今、貴女の姉としてでなく、私とし
て生きようとしている時に、また執拗
に姉としての場所に私を引きもどそう
とする。

おろかな妹よ、私は貴女の声聞き
たくなくて耳を手でふさぎ、布団をか



ぶりながら、貴女を思ういとおしきで心が震え、貴女の淵のない不安を思うと涙が止まらない。

私たちの母が亡くなって三年と少しがたち、貴女が病気の私を尻目にさっさと、この家の隣りの部屋から引越をして行ってしまうから六カ月がたとうとしている。母が亡くなった悲しさはお前と同じだよ。なのになぜ、貴女は私達夫婦を苦しめるの。親戚をまきこんだ妹の、思いもかけぬ相続の折の出来事が頭の中をグルグルとまわる。

思い返してみると、母と貴女が、住んでいたアパートから立ち退きを迫られわが家に越してきたところから、何か歯車がかみあわなくなったようだ。

四年前のことだ。その年はずい分い로운ことがあった。

一月、母と貴女のお店の改築工事開始、これは長年の懸案だった。二月、母の病气。三月、貴女たちの住んでいたアパートからの立ち退き問題。五月、私達の住まいの新築工事はじまる。

夏には店と住まいが出来上がり、母

も貴女たちも一緒に住むことになった。

お店は、私と貴女と共同でやれるように設備を広げ、「ゆくゆくは一緒にやろうね」と語りあっていた。

私は夫と新宿に近い町で総菜店を、妹は母と一緒にそこから六つほど離れた私鉄の駅の近くでうなぎ屋をやっていた。うなぎ屋といっても店で食べてもらうのではなく、焼きたてをつつんで家で食べてもらうテイクアウトの専門店である。

両方の店は母がとりしきっていた。母がおこした店である。私の夫は妹の店のために、自分の商売そっちのけで肩入れし労力を提供していた。土用のウシの日などは子どもにも応援を頼んで、仕込み、タレづくり、タレを小びんに詰めるなど、徹夜の作業になることもあった。

その年の夏から秋にかけて、母は病み上がりとは思えないほどテキパキと仕事をこなし、段取りをつけていた。うなぎ店はますます繁盛し、母は満足

げだった。

十一月三、四日の連休に、天理市で勉強している私の次女を訪ねる計画をしたのも母だったし、家族そろって行くことを楽しみにしていた。

その矢先再び母が倒れた。十月末のことである。

行くべきか、中止するべきか、迷ったあけく母に相談すると、「みんなで行ってきて。私は大丈夫だから」と返事が返ってきた。なおも迷っていると叔母に、「天理に行って、神様に姉さんの病気の回復を祈ってきてほしい」といわれた。母は天理教の信者だった。病院には妹が残った。

「たった二日のことだから」後ろ髪ひかれる思いで夫と子ども達と天理に向かった。

娘におばあちゃんの病気を知らせ、つかの間の再会も早々に戻ってみると、母の容態は急変し、危篤状態となっており、六日には帰らぬ人となってしまった。

信じられぬことであった。

通夜の席、妹は意外に平静で「お兄さん、うなぎのタレ代、どうしよう」ときいてきた。夫は「今はそれどころでないから、あとでいいよ」といったそうだ。

妹の自立

母のことで打ちのめされた私は、母に頼りきって生きてきた妹が心もななく、このままで世の中を渡っていけるかどうか心配で、いつもよりきびしいもの言いをした。

「世間では、頼りにしていた人が亡くなるとお金もなく仕事もなくて、キャバレーにでも勤めて働かなければならない人もいるんだよ。しっかりしなくてはね」

妹は黙って聞いていた。

告別式の日、夫は、「これから三人でお母さんの残した事業をもりたてていきます」と親戚に誓った。

叔父は「四十九日は暮れに入るから、亡くなった姉も避けるでしょうか

ら、法事は百箇日の二月十日にします」と取り決めてくれた。

ところが突然、クリスマスの前日、伯母から「明日、母の四十九日の法要をするように」といつてきた。妹が頼んだことだとあとで知った。

「急にいわれても、明日のことだから今から用意もできない」困惑する私に伯母は、「母のきょうだいだけでもいい。簡単でいいのだから」と重ねていった。

急遽、母方の親戚に電話をして、お坊さんと呼んで、四十九日の法要が営まれることになった。

その席上、叔父が「遺書をみせてくれないか」といった。

「なんで今」と思い、びっくりしながら、日付もない、年月も書いてない、サインもない「遺書」を金庫から出して、叔父、叔母にみせた。金庫の鍵は妹が管理していた。

妹は「遺書」のことをいつから知っていたのだろうか。

白い封筒をあけて、私はみんなの前

で読みあげた。それには遺産は姉妹二人でわけること、晴夫さん、やさしくしてくれてありがとう、うなぎの店の経営は当面、妹があたることなどが書いてあった。

突然、妹が遺書のとおりには執行してくるよう、何べんも何べんも頭を下げた。

「姉は変わっちゃった。このままでは一緒にやっていけない」というのであった。

「お姉さんは、キャバレーにいったって働けと私にいました」と妹は、私の言葉をすりかえていった。夫についても「お兄さんはいい人だ。この間も、タレ代もいらないといいました」と、通夜の席で夫がいった言葉を、自分に都合よく解釈し、あたかも夫がそのようにいったかのようになににいった。

いい人だといいいながら、他方でお姉さん達とはやっていけない、という妹の言葉は夫を深く傷つけた。

夫はうちのめされた。自分の働きづめの一生は何だったのか。

「養子がこんなにつらいものとは知りませんでした」と夫はボツンといった。

私と結婚し、名前を三谷と変えて婿養子同然でありながら、法的な養子縁組をしてこなかった。ただ、ただ、家業のことを思い、働きづめに働いていた。

「籍が入っていなければ、財産は姉妹二人だけのものだ」と親戚はいった。

夫は返事をしなかった。

結局、妹のいうなりになって、私達夫婦のいうことは聞いてもらえなかった。

叔母たちは、「よかった、よかった」といつて帰っていった。

遺産問題については、あとでゆっくり弁護士とも相談して決めようと、妹にもいつていたのに、その晩一方的に、

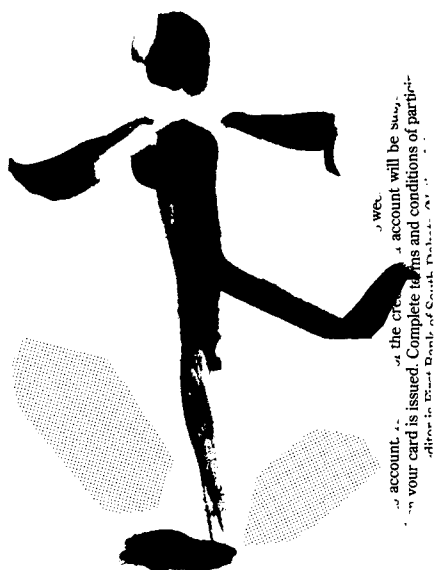
全てが決まってしまったのである。

それ以来、夫は心の内にこもり、私はこの三年あまり、心の晴れる日はなかった。

妹は、母が亡くなって初めてのおそい自立であった。四十五歳まで、母が手離さなかったから。

母は夫を十八年前に亡くし、妹はほどなく幼い娘をつれて離婚したから、その後は母と三人でずっと暮らしてきた。妹の離婚には母の影があった。その母が亡くなって、初めての自立の儀式があれだったのかもしれない。

本人は自立の儀式だと知らず、怒りの対象を私に向けた。私は初めそれに気づかなかった。が、今になって、母を亡くした不安と悲しみを、怒りと憎しみにかえて二人きりの姉妹である私にぶつけ、こういう形で私をふみこえ自立していくのか、と思ったりもする。おそい自立がこんなにも地獄の炎のように身も心も焼きつくし、にがく苦しく私達家族もまきこむものなのか。生前、何度も母に「お母さん、お



母さんの生きているうちに妹をちゃんと独立させて」といったことを思い出す。

幼いころからのこと

私が母のお腹にいた時、父は戦争にいった。父が帰ってきた時、私は六歳だった。すこしして妹が生まれた。父が帰ってこない間、母一人子一人で新宿で母は露店を出し、私は母のそばの行李に入れられ、母の親戚に守られ生きてきた。四歳で終戦を迎え、それから二年して父を迎え、妹を迎えた。

そしてだれもが大変だった戦後、私は妹を母代わりにみてきた。妹を大事にすることは母が一番安心することだったし、父に受けいれられることだと無意識に感じていた。

いつも私はおとなしくて素直でやさしい、妹の「母」であり、強くしっかりした姉だった。結婚する前も、結婚してからも、この関係は変わらなかった。母を先頭に、親子姉妹は一つの家

族のように暮らしてきた。妹の一人娘のことも、私の家の四人の子どもの一番下の五人目として、私も夫もみてきた。

母が亡くなった悲しさは、お前と同じだよ。だのになぜ？ 相続のための再三の出来事は、貴女の心の幼さのためか、私達夫婦を苦しめ傷つけたかを知ろうとはしない。自分の目的の物を手に入れるべく必死でとった貴女の行動、その一つ一つの出来事を思うと無念で歯ざしりするくらいの怒りがわいてきて、幾夜ねむれぬ夜を過してきたか。私の夫はそのために心の病いにかかり、もんもんとした生活をおくっている。貴女は自分の道理を主張するだけでわがろうとしない。貴女に何度話したか、まるで月世界のひと話をしてるように言葉が通じず、空しさで不安といらだちが川のこちら側と向う側をへだてている大きな流れのようだった。そして心が離れていく。貴女の要求へのいらだちでなく、貴女のとったなりふりかまわない手段に、私達家族

★わいふバックナンバー

241号 こうして夫を変えました

242号 私のマスコミ体験

243号 特集ナシ

245号 病氣とのつきあい

248号 ウマイ話にだまされた

249号 夫の職業と妻の生活

250号 女の友情

251号 集合住宅での子育て

252号 うちの子のおばあさん・おじいさん

253号 阪神大震災

老人ホーム／お金と介護

一〇〇〇円

核家族のための

子育てガイドブック 三〇〇円

変わる主婦・

変わらない主婦

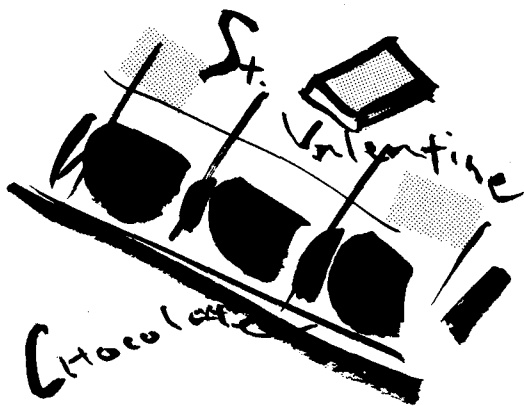
一五〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。

☎〇三―三二六〇―四七七―

が深く傷ついたということを認めない
宇宙人になってしまった貴女。

そして、今になって貴女は、親類は



お姉ちゃん、貴女しかいないからサイ
ンをしてくれと迫る、姉としての責任
を押しつけてくる。

「貴女の子どもでもいいのよ。それに
叔母さんや貴女の従姉妹でも」と私が
いう。

「それに貴女、隣にいた時から、今日
もだけど、父や母の仏壇にお線香やお
水、あたしがいわなければ上げていか
ないけれど、貴女はお母さんがこう
いったと自分の都合のいい時だけ使っ
て、お線香も水も上げないじゃない
の。利用しただけなのね」

私はとんちんかん怒り方をする。

貴女は、「だって、自分の家でお母
さんにいつも上げて、お祈りしている
から、いいと思った」という。

その言葉を聞いて、私はかっとなり、
「そう、それなら手術の承諾書にサイ
ンはしないわ。これもって帰りなさい
」と紙をつきかえした。

「お姉ちゃん、何おこっているのよ」
妹は顔色を変えて、私の冷たい仕打
ちに怒って帰っていった。

私の初めての冷たい仕打ちに涙しな
がら、トボトボ帰る妹を、切ないだろ
う、幼い心の妹の姿を思っただけで、

戸口に立ったまま涙が出てくる。追
かけていって、やさしい言葉をかけて
連れもどし、サインをしてやろうかと
いう思いが、胸をかけめぐる。わかっ
てもらう手だてが見つからないいらだ
ちと不安でいっぱいになりながら。

でも、ノーといえる私、苦しみの中
からノーといえる私を勉強したんだ。
このために、私は苦しんだんだ、妹の
ためにも、いやな時はノーといえる私
を、妹の姉ではない私、「私の私」を
生きるため、妹と縦のつながりでな
く、対等の横のつながりを、人間とし
てのつながりをみつけはじめた。

貴女の土産のバレンタインのチョコ
レートを食べながら、自分でしたこと
に、これでよかったんだと、言い聞か
せている自分に気付く。何度も何度
も、冷たかったかな。妹を連れもどそ
うか。今からでもおそくないと不安に
襲われる気持ちの間にホロにがいチョコ
レートが味が口にあふれる。

私の私をとりもどそう。

夫の元気をとりもどそう。

びた錢

東京都武蔵野市

福田由利子（77歳）

ひと昔前の時代小説や映画などで、ごろつき男が出て来て、そのけんか相手などに、「てめえらにビタ一文くれてやるんじやあねえ」とか、「ビタ錢一枚くれてやらあ」などの科白せりふがよく出てきた。

この間新聞の質問欄に、小学生の「一両は今のお金でいくらくらいですか」との問いに、答は約十万円です、とあった。

それを見て、かねてから気になっていたビタ錢とはなんの事か知りたくなった。

びた錢というお金があるのか、またはびたとは一文という低額のお金をいやしめて、その頭につけるきたない意味を持つ言葉なのか気になってきた。

ある会合で物知りのK氏にびた錢のことをたずねてみたが、ご存知なかった。そのかわり日本銀行の貨幣博物館へ行けば、お金のことは分かるんじゃないか。

ないでしようかと、教えて下さった。

某日、同窓会の帰り、三越デパートの本店前を通りかけ、K氏の教えて下さった貨幣博物館が近くにあることを思い出し、びた錢のことはともかく、いい機会だから見学しよう、友人をさそった。

貨幣博物館は、日本銀行金融研究所の肩書きを持つ、なんとなくおごりかな感じのする立派な建物であった。受付で住所氏名を書き、二階の展示場へ入った。

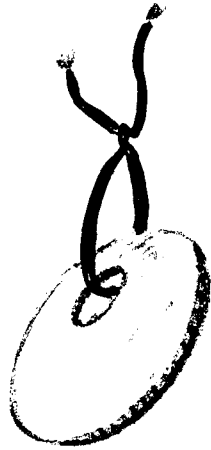
ところがさほどあてになかった。ビタ錢があった。それは入口に近い場所の大きなショーケースの中に、鐮錢びたせんと漢字で書かれ、くわしい説明がついていた。

「ビタ錢で、本当にあったもののね」と思わず声に出し、友人の背をたたくと、友人は「あなたってずい分ビタ錢好きね」と私をやゆしたが、彼女として初めて見るお金であったはずである。

鐮錢は十五世紀後半から十六世紀にかけて出廻った私製の貨幣で、官製の貨幣を良錢と称するのに対して、悪錢と呼ばれた。

代表的な良錢である永樂通宝などにくらべ、その質も形も見劣りがし、また表に書かれた文字なども稚拙、鑄造地も不明で、金へんに悪の字が当てられたのも無理ない。

錢貨は原則として一枚一文だが、鑼錢には島錢とか、加治木錢とか、あるいは鑄写された物もあり、その質の優劣が著しかったため撰錢せんせんということが行なわれ、信長はその質により、ビタ錢二枚、五枚、十枚を良錢一枚とすると定めたそうである。その他色々とかくわしく説明されていたが、私の目的は、ビタ錢なるものの有無が分かればよかったので、この程度で満足した。



きんせんか

茨城県北相馬郡

大庭杷子えいこ

もとより貨幣博物館であるから、我が国古代から近代、現代までの貨幣、紙幣はもちろん、各外国の物もたくさん展示されていて、友人はそれらの物を丹念に見て廻っている。

予想外の收穫を得て、興奮した私は、少々つかれ

て、早く家へ帰りたくなった。身勝手とは思ったが、もっとゆっくり見たいと言う友達をうながし、受付のアンケート用紙に、来館の目的、感想などを記入し、記念の繪葉書えんようしゅを一枚もらって帰った。

繪葉書は、天正越座金てんしょうえつざきんという、天正二年のころ越後の上杉氏が発行した金貨の写しで、美しく、立派なものであった。

二十歳になるまで、私はこの花が嫌いでした。原色のオレンジ色が下品に見えたし、乾いたような肉厚の花弁が野暮よぼったかったからです。極めつけはこの花の飾られる場所でした。たいがい仏壇の前に飾られているのです。おまけに、組み合わせられる花といたら、いかにもそれに仕入れられたような、貧弱な緋色のストック、黄色や白の小菊といったもので、どうもひどく陰気です。

長い間、嫌いだったきんせんかですが、ある時から私の大好きな花の一つになりました。花屋にきんせんかがどっさり並ぶと、

(あつ、春が来た)

と感じますし、元気な葉がたつぷりと広がって丸い花がシャン、と上を向いていると、小さな子供が走り出しそうなところを思い出してうれしくなります。

この花をこんなふう好きになったのには理由があるのです。お勤めを始めて二年目のころです。会社の同僚と食事を始めました。毎月一度、フランス料理、イタリア料理、朝鮮料理、と食べ歩き、ある月はドイツ料理になりました。

その店は渋谷にあり、店の造りはドイツ風でよい雰囲気でしたが、細かいことはよく覚えていません。残念ながら味についても特に記憶にないのです。覚えていたのはただ一つ、食卓に飾られていた花でした。

私の目を捕らえた花は白い彫刻風の花瓶に一本だけ活けられていたきんせんかでした。それは確かにきんせんかなのですが、まるで一度も見たことのない花のようでした。生き生きと、小粋な町娘のように誇らしげに咲いているのです。あの下品に見えたオレンジ色が花瓶の白に中和されて、なんと潑刺と

見えたことか。そういえば、それまで私はきんせんかが仏様の前以外に飾られているのを見たことがなかったのです。

インカ帝国では、きんせんかのことをひまわりと呼んでいた。と、どこかで読んだ記憶があります。確かにこのオレンジ色の元気な花こそ、太陽をめぐるひまわりに相応しいかもしれません。小さな仏様用の花瓶に、ほかの花と一緒にギューギュー押し込められたのでは、その真価が発揮できないのも無理はありません。

それに気付いてからきんせんかは私の大好きな花の一つになりました。

昨年二月、房総を旅した時にたくさんの花畑を見ました。ストック、マーガレット、ポピー、みんな元気に花を咲かせていました。あぜ道では切り取った花を花束にして売っています。私も一束欲しいな、と花を売っているおばさんの所へ近づきました。そこできんせんかの花束ばかりをじっと見ていたら、おばさんに、

「お客さん、きんせんかが好きなの？」

と聞かれました。

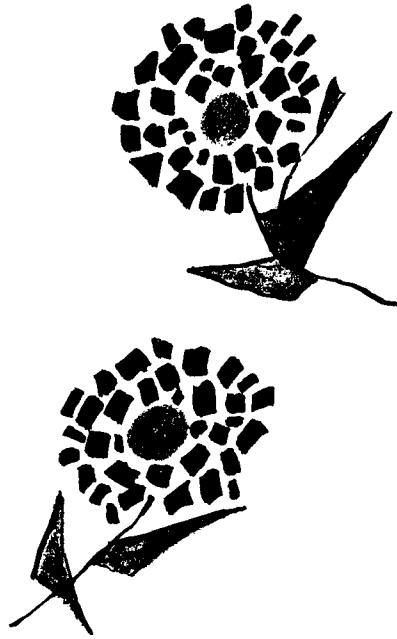
「ええ、大好き」

と答えましたら、

「それじゃこの畑に植えてあるきんせんか、どれで

も切ってきていいよ。十本三百円だ」と言ってくれました。

私は喜び勇んでおばさんに鉢を借り、花畑へ入って行きました。あれこれと選びながら切っていたらたちまち十本になり、花束にして新聞紙に包みしました。きんせんかを切り始めた時は二十本も三十本も



欲しいと思っていたのですが、畑でたくさん葉っぱをつけて伸び伸び育ったきんせんかは、十本で両手で抱え切れないほどの量になってしまったのです。帰りのバスの中で、私はきんせんかの花束を膝に置き、とても幸せな気分でした。膝の上から目なたの子達が笑いさざめく声が、聞こえてくるような気がしたからです。

あじさいの花

大阪府東大阪市

橋本あゆみ

今日、大好きなあじさいの鉢植えを買った。直径十センチほどの小花のボールが十二個もついている。その花びらは、まだ白っぽいブルーだったり、そろそろパープルに変わっているのもあってその濃淡がとても美しい。そして、その形のせいなのか、派手さよりもやさしさを感じさせる。

二、三年前、友人に「あなたが一番好きな花はなに？」と聞かれて答えられなかった。その時は変な話だが「えーっと、彼女の好きな花はなんだっけ」と考えていたのだ。

幼いころからいつもいつも人の期待をうらぎらないように、人を喜ばせるようにと育てられ、生きてきた私には、自分自身がどの花を好きなのかより、友人に同じ花を好きだといって喜んでもらおうと考えていたのだ。しかし、とっさに思い出せなくて私は「特別好きな花ってないわ。みんな好き」と答えた。その時友人の私を見る目がとても不満そうで、私は少し傷ついた。

そうしているうちに人の気持ちばかり考えていた私にも限界がきた。あまりにも自分で勝手に傷つきすぎたのだ。そんな時、フェミニストカウンセリングの講座に出会い、私は少しずつありのままの自分を見つけて、それを認めることができるようになった。好きなものは好き、きらいなものはきらいと、誠意をもって言うことは悪いことではないと思えるようになった。

自問自答してみる。好きな色は？ 黒。好きなことは？ 本を読むことと文章を書くこと。そして好きな花は？ あじさい。

今度は本当にスムーズに言えた。友人にたずねられた時には思いもなかったのに、自然にその名が心に浮んだ。

あじさいは私の大好きな花であると同時に神戸市の花でもある。私は生まれも育ちも神戸だが、ご存じの通り、思い出深い場所はどことく自然の力で壊されてしまった。

しかし、きつと六甲山の登山道のわきにたくさん咲いていたあじさいは、今年も変わらずやさしい紫やピンクの花をつけるだろう。そして咲き誇るといふよりも、雨にうたれてしっとりと咲き、ひと雨ごとに色濃く美しくなっていくこの花たちに、今年ほど神戸の人たちがなぐさめられることはないのでは



ないだろうか。

一日一日と我家のあじさいがその色を変えていく。人生や心、そして自然も移り変わっていくものであることを、あんなに小さな花びらで語っているように思える。

これからどんなあじさいに出会えるのか。梅雨あけまでの私のなによりの楽しみである。

(え・田沼千恵)



日本のお父さん

ドイツ・ハンブルク市

●三野友子（31歳）

ある日本人の死

二カ月ほど前、夫が仕事から戻ってくるなりぼそっと「A社で過労死が出たらしい」と言った。

次の日子供を幼稚園に連れて

行くために駅に行くと、日本人の喪服の集団が電車を待っていた。ああそうか、きのう聞いた過労死された方のお葬式なんだ……。異国の地で、少し異様に映る黒服の集団を見ながら一人つぶやいた。

狭い日本人社会なので、こういう話題は超スピードで伝わってゆく。「知ってる？ 知ってる？ A社で過労死が出たらしいわよ」というのが、道で会った人とのあいさつ代りとなる。しかし、後で聞いた詳しい情報によると、A社はそう大して激務というほどではなかったらしいし、死因は心臓発作だが、本当に過労死かどうかはわからないとの事だった。

事実はどうであれ、私はこの日本人の死に少なからずショックを受けた。というのは、私の夫は、ドイツに来てから超激務の日々を送っていたからだ。

海外駐在・理想と現実

東京で過ごした四年半も夫は本当に忙しかった。仕事で忙しい事は勿論の事、夜遅く仕事が終わってからの「おつきあい」にも忙しかった。私は私で、二人の幼子を抱えて慣れない東京暮らし。夫は夜中にこっそり帰ってきて、朝七時には家を出てしまうので、毎日ほぼ母子家庭。

当然私もイライラがたまり、そのはけ口を夫に向けると、今度は夫が、「あんたが子育てでイライラしている姿を見たくない」という信じられない言葉まで吐いて、益々おつきあいに忙しくなった。家庭に背を向けた彼は、まさに「帰宅拒否病」だった。

これから私はどう生きていけばいいんだろうと真剣に思い始めたころ、夫のドイツ転勤が決

まった。少しとまどったが、生活を大きく変えるチャンスだ。ドイツに行けば少しは仕事が楽になるかもしれないし、何よりも家庭を大切に、人間らしい生活ができるだろうと大いに期待した。

しかしその期待は粉々に砕けて宙に飛ぶ。夫の会社は日本から来た社員が夫を含めて四人のみで、あと二十数名は現地採用のドイツ人。当然日本人の負担がものすごく重くなる。夫の帰宅時間は早くても夜十時半から十一時。遅いと朝方五時ごろタクシーで帰ってくる。

取引先の企業ははぼ一〇〇パーセント日本企業なので、当然「接待」という日本人ならではのお仕事が入ってくる。外国にいてもまぎれもなく日本の世界である。週末に死んだように眠る夫を見ながら、過労死は他人事ではないと思った。

ドイツのお父さん

こちらで暮らすようになって、二カ月はどたったある日の話。いつも曇り空のハンブルクにしてはものすごく天気のいい日だったので、子供達と午後公園に行くことにした。ついでにそのころから仲よくなり始めた、上の階に住むベティーナと子供のベネディクトを誘うことにした。

玄関先で私の提案を聞いたベティーナはとっても喜んでくれたが、「今日は金曜日で、もう今三時だから、そろそろ夫が帰ってくるの。またいつか行きましょう」と少しためらいがちに言った。

ドイツは金曜日半ドンだったという事をその時初めて知った。彼女と立ち話しているとほどなくして、ご主人のフロート氏がワインらしい包みと花束



なぞ抱えて、鼻うたまじりにいそいそと帰ってきた。

えー!! 出来過ぎ! まるでこれは外国のホームドラマの一場面じゃない!! 日本ではサラリーマンのお父さんが金曜日のお昼に、真つすぐ帰ってくるなんて信じられない事だ。

子供もこれには驚いたようで、「さきちゃんのお父さんはどうして遅いと?」と泣きそうな顔で聞いてくる。

数日後ベティーナが「ご主人はいつも何時ごろ帰って来るの」と聞いてきたので、

「夜の十一時ごろか、遅いと朝方になる事もあるよ」

今度は彼女が信じられないという顔をして、

「じゃあ彼はいつ子供と会えるワケ?」

「平日は子供が寝てる時に帰ってきて、寝てる時に出かけるからほとんど会えないし、週末は

疲れてひたすらねてる」

「日本じゃ皆そう？」

「皆じゃないけどほとんどがそう」

「えー信じられない。それで何も問題起きないの？」

そう、問題だらけだ。家庭のお父さんの影が薄すぎる。いじめ、育児ノイローゼ、家庭内暴力、これらは全部とは言わないまでも、お父さん不在が原因の一端を負っていると私には思えて仕方がない。

ドイツの休暇

日本人である私には全く信じられないが、ドイツ人はとにかくよく休暇を取る。有給休暇（三十日前後）をきっちりこなすらしい。夏休みは三週間というのは（勿論お父さんのです）当然の事で、皆やれイタリアだトルコだスペインだと出かけていく。また冬期も一〜二週間休

み、スキーへ行ったり南のほうへ行く。

個人の商店ですら、平気で三〜四週間夏休みを取るのだ。

社員の一人一人が三週間もの夏休みを取っても、ドイツの企業は回っていきけるという事実にはただただ驚く。これだけ皆がのんびり休みを取っていても、ドイツはヨーロッパ一の経済国。ちなみに夫はやっと十一日の有給を取っただけ。これは日本に居た時も同じ。一体日本はどうなってるの、と叫びたくなるのは私だけ？ ドイツに暮らしてドイツにかぶれている訳ではないが、彼らの、精神的にも豊かな生活を見ると、日本ってどこかが間違ってる気がしてならない。

戦後五十年たって日本がこんなに豊かになり、経済的にも世界のトップ集団に入る事ができたのも、馬車馬のように働いて

きた企業戦士であるお父さん達のお陰かもしれないが、そのために私達が失ってきたものも多しはずだ。

ハンブルクのお父さん

ハンブルクには六、七軒の日本料理屋があり、その中の高級な店になると、ほとんどが日本企業の接待会場に使われる。皆ここで、高級品であるすしを食べ、そしてカラオケに興じ、お酒を飲む。接待がある日は、ほとんど夫は夜半にご酩酊で帰ってくる。接待ではなくてもおつきあいで日本料理屋に行き、へべれけになって帰ってくる事もしばしば。

外国での高級日本料理屋は目の飛び出るほど高い。仕事の後そういう所で「ちょっと一杯」やって「ちょっと一曲」やろうものなら、一晩で二〜三万円は消える。

自費出版は

“わいふ”へどうぞ！

“わいふ”編集部では自費出版の製作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違いますが、市販よりは確実に安いのです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。イラストも用意できますし、文章をお書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょうか。

ほとんどのドイツ人は、仕事の後の「ちょっと一杯」はやらずに家に直行するらしい。

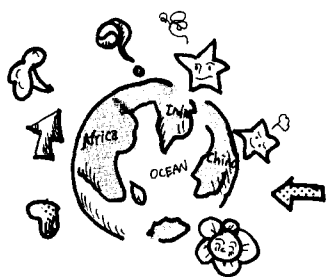
ハンブルクの街中にある日本料理屋から、背広姿の何組ものご酌酊集団が真夜中に出たり入ったりするのは彼らにはとても奇異に映るだろう。まるで日本の歓楽街の一部がハンブルクにワープしてきたかのよう……。

駐在員にできること

たとえ異国で赤ちょうちんのれんをくぐっていたとしても、数年外国に暮らしている以上、その国の人の生活ぶりがいやでも目に入ってくる。また日本に居た時に見えなかった日本の欠点も見えてくる。

外国駐在の日本人は私が思っていた以上に多い。全て合わせたら十数万人。これだけたくさん外国生活を経験した駐在員

や駐在員夫人達が、少しでも他の国のよい部分を日本に輸入してくれたら……。少しずつ日本は変わっていかないだろうかと



思う、私の考えは甘いだろうか。少なくとも、過労死などという悲しい死に方は、一日も早く日本からなくなってほしいものだ。

日本のTV

アメリカ・リトルロック市

●伊藤琴子（37歳）

「これ、日本からのおみやげね、そう言って春休みを利用して訪ねてきてくれた友人は服、週刊誌、そしてビデオテープを取り出した。

「ありがとっ!!」アメリカでも内陸部の田舎に住んでいる日本人にとって、こういった類の日本のおみやげは、とても嬉しい。

私は久しぶりで見る日本のTV番組の数々に期待を寄せた。

明石家さんまの「恋のから騒ぎ」は、本音が出ておもしろかった。久米宏の「ニュースデーション」は、丁度神戸の大地震直後ということで、レポートに臨場感があり、説明がわかりやすく、「ほほう、日本のマ

スコミもやるじゃないか。レベル高いのね」と思った。

次は、ゴールデン映画劇場である。今夜は「ひとひらの雪」。

主演は津川雅彦と秋吉久美子。津川雅彦は妻と別居中で、既に入愛人がいるというのに加えて、秋吉久美子が恋人になってしまおうという、とても「うらやましい」、フツの男の人では考えられないような状況にある。秋吉久美子は美しい人妻という役どころである。

この映画、タイトルからしてえらく文学ものののかなーと、最初は思っ見ていたけど、すぐわかったのよ。ポルノ映画の一手手前のものってことが！

不倫の「愛」も、甘い言葉と現実、男と女の恋のかけひきも、昔から世界中で、小説や映画の題材になってきたことは私も知ってるよ。でもね、テレビのゴールデンアワーに、おっぱ

いまさぐる裸の津川雅彦や、着物の裾をまくりあげたら、パ、パンツはいてない!!秋吉久美子とか出てきて、私はびっくりした。こ、これ全国的に放映したの!? エッ!? (ハイミスの欲求不満とか、ねたみで言っているのではないゾ)

TV局がどんな番組を流そうと、スポンサーがつこうがつくまいが、そこら辺は言論の自由、表現の自由とか保証されていていいと思うけど、体の一部で、ごく自然なものあそこの毛(ヘア)がどーの、こーのと、つい最近まで言っていた国民が、一般のテレビ局が放映するこの手の映画をお茶の間で見てると思うと、やっぱり日本って不思議な国ね、となってしまう。

私は別に、芸術を云々批判する気はないし、ポルノ映画を日本では、テレビ放映絶対にする

な!と、言っているのではない。ただ、物事には、時と場所というのがあると思うのね。夜の九時や十時じゃ、起きている子供たくさんいるでしょう。

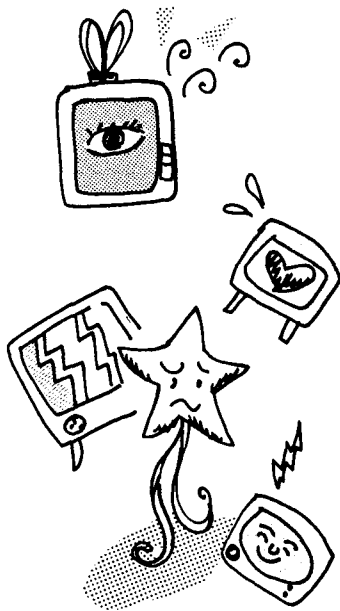
最近、アメリカのテレビ見てて気が付いたのは、各々の局が放映する映像について「警告」を出すようになったことである。例えば、ソマリアで飢えている人達や、中近東で血にまみれて死んでいる人達がニュース

で出る時に、「今からお見せする映像は、云々」と、アナウンサーが言う(食事の時は有り難いよ)。映画にしても、番組にしても、「子供向けでないの」で、お子さんのいる家庭では親のガイドランスがいります」と、お知らせしてくれるのである。暴力、罵言など、子供と一緒にお茶の間でひやひやして見るということはない。

ゴールデンアワーに、日本で

この手の映画とは、驚きました。やたら女の裸を利用するコマーシャル、広告、テレビ番組、女性の性をバカにしたようなコミック。

これらが大手を振ってる日本は、あくまでも男の社会であり、男の論理、男の意見、男の金、そして男のやり方で、文化までもが形成されているように思われるのですが、女が戦う余地はないのかしら?



戦

後

50

年

記

念

連

載

シベリアの青春 2

大阪市住吉区

福井 秀雄

そうこうするうち、八月も末だった。近々帰国に向けて出発するらしい、と情報が流れた。それはなぜかシベリアを経由してというものだった。

その理由としては、当時満州南部では、毛沢東の中国人民解放軍（中国共産党軍、八路軍とも呼んだ）と蒋介石の国民党軍（中央軍）が軍事対決をしている。そのため治安が極めて悪い。したがってソ連側の好意により、シベリア経由でウラジオストクから帰国することになる。という実にもっともらしい説だったのである。

満州の北の果てに居る私たちは、シベリア経由も満州を南下するのまさしで変わりない距離である。何処からだっていい、と、頭の中は帰国の二文字で一杯、他のことなど考える余地もなかった。

九月一日、ソ連側から、突然明朝出発の命令が出た。いよいよ日本に帰れる。

「わあーっ！」と歓声が上がる場面だったがそれはなかった。それぞれの顔に悦びの表情はあったものの、心の片隅に一抹の不安があったからである。

後になって知ったことだが、私たちが、「やっと国へ帰れる」と出発した九月二日は、日本が正式にミズリー艦上において降伏文書に調印した日であった。私たちがシベリアに向かった日と、降伏調印が行なわれた日が奇しくも同じだったということに、何か偶然ではないものを感じたのだがどうだったのか？

さて、私たちの人数は一体どのくらいだったか、正確にはわからない。たぶんわが大隊のみ千数百名余りの編成だったと思う。隊列が動き出して間も

なく孫^{ソノ}呉^コ駅前にさしかかった。その広場に真赤にサビた日本軍の銃器が山と積まれているのを見て、あらためて敗北感をひしひしと感じた。

今私たちは、ソ連軍が進攻して来た国道を逆方向に向かって歩いているのは確かなのだ。その方角は北か、それとも北東なのかさっぱり見当がつかない。それによって国境までの距離はずいぶん違ってくる。

このあたりの時間経過については記憶が薄い。

重い荷物を背にひたすら歩き続けた私たちは疲れ果ててよろめいていた。



防寒具に身を固めた第一小隊

二日目の夕方だった。黄昏の色が西方に連なる興安嶺の山並を茜色に染めて、夕日が沈もうとしていた。空が真赤に燃える壮大な満州の落日を、これが最後かも、と歩をゆるめながら少々感傷的になりながら眺めていた。

そんな時、

「オーイ、川だ、川が見えるぞー!」と前方に声が上がった。私たちは一せいに歩を早めた。

目の前に黒々と光る流れがあった。対岸は夕闇に霞んで見えないが、それはやはり川だった。ソ満国境を流れる大河アムール川（黒龍江）だったのである。



ソ満国境はアムール川の流れのちょうど真中と決められている。したがって、ここは国境であるのは確かなのだ。だが一体どの地点なのかはさっぱりわからない。すぐ左手に集落が見えるのだが、それもこのあたりの地図で私が唯一知る国境の町、「黒河」（対岸はブラゴベシチエンスク）ではなさそうだ。どうもそれよりずっと東に位置すると思われる。

到着早々から気づいていたのだが、その集落にはかなりのソ連兵が駐留しているらしく、風に乗ってそのざわめきが聞こえてくる。戦勝に浮かれたソ連兵たちが、焚火を囲み、アコーディオンを鳴らしてコサックダンスに踊り狂う姿が、時折燃え上がる炎に浮かんで見える。

このようにソ連軍が駐留していることを考えると、ここは日本軍移送のために設置した、シベリアへの渡河地点に相違ない。私たちは、バカ騒ぎしているソ連兵をよそ目に、もっと先々に思いを馳せていた。

「とうとう黒龍江まで来たか」

「向う岸に渡りシベリア鉄道でウラジオ行きだ」

「まあ、余分にみても、あと半月もすればわが家だ」

川岸に立ちながら、私たちの望郷の会話ははずんでいたのである。

その夜は川原で野宿することになった。日が落ちてからはやけに寒くなってきた。互いに体を寄せ合い、食事をしながら帰国の話は尽きなかった。

さて食事が終わって間もなくのことである。

「只今より、中隊長殿の訓示がある。全員ただちに整列せよ」と号令があった。

即座に整列。姿勢を正した将兵の姿は、帰国という思いがあるせいか、その表情は意外なほど毅然としたものだった。

中隊長が隊列の正面に現われた。一瞬静謐な空気の中に緊張が漲った。

終戦から今日まで、中隊長との接触はあの閲兵の時以来である。孫呉を出

発してから、隊列の先頭に立っているため会うことはなかった。とにかく私たち初年兵にとっては、雲の上の人だったのである。その少尉の襟章はまだ輝いているが、腰の軍刀はすでにない。

僅かな月明りのなかで、心持ち蒼ざめた顔の中隊長は、静かに沈痛な面持ちで、終戦から今日に至るまでの兵の苦勞に対して、ねぎらいの言葉を述べたあと、

「只今より、われわれの今後のことについて話したいと思う。皆心して聞いてほしい」ときりだした。しばし間をおいて、

「われわれは明日、この黒龍江を渡りシベリアに連行される。ソ連軍の捕虜となったのだ」

と一段と高い悲愴な声の中隊長の口をついてでた。

一瞬隊列にざわめきがあった。中隊長はこれを制するように、ゆっくり兵たちを見回しながら、

「諸君の堪え難い気持ちはよくわか

る。だが、意を決して従ってほしい。祖国復興のために、いや、百年後の日本のために、われわれはソ連で働かねばならないことになった。今のところいつ祖国へ帰れるかはわからない。しかし、決して落胆することなく、心をしっかり持って、日本人として軍人として恥ずかしくない行動をとってほしい。皆で団結して事に当たったなら、必ず好い結果が得られるはずである」と述べた。

アムール川を背にして立つ中隊長のほほに光るものがあつた。それは敗戦のくやし涙か、それとも兵士たちの今後のことを思っているものだったのか？ その訓示は涙ながらの哀切に満ちたものだっただけに、中隊長の思いは痛いほど伝わったのだ。

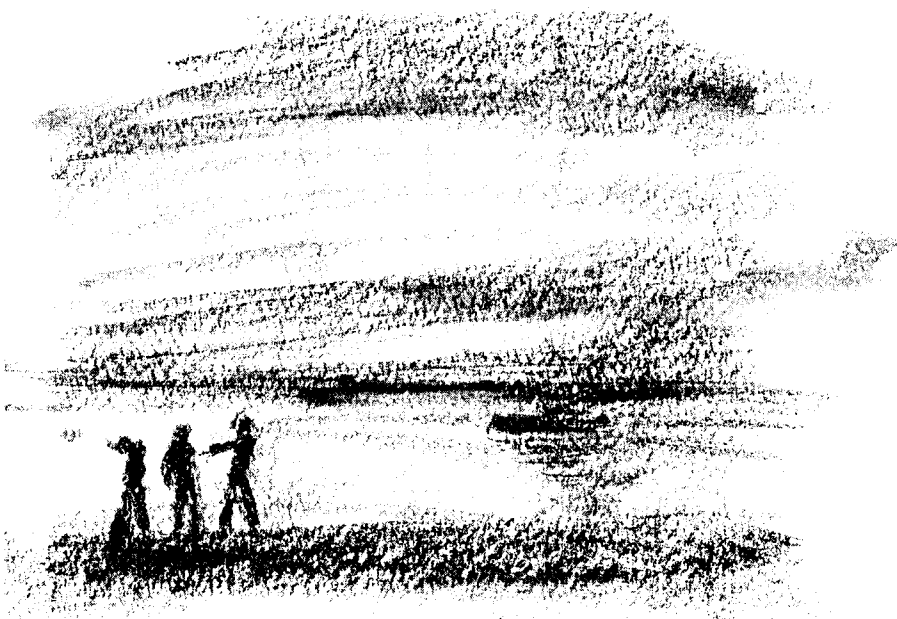
訓示が終わわり中隊長に対する敬礼が行なわれた。と同時に、せきを切ったようにすすり泣きがもれ始め、ほとんどの将兵が男泣きに号泣した。いまや私たちの帰国の夢は無残にも打ち砕かれてしまったのである。

訓示の中で、必ず祖国へ帰れる日が来る、という言葉がなかったのが兵たちの心の痛手を一層大きくした。百年後の日本のために、ということは帰る望みがないということではないのか。

もっとも、このことは終戦直後、すでに日ソ双方の間で了解済みのことだったのである。兵士の心の動揺と反乱を恐れて、あらぬデマを流しながら、時を稼いでいたのだ。のびきならない地点まで連れ出して発表しようという、計画的なものだったのだ。つまり私たちは、まんまと騙されてしまったといってもよいのである。

「シベリアで戦犯として処刑される」「日本人男性はすべて去勢されて子孫を断たれる」

またもや物騒な話が飛び交うなか、それぞれの心の内では、軍の一方的ともいえるこの処置に対して、悲憤慷慨（こゝろが）していたことは言うまでもない。だが、敗れたりと言えども、軍構成が歴然と存在している今、一言の反論すら許されず、命令に従うしかなかったの



me

である。

次第に言葉も少なく、それぞれが背嚢（？）を枕に川原に横たわった。毛布にくるまった兵士たちの姿が嗚咽で震えていた。誰一人として眠っている者は居なかっただろう。

私自身も、「こんなはずじゃなかった。一体どうして」と悔悟の念ばかりが脳裏を駆け巡っていた。

もとはと言えば、五族協和、王道策土建設などという夢のような国策にまどわされたのが間違이었다のだ。今となっては誰を恨むわけにもいかないのだが、心の内は憤懣やるかたなしであった。

眠れぬ一夜が明け、やがて船が来た。それは舷側に水車の如きものついていた、私が初めて見る外輪船というものだった。のろろと乗船を始めた日本兵に、

「ダワイ、ダワイ、ヴストレ（早くしろ）」

とソ連兵の怒声が飛んだ。ここまで連れ込んだらこっちのものだと言わんば





大平原と湿地帯

かりに、ソ連兵の態度が急にでかくなったのだ。容赦なく私たちはマンドリン銃にこづかれながら船に追い込まれた。

「ロスケめ、急に偉そうになりやがって」

と腹立たしかったが、銃口の前では何の抵抗もできず、捕虜であることを再認識せざるを得なかったのである。

いま三途の川ならぬアムール川を越えたのである。行き先は決して極楽などではない。地獄が待っているに違いないのだ。

ときに昭和二十年（一九四五年）九月五日。私は十七歳六カ月になっていた。

強制収容所

さて、アムール川を渡った私たちは、隊列を整えてシベリアの大地を歩き始めていた。それは、昨日とは違って変わった憔悴した姿だった。誰一人として言葉を発することなく黙々と、あれほど威勢のよかった石田古兵殿ま



でもすっかり無口になってしまっていた。

私自身も、持前の小心さから、先々の不安に戦ってはいたが、この千名を越える大勢の中で、しかも年長者に囲まれているということもあってか、正直言って心強く感じる面も多少あった。そして、いくらなんでもこれだけの人数を虐殺したりはしないだろうと、自らに言い聞かせながら歩いていた。

やはりシベリアは広い。早くも初冬の気配のする荒涼とした草原には人家らしきものも見当らなかった。延々と続いていた草原が農地に変わって、ようやくその先に小さな集落が見えた。われわれの隊列が近づくと、ばたばたと村人が飛び出して来た。

「ヤポンスキー、ヤポンスキー（日本人）」「ワイナブレイン（捕虜）だ」、などと、口々に叫びながら、中にはつばを吐きかけ、石を投げつける奴までいる。あわててやって来たカンボイ（ソ連監視兵）が追い払う一幕もあった。

夜宮の場所となったのは、広々とした「コルホーズ（集団農場）」の近くであった。

私たちの農場所となったのは、半地下の穴倉のような所だった。ここへ押し込められ、狭くて横にもなれない状態のなかで、私は前後不覚と言えるほどに眠ってしまった。朝、目が覚めて驚いた。はだけた胸が虫に喰われて真赤になっていたのである。それはシベリアで最初に受けた南京虫の洗礼だった。満州にも南京虫はいたけれど、その比ではないほど凄いものであった。

外で朝食を済ませた私たちは、コルホーズの管理事務所の前に整列した。あたりを見渡せば、地平の果てまでも続くかにじゃがいも畠が広がっている。どうやらここでも掘りをやらされるようだ、各自に木のへらが渡された。

広大な農場を有するシベリアでは、いも掘りも機械化されているものの、行きがけの日本人を使って、人海戦術でこれをやらせようというのだ。

農場を管理している数名のソ連人とわがほうの指揮官が何か打ち合わせをしている。

私たちは一列横隊に並んでも掘りを始めた。百姓生まれで開拓団育ちの私は、いも掘りなぞなんという事もないと思っていたのだが、古兵たちの中には、元関東軍の沽券にかかわるでも思ってたか、

「なんだ、いも掘りなんかさせやがって」と畠の中でじゃがいもを蹴っ飛ばして息巻く者も居た。だが、このじゃがいも一箇を血眼で捜し廻るほどの飢餓地獄がやがて訪れようとは、この時誰も思ってもいなかったのである。

こんな私たちに意外なことが聞こえてきた。農場で働くソ連民間人が、ニコニコと愛想よく、

「ヤポンスキーサラダート、スコーラ、トウキョーダモイ（日本兵はもうすぐ日本へ帰れる）」と言ったというのだ。また、こう聞いた者もいる。

「ハラシヨラボータ、スコーラダモイ（よく働いたらすぐ帰れる）」

帰国という言葉に弱い私たちは、この「ダモイ（ここでは帰国の意味）」というロシア語にすっかり喜んでしまった。

だが、この民間人の言ったことは、まったくのまやかしのデマであった。私たちは、これからも何回となく、「スコーラダモイ」というロシア語につき合わされて、一喜一憂することになるのである。

シベリアはいま秋の収穫期なのだ、その作業を手伝いながらの行軍が続いた。

九月の幾日だったか？ シベリアへ入ってからそれほど日が経ってもいないのにこのあたり日付の記憶があいまいになっている。その日は作業はななく、朝から歩いていた。方角もわからないまま、かなりの時間が経過したころ、草原の中を一直線に延びる広い道路に出た。ここでしばし小休止となったので、私たちは草原にごろりとひっくり返って、晴れ上がった空を見上げているうちについまどろんでしまった。

どのくらい経ったか。

「おい、トラックだ。トラックが来るぞ」という声に起き上がった。砂塵を巻き上げて数十台のトラックが近づいてくる。

「整列！」と声がかかった。ことはソ連側の予定通りに進んでいるようで、トラックが私たちを迎えに来たのだ。目の前にズラリと停車した大型トラックは、くすんだカーキ色のアメリカ製のものだった。それは私たちを乗せると猛スピードで走り出した。

その方角は、日の傾きから見ると明らかに西である。私たちには今だに帰国の夢は消え去ってはおらず、若しや、という思いもあったのだが、トラックは、ウラジオナラぬモスクワ方角へとひた走りに走っている。

草原の中をどのくらい走っただろう、やたら揺れる身動きもならないすし詰めの車上で、座って居るのが辛くなっていた。

「おい、町らしきものが見える」と言う声に私たちは立ち上がった。遙かな



先にそれらしきものが灰色に盛り上がって見えている。

「あそこがわれわれの目的地に違いない」などと言いつ合っているうちに、車は町に入った。

しばらく走り続けて、トラックは町はずれとおぼしき所に停車した。そこは幾棟もの細長い兵舎の如き建物が並んでいる所だった。しかも、広々としたその敷地は高い柵に囲まれ、角に立つ望楼には歩哨が立っている。物々しいものであった。

やはり、ここがわれわれの收容される場所らしい。車を降りた私たちは、それを見てもさして驚きはしなかった。すでに捕虜であることを充分自覚していたし、じたばたするほどの気力すらなかった。私たちは衛門を入り、宿舎に入る前に広場で夕食の準備をした。すっかり食糧が底をついていたので雑炊を作って食べた。

食後、割り当てられた宿舎に入った。その中を見ると、両側に荒木で不揃いの板を張りつけた寝台が二段に作

られている。上段は座っていても頭が天井に当たるほど窮屈である。暗い裸電球に照らされた室内は、先住者の苦渋を物語るようにあかと汗がしみ込んで、このうえなく陰気なものだった。

これが、私たちがシベリア入りしてから何度となく聞いた「ラーゲリ（強制收容所）」だったのである。もともとラーゲリとは囚人收容所を言ったものであり、おそらくこども、もとはそれだったに違いない。

私たちは互いに物言う元氣もなく、寝台に登ってごろりと横になった。

翌朝、千数百名の私たちを前に、ナチャイニク（收容所長）が通訳を介して次のように告げた。

「諸君はここで軽い労働に従事してもらう、辛いだらうが、真面目に働けばいずれ家族の待つ祖国へ帰れる。がんばってもらいたい」

いずれとは一体どのくらいのことなのか？ 帰れる、と言う言葉だけを信じたかった。

——つづく——

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、わいふから巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。東京から遠いところ（大阪、新潟など）になると、田中か和田が一人で行って一回だけの講座ですが、初めて書く人にも分かるように、原稿用紙の使い方から自分史、インタビュー記事などのまとめ方までご説明しています。お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げますので、それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてくださいれば、引き受けてくれるところも多いと思います。

（写真提供・筆者）

（文・佐藤瑞江子）

おさない子を育てる



ああ、保育園

名古屋市中区

村瀬智子 (35歳)

三月十三日、郵便受けに入っていた区役所からの手紙。開けるときは、まるで試験の合否の通知のように緊張した。中には「保育所入所措置、内定」の文字。思わずやったーと声が出てしまった。

私が今の添削指導の仕事と出会ったのは、長女が一歳半の時だった。夫の収入だけに頼っていることに疑問を感じはじめ、子供がいても家でできる仕事ならということで試験を受けて採用された。以来、六年間、半年ほどの産休を二回とったり、夫の仕事の関係で名古屋に来て、転勤という形でいまままで何とか続けてこられた。

ただ、家でできるというのには、ちょっとした落とし穴がある。一つは賃金が安いということ、一つは家族（特に夫）に私が仕事をしていると認めてもらえないことだ。

夫は、家事はすべて妻がすべきだとまでは考えていないけれど、家でできる仕事なのだから、家事は分担する必要はないし、時間的にもできないから

しなくていいのだと思っているようである。

子供が寝てからさせて仕事をすると思うと夫が帰宅したり、いろいろ用事を頼まれたりするとこちらもついイライラしたり、私だけの時間がほしいと思ったりにしてしまうのである。だれにもじゃまされずにこの仕事とじっくり向きあうには、現在一歳の長男が幼稚園に入園するまでただ待つしかないのだろうか？と気分は暗くなるばかりだった。

そんな時、女性の自立や女性学に興味を持っていた私は、昨年の十月から四力月間市立の短大で「女性の自立と現代の生活」という講義を聴講した。一歳の長男を、時間単位で預かってもらえる施設に預けて聴く週一回の講義は、とても有意義なものだった。

講義の中でグループ討議の時間もあり、保育施設の不十分さから働く意志があっても働けないことを嘆いた私に、教授の一言。「あなたは実際に保育園を探してみましたか？」

その時、私は一言も言葉を返せな

かった。働いて自立したいと強く思いながら、また、三歳までは母親の手で育てるべきという例の神話に反発しながらも、結局自分は今まで何も行動しなかったのだ。

さっそく次の日、区役所の児童福祉課で、住んでいる地区での保育園の欠員はないか尋ねた。すると幸運にも家から一番近い保育園に二名の欠員があることがわかり、添削をしている会社にも就業証明書の発行を依頼した（六年近くこの仕事をしていながら、就業証明をもらえることを、恥ずかしながら私は知らなかったのである）。

一カ月ごとに入所希望者をしめきるとのことです。待つこと約半月。区役所からの電話では残念ながら選にもれたとのこと。やはり現在の内職のような仕事では、優先順位からいっても入所は無理なのかと思ったが、四月からの新年度の入所申請に切り替えてもらい、期待せずに待つことにした。

待つこと二カ月半。結果は本当にうれしいしらせだった。聖書の言葉では

ないけれど、叩かなければ門は開けないことを改めて感じた。

さて、これから姉たちより二年早く社会に出る一歳の長男は、保育園の中でどんな経験をして成長していくのだろうか？ 自分以外人気がない家の中で、自分のペースで思いきり仕事ので

きるのだという解放感。また一方で、「ママ」とすぐに甘えてくる子供の感触を、楽しむ時間が少なくなってしまう後悔している気持ち（量より質と考えればよいのだが）。入園が決まったのに、いざとなると複雑に揺れる心をもてあましている。





私たちの出発

たび だち

東京都品川区

潮田京生子 (33歳)

知可子(娘、二歳)は、この四月三日から保育園に通い始めた。昨年十二月に区の保育課に「四月から入園希望」の申請を出しておいたら、求職中であつたが、すんなり許可された。それで、「四月中に仕事を見つけないこと」という条件つきではあるけれど、晴れて保育園児となれたのだ。

赤ちゃんの時から母子ベッタリで過ごした二年間。そこからの脱却。

「やったー。これで自由だぞー」と心は叫びながらも、入園日が近づいてくると、無性に寂しさが募ってきた。スーパーと一緒に買い物に行つて、いつもなら絶対に買わないおもちゃも、「いいよ。もうすぐ保育園に行くんだもんね」と許してしまう。まるで、これから一生、離ればなれになるような悲愴感におそわれる。いやがる娘をきつく抱きしめながら涙が出てしまう。おかしいな。どうしてこんなにグラグラするんだろう。

そして、初登園の日がやって来た。園では薄着と決められているので、T

シャツ、その上にトレーナー、半ズボンを着せる。さらに素足に汚れたくつ。みるみる保育園児に変身だ。着がえがいっぱい入ったバッグを抱え、子どもの手を引き、ゆっくりと出発した。

園に着くと、子どもの名前が書かれた引き出しに真新しい下着や着がえを入れる。それが終わると登園時間を記入して、いよいよ別れる時が来た。彼女は当然、ここで私と一緒に遊ぶと思っている。私が扉を閉めて「バイバイ。がんばってね」と言うのと、あわてて駆け寄ろうとした。その間に保母さんが割り込み彼女を抱いて私のほうを向き、「行つてらっしゃい」と微笑んだ。知可子は手を伸ばし泣いている。顔はグシャグシャだ。保母さんの腕を押しのけようと体全体に力を入れて泣きじゃくっている。

「ああ、だめだ」思わず鼻の奥が熱くなり、私は足早く園を出た。

その日は初日ということで正午に迎えに行った。次の日は午後三時。さらに次の日は四時半と徐々に時間を延ば



した。この一週間は毎朝、別れる時に
ワァーと泣いていた。しかし、その後
は大丈夫らしい。午前中にみんなと散
歩に出かけ、十一時すぎに昼食。そし
て昼寝、おやつ、また遊び。そんな規
則正しい集団生活の中で、彼女は彼女
なりに一生懸命なのだろう。

一人でちゃんとごはん食べているの
かなあ。

一人でちゃんと寝ているのかなあ。
そのけなげな姿を想像すると、いじ

らしくてまた涙が出そうになる。

おかしいな。私って、もっとドライ
な母親じゃなかったっけ。

どうにか仕事も決まり、これからも
ずっと彼女は保育園に通う。

おかあさんもがんばるからね。ちー
ちゃんもファイトだよ。

やさしい保母さんに励まされ、園児
のおかあさんたちの温かさに支えられ
て、この春、私たち母子は飛び立ちま
す。

お友達に“わいふ”を
おすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださっ
た方には、次のように購読期間を延
長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださる
ごとに誌代プラス送料とも一号延長。

“わいふ”年間分をプレ
ゼントにお使いください

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、
遠方のお友達とのコミュニケーションに
どうぞ。お申し込みいただければ、
まず新読者にきれいなプレゼン
ト・カードをお送りしてお知らせし、
以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同
様に、お一人につき一冊分延長させ
ていただきます。



うるさい?
かわいい?
しょうがない??

東京都武蔵野市

加藤泰子 (36歳)

「うるさいわね」

低い小聲で私のすぐ後ろの人はつぶやいた。連休に帰省するための新幹線の切符を受け取るために並んでいた駅の窓口でのことだ。その言葉は、横のほうのベンチに待たせていた私の三人の子どもたちに向けられていた。その人は、五十代くらいの女性（声だけで想像）らしく、その人の親か、姉といった年配の女性と並んでいた。確かにわが子たちは、ベンチで少しじやれ合っていた。夫が時々、

「静かにしなさい」

とか、

「ちゃんとしていなさい」

などと、目ごろと同様の注意をしながら子どもたちのそばに立っていた。その人は、前に並んでいる私を子どもたちの母親だとは気づいていない。連れの年配の女性がその人に、

「あなたは、ベンチに座って待っていらっしゃいよ」

と言うと、

「いやよ。あんな子たちがいるもの」

おさない子を育てる

この言葉に、私は少なからずショックを受けたが、夫が注意しても、おとなしくしていることが長くもたない、すぐにじゃれ合う、わが子らの姿を横目に私も（まあ、しょうがないか、そう言われても……）と思っていた。

連れの女性が、

「子どもは、ああいうものよ」

と言った。すると、その女性、

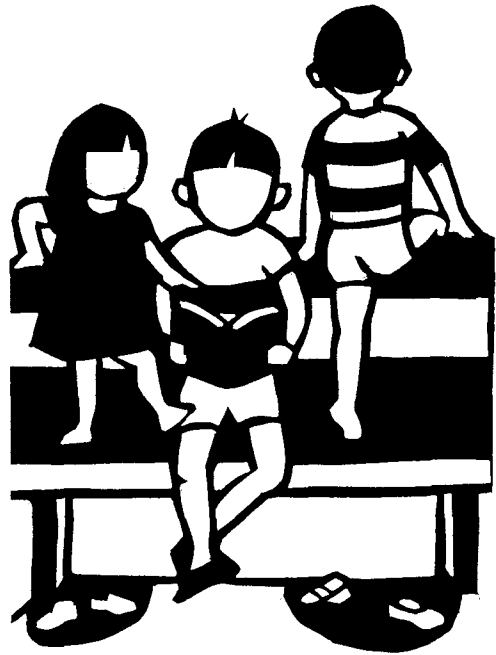
「ちゃんとしてる子は、もっとちゃんとしてるわよ。男の子三人で、きっと家の中でも大変でしょうね」

わが子らに向けられた、手厳しい評価に、すぐ前の私は、前を向いたまま、ぼう然と立っていた。

三人の幼い子どもの子育て中に私は今まで、街中や乗り物の中などで年上の方たちに目を細められたり、応援されたり、好意的な人々ばかりに出会ってきた。公共の場での子どもたちの行動にも、けっこう厳しく目を光らせてきたつもりだった。でもこんな評価もあるんだと初めて知らされた気がした。それにしても、幼い子ども三人が

ベンチに座っていて、何もしゃべらず、おとなしくしているなんて無理な話ではないか。（このくらいいの、じゃれ合いはしょうがないじゃない）と心の中で私はつぶやいた。

そのうちに少し冷静な考えがわいてきた。立場が違っていると、人は考え方も感じ方も違うのだということ。その女性は、連れの女性との話から想像するとキャリア・ウーマンらしく、休日を利用して旅行するためのチケットを求めて並んでいる様子だった。私は、彼女の前に並びながら、彼女の生活を想像した。静かな大人の生活。自分のペースで進む時間。充実した職業……。そういう立場の人にとっては、子どものじゃれ合う声は、迷惑だったろう。世の中には、子ども嫌いの人があって、たくさんいるはずだ。今まで、あまり気を遣わなかったが、社会の中には、さまざまな状況、立場の人たちがいる。こんなにも子育てに奮闘している私を同情して欲しいなんて思っているのは、甘いかも知れない。目を細めてく



れたり、ねぎらってくれたりする人は、声に出してくれるが、マイナスの評価をする人は、なかなか本人の耳もとでは言ってくれないものだ。ということ、私は、とても貴重な経験をしたのかも知れない。

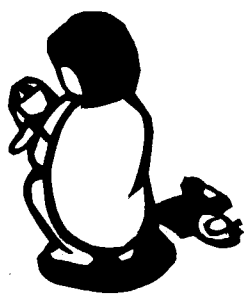
しばらくすると、三歳になったばかりの末っ子が、私の足にしがみついてきた。すぐ後ろから、

「まあ、お母さんだったのね」

と、きまり悪そうな声が聞こえた。私の順番がきて切符を受け取り、「おさがせいたしました」

とても言おうかと思ったが、結局何も言えないまま振り返ってドアを出た。

ちなみに、私の子どもたちは、男の子三人ではなく、男の子二人とボーイッシュな女の子一人である。



「子育てはつらい」 のか!?

●——岸田麗子

育児は育自

「育児は、育自」という言葉は、もう使い古されてしまったのだろうか。子どもを育てていることで、自分も育てられることだという意味に、私は捉えている。その育自のきっかけをつくってくれたのが、まさに三歳になろうとしている娘だった。

娘が三歳の誕生日を迎える少し前、私は娘の尻をたたいたことがある。座イスの上でお漏らしをしてしまったという、なんとも些細な理由で。なんとも些細な理由の奥には、今までに未解決のまま残されていた私の大きな問題が潜んでいたとは、その当時の私には考えもつかなかった。

外側さえ変われば

人は、住居が変わったり、髪型や服装が変わると、一時的にはあるが、自分がとも変化して、新しい生活ができるような気持ちになるものだ。

私も例外ではなかった。娘の尻をた

たいた四カ月後、夫の転勤で引越をした。幼い子を二人連れての引越は大変ではあったけれど、新しい生活に希望を持っていた。「今度こそ、子育てうまくやろう」という気持ちになっていた。

しかし、環境を変えたぐらいでは、私は何ひとつ変化することにはなかった。逆に、夫の職場の集合住宅での暮らしは、私の問題を増長し、私の心を重くしていくだけだった。

こんなはずはない。私は、ちゃんと教育を受けた。認められて仕事もした。仕事を辞めてまでも、子育てしようとしているのに、しっかり育てられないわけがない。他のおかあさんたちと、うまくやれないわけがない。などという妙な自信があった。

「妙な自信」が、私の内の問題であることは、言うまでもない。

「私は、何か変だ。ちぐはぐしている。このままでは、私も子どもたちも、だめになっていく」

混乱していた私ではあったが、どう

いうわけか、そう思える自分も居た。

初めての「学び」

私は、薬をもつかむ思いで、公民館主催の学習会に参加した。

学習会の講師は、セルフカウンセリングという、自分で問題を解決していく方法を実践されているY先生だった。

Y先生は、「そのままのあなたでいいですよ」とおっしゃった。「子育て、大変ですよねエ。よく、がんばっていらっしやいますねエ」とも言ってお下された。

私は、涙が出るほど嬉しかった。結婚後、いや今まで、そうやって誉められたのは、初めてだったかも知れない。もちろん、子どもたちの成長、発達のことで誉められることはあった。歩くのが早い。オムツが取れた。体がしっかりしてる。字が読める。泳げる……。

でも、それらはいつも、この「何ができる」という栄光にであって、他の

子より成長、発達が遅ければ、いとも簡単に失ってしまう誉め言葉だった。

それに、歩けたり、泳げたりしているのは、私ではなく、子どもたちなのだから。

Y先生の言葉は、それらの誉め言葉とは違っていた。よいことも、悪いこと（基準はないのだが）も含めた全部の「私を」認めて下さったのだ。

娘の尻をぶった時の様子、気持ちを文章にした時、先生は、「苦しかったでしょうねエ、よく思い切って書きましたねエ」とおっしゃって下さった。

私は、情けないことに涙をポロポロとこぼしてしまった。

自分の全てを認めてもらうということが、こんなにも嬉しくて、幸せで、感動することだということを体感した。

私たちは、クラスで成績が何番だからと誉められた。かけっこが早いからと誉められた。よい会社に就職したからと誉められた。よい仕事ができたらと誉められた。

いつも、人より優れていることで、誉められることに慣れていた。慣れ過ぎていた。

「ダメな私」は、認められなかった。子どもひとり育てられない私は、誉めようがなかった。私が私を認められなかったのだ。

だから、娘の一度の失敗を、全人格がダメであるかのごとく、私は娘の尻をたたき、彼女を許さなかった。

私は、娘の尻をたたいたこと。泣かせたこと。ごめんなさい」とあやまらせたこと。思い出すたびに、胸が痛くて辛くなるのだ。

学べば変わる

私は、その日以来、子育てをするということは、少しわきのほうへ置くことにした。私自身を知ること、エネルギーを使った。

「りっぱなおかあさんは、いつもニコニコ太陽のようで、子どもの話は、じっくり聞いてやるものだ」

それが、いいおかあさん像だと言わ



れ、そうできない私が存在して、私は、母親失格なのだと苦しんでいた。

しかし、よく考えてみると、そんなおかあさんが、この世の中に存在するのだろうか。精神的に余裕のある、おらかなおかあさんもないではないけれど。子どもたちの話を聞いて、充分に満足させてやることのできるおかあさんもういっしょるけれど。

でも、人間であるのどもの、疲れていることも、思い悩むこともあるだろう。別に、いつもニコニコしなくても、太陽じゃなくてもいいじゃないか。普通に通にしているいいのだ。そんなふうな思いも生れてきた。

また、どうしてこんなにイライラして、小さなことで、子どもを叱ってしまふのだろうかと考えてみる。

自分がやりたいことを、思い切りやれないことに、ほとんどの原因があることがわかってきた。子どもが直接の原因ではなかった。子どもが居るために縛られているような錯覚に陥っているのだ。

確かに、幼い子が居ると、世話をしなくてはいけない。時間が細切れになる。自分の思い通りにはできなくなってくる。

でも、自分の好きなことまで、全部止めてしまう必要は、これっぽっちもないのだ。目先のことでなく、人生の長いスパンで考えていかなければならない。

「自分」と、「自分の大切な子ども」と「時間」のために、日なたぼっこをさせるつもりで、子育ての時を過ぎなくてはいけない。

独身者や、子どもを持たぬ人たちは、どんどん自分の好きなことを、仕事で力を発揮しているように見えるものだ。「今」の事象だけで比べようとするからあせるのだ。

自分の好きなこと、やりたいこと、仕事というものは、決して短い期間で完成されるものではない。それを忘れてはいけない。

そんなふうを考えていくと、子育てというものも、あせてはいけないもの

ののひとつなのかも知れない。

私の友人は、三人の幼い子を育てている間、十年の時を使って、大学を卒業した。

その友人は、私に言った。

「大学に通いながらだったから、子育てができたんだと思うよ」とニッコリ。

現在、彼女は、世界にひとつしかない新聞社を創るべく、日々仲間と奮闘している。泣いたり、笑ったり、恐がったり、胸を痛めたりして、夢に向かって歩いている。もちろん、子育てもしながら。

若い母親たちは、未熟ながらも考え、悩み、大人の母親になっていく。大人の人間になっていく。

「子育てはつらい」のか!?

オムツをはずすこと、友人と仲良く遊べること、元気に育っていくこと、勉強ができること、運動をすることが好きということ、etc. どれをとってみても大切なことなのかも知れない。しかし、私は、私が大人と言われる

年齢に達してみte思うことは、勉強すること、運動すること、約束を守ること、仲間を持つこと、仕事をするのと、すべて進行形なのだということ。

幼い時から現在も、年老いてからも死ぬまでずっと、ある意味においては、同じことを繰り返しているというわけだ。

オムツを早くはずしたから、よい高校に入れたから、といって人生の成功者ということではない。たまたま、その時点ではうまくいったということにすぎない。

大学に入れず浪人することも、登校拒否をすることも、マイナス評価をもらってしまいがちだが、その後の人生においてはマイナスともいい切れない。私たちの世代は、あまりにも優秀をつけられ過ぎた。判断され過ぎた。そんな私たちが出会う子育ては、「つらい」と感じてしまうのもあたり前だと思う。

もっと広い間口で、人間の成長というものをとらえていくことができれば、

ば、子育てというものは、日々新しい発見のできる、ワクワクするものに変化していくのではないだろうか。

現在の私

いつも、何かに追いつてられないような感覚が失くなった。自分のしたいことは、優先してするようになった。

「あなたのためよ」とあれもこれも子ども達に押しつけなくなった。私の周りのたくさんの人たちから、どんな影響を与えてもらいたいと思うようになった。

肩の力がスーッと抜けた。

「子育てなんて嫌い」と思う日もあるが、「子どもたちが居てよかった」と思える日もある。子どもがいたほうがいいとか、いないほうがいいなどと単純には言えない。

どうしたって、自分の選んだ道。子どもと共にという暮らし方かできない。つまりきながら、迷いながら、ゆっくり暮らしていこうと思えるまでになった。娘は、明日で十歳になる。

平成
おたまたげジョシ

(20)

マインド・コントロール
テロプの効力は？

“どこまで続く連日の
“オウム緊急スベシル”
—真相はこれだった—



女子学生会館物語

北海道旭川市

香山なおみ（33歳）

「女子学生会館」というものを「存じ
だろうか。親元を離れた女子学生のため
の、民間経営の寮である。全国共通
かどうかはわからないが、知られてい
るとすれば、整った設備や高い館費な
どだと思う。

私は大学生活のうち二年四月を、
二軒の女子学生会館で過ごした。十年
余り前の、札幌という一都市に限った
経験ではあるが、「女子学生会館（以
下、会館と略）」という秘められた
（？）世界の実態を暴露したい。ちな
みにこれは、このとんでもないドラ娘
を信じ、なけなしの財産をはたいて学

生生活を謳歌させてくれた両親への、
謝っても謝り切れない懺悔の記であ
る。

話術にはまった母

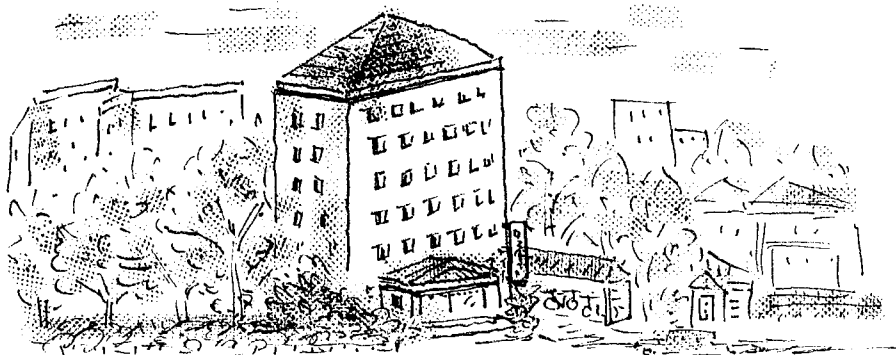
出会いは、入試会場で手渡された一
枚のパンフレットだった。試験を終え
て戻ったホテルで、こんなのもらった
よ、と何気なく母に見せ、翌日何気な
く二人で見学に行った。

話はそれるが、母が入試ツアーに同
行したのは、生まれて初めての飛行機
で、何百キロも離れた見知らぬ街へ受
験に行く娘を案じて、ということであ

あった。が、この旅行は、当時父の浮
気騒動で心身共に極限状態だった母に
とって、大きな気晴らしだったに違
いない。

訪ねた会館は、七階建てのこざっぱ
りした建物だった。館長は柔らかな面持
ちの初老の男性。彼は次のようなス
トーリーで母の心を捕らえた。

お嬢様の一人暮らしは何かと不安で
すよね。アパートなどのほうが安上が
りかと思われても、生活が乱れて身体
を壊したりしたのでは、元も子もあり
ません。当館ではカウンセラーが常駐
して、お母様の代わりを務めさせてい



たきます。

お部屋にはベッドや机、タンスなどを備え付けていますし、掃除機やアイロンは事務室で貸し出します。こういった物を短期間のために買い揃えるのは、大変無駄な出費なんですよね（うなずく母）。

当館は原則として自炊ではなく、朝夕は館内食堂を利用することになっております。食堂では、専任の調理師が栄養バランスを十分考え、若い女性向けの献立を用心します。自炊ですとうしても偏食がありますし、一人分の材料費って意外と高くつくんですよね（またもうなずく母）。帰省や旅行の際には、食事代の実費（一食五百円程度）を返金いたします。昼食などは各階の調理室で作れます。

実は札幌にはもう一つ会館がありますね。あちらを参考にした上でよりよい会館を、と考えて去年建てたのがうちなんですよ。あちらはかなり規模が大きいんですが、あまり大きいと目が行き届かないこともありますからね。

うちはそんなに大きくない分、みんな仲がよくて、お友達もすぐできますよ。

十日後、大学から合格通知が届く。館長の話術にすっかりはまった母は、パンフレット片手に父の説得にかかった。我が家の財政では、質素なアパート程度でも相当な負担のはずなのに。

父は、見学して来た母が言うのならと、特に反対しなかった。人並はずれたケチ人間の父が「安下宿にしろ」などと言わないのが少し意外ではあった。もちろん私の生活は心配だったのだろうが、浮気の件で発言力が弱かったことも大きく響いたのだと思う。つまり、本来ならば分不相応で入り込めない世界に、はすみで迷い込んでしまったようなものだ。

当の私としては、住む所はどうでもよかった。これで両親が安心するのなら、門限があるのが管理人の監視があるのが、構わない。まして高額であることなど、私には関係ない。一カ月の家賃に当たる金額（十数万千円だったと思う）と、それとほぼ同額の敷金を

振り込み、私の入館が決定した。

親の期待とは裏腹に

新生活は、どうにか順調に始まった。六畳ほどの洋室が、生まれて初めての私の個室。備え付けのベッド・机・椅子・小さな戸棚と洋服ダンスに、荷物の少ない私がいち足したのは、カラーボックスだったの一つではなかったか。

トイレと洗面所は各階にあり、さほど不自由しない。浴室や洗濯室、公衆電話は一階だけなので、時間によっては混み合うこともある。食事は、家庭料理とは言わないまでも、まあまあおいしかったし、調理から皿洗いまで全てお任せできるのは、自宅より楽で嬉しかった。食事をしながら、ロビーでテレビを観ながら、友達になった館生達とおしゃべりするのは楽しかったし、孤独を感じることもなかった。

不便だったのは、外部からかってくる電話。インターホンや館内放送で呼び出され、各階に一、二台の受信専

用電話まで走る。私のように遠距離通話が多いと、全力疾走である。回線はたったの二本。年ごろの娘達はみな長電話。夕方以降はつながるのが奇跡的と言われていた。

ごく少数、自室に電話を持つ館生もいたが、さすがにそこまで贅沢ができる身分ではなかった。また、ほとんどつながらないので親は減多にかけてこない。それが却って好都合だったのも事実である。

玄関脇のガラス張りの事務室には、管理人やカウンセラー（なぜか白衣を着ている）と呼ばれる人達がいる。門限（確か十時）に遅れるとわかっていゝる時には帰館遅延届、外泊には外泊届を提出するが、特に詮索されることもない。

親代わりとは言え、そこは商売、あまり口うるさくして敬遠されたのでは成り立たない。預けた親達にしてみれば、あれだけの大金を払っている以上、間違いなく管理してくれるはずだという思い込みがあるのだろう。娘達

はしたたかに、そのギャップにつけこんで羽を伸ばす。

例えばどれほどの悪事がばれないか。私の場合、遠距離恋愛をしていた。ハードなアルバイトで飛行機代を稼ぎ、一、二カ月に一回、どちらかが大学を一週間ほどサボって逢瀬を楽しめたのも、会館なら安心だという親心を逆手に取っていたからこそ。ああ何たる極悪非道娘！

もう一つの会館

会館での生活はおおむね快適だったが、経営状態があまり芳しくないことは肌で感じられた。特にひどかったのは、管理人やカウンセラーの顔触れが目まぐるしく変わることに。しかも、採用される人物と、その職に求められる適性との落差は広がる一方。入館から一年経てば敷金が戻るので、大半の館生は三月末を待って退館するらしい。私も右へ習えで脱出を決めた。

友人達は大抵、普通のアパートなどに移って行ったが、私の転居先は何

と、一年前に館長から聞いた「もう一つの会館」。会館暮らしをやめないのは、交際の彼の敵命だった。男子禁制の会館なら、私に悪い虫がつかないだろうと。初めからアパートにでも入っていれば、こんな話も出なかったはずなのに。それにしても恋は盲目。「あなたにそんなこと言う資格がある？」などという疑問も持たず、素直に従う私も幼かったものだ。

今度の会館は大きい。十一階建てで築十年弱だったろうか。前のようにアットホームな雰囲気はない。カウンセラーの女性達（やはり白衣姿）に素人っぽさはなく、よくも悪くもプロに徹していた。

規模が大きい分、やはり野放しになる。九階の私には無縁だったが、二階の窓はよく夜這いに使われていたらしい（一階は共有スペースで、居室は二階以上）。

会館の設備と費用は、前と似たようなものだった。自炊が可能と知り、倅約してデート代を稼ぐために自炊を始

めた。ただ、各階一カ所の調理室に一番遠い部屋だったので、なるべく自室内の電気器具（炊飯ジャー・湯沸かしポット・オーブントースター）で済ませた。

調理室はいつも閑古鳥。館内食堂や外食派が多かったのだろう。はじめに自炊をするタイプは、あまり会館に入らないのかもしれない。

部屋の机が小さいのには驚いた。おしゃれでかわいらしく、勉強机というよりも化粧台。手紙を書くぐらいにし

が使わないだろうと思われたのなら、女子大生もなめられたものだ。

この会館に移ってから、華道を始めた。一階の和室に、先生が通って来てくださる館内サークルである。茶道もあったが、両方だと週二回で忙しいし、お茶会用の和服は調達できそうになかった。華道だけを選んだ。動機は特にない。少し前に茶道と華道を始めた姉への対抗心とでもいおうか、スネを公平にかじらせてもらう権利を主張しただけのことだった。



私にとっては華道の修得よりも、むしろ師匠のK先生との出会いのほうが大きな収穫だった。こんなにかわいいオバサンになれるのなら年をとるのも怖くないんだけど、と思わせる素敵な女性。

肝心の華道の腕前は、情けないほど上達しなかった。それでもK先生の元を離れ難く、退館後も札幌にいる間は、毎週通い続けた。K先生と巡り逢えただけでも、ここに入館した甲斐があったと思っている。

私の居場所じゃない

不快な思い出もある。入館の翌年、四月上旬の日曜日。ようやく雪が溶けて出番のやって来た自転車をも、せっせと磨いていた。全身、泥と錆にまみれながら、愛車にツヤがよみがえる快感に没頭していた。

会館は、新入館生の両親達の初訪問ラッシュ。みな一様に、正面玄関のすぐ脇にある自転車置場を一瞥して通り過ぎて行く。相前後して、カウンセ

ラーが事務所から出て来る。入れ替わり立ち替わり、幾度となく。

何してるの。偉いわねえ。大変そうねえ。まだまだかかりそう？ 初めの内は、励まされているものと思ひ込んでいた。裏口に回らない？と加わって初めて、鈍感な私にも事態が把握できた。

それならこっちにも意地がある。「もうすぐ終わりますから」で押し通し、最後の「今日はお客さんが多いから」に、「お客さんの前ではやっちゃいけないんですか」と聞き直して決着をつけた。

間違っているのは私ではなく、自転車置場を玄関脇に造った館長だ。あんな汚れ作業をする館生は、他にいなかったのだらう。その後、自転車置場が裏に移設されたかどうかは定かでない。

つくづく、ここは私の居場所じゃないと感じた。他の館生とは生活水準が違いすぎる。前の会館で事務所のアイロンを借りていて、食堂のおじさんに

「家じゃアイロンがけなんてしたことないんでしょ」と言われた時にも思った。仕事の忙しい母など当てにできず、アイロンぐらい自分でするのが当たり前前の家庭に育ったので。

父の浮気がなければ、普通のアパートにでも入っていたのだろうか。会館を勧めたことだけではなく、どう考えても入試前後の母の行動は、通常の我が家の家計を逸脱していた。

札幌への二人旅だけでも結構かかる。その出発直前に「北海道は寒いか」と、私が特に欲しがってもない毛皮のコートを買った。十四万八千円也。不合格だったら二度と行かないかもしれないのに。

会館を離れたのは、大学三年の夏。よく彼が許したって？ いえいえ、別れたんです。同じ大学の男性（今の夫）に心変わりして。

二年余り暮らして、私には会館は過ぎた贅沢だという結論が出ていた。留まる理由がなくなった以上、少しでも両親の経済的負担を軽くしたい。もち

ろん、近場の彼との交際にはアパートのほうが便利だと考えたのも事実である。現に、すぐ同棲生活になだれ込んだ。

転居先は、仲介業者に頼らず時間をかけて自分の足で探し、とても好条件の部屋を見つけた。交通至便、一DKバス・トイレ付き、二万五千円。相場より一、二万は安く、オバケでも出ることかと思ったが、四年間住んでいて、ついぞお目にかかることはなかった。その気になればこんなに安く上げることもできるのか。

娘を信じられるかどうか

以上の経験から、会館に対する考えをまとめてみたい。

まずハード、つまり設備の面では確かに恵まれている。初志貫徹して会館で過ごせば、家具の購入費用は浮くだろう。しかし私のように古道具店を数軒はしごすれば、かなりまともな物が格安で入手できる。大事な娘に中古品なんて、とおっしゃる向きもあろう



が、程度の差こそあれ会館の備品だっ
て中古である。

次に問題のソフト面。白衣のカウン
セラー達は本当に「親代わり」なのか。
とてもそうは思えない。あれほど放任
主義な親は滅多にいない。ホテルのフ
ロントといったほうがずっと近い。

一番の間違ひは、親が娘を会館に入
れる時、ハード面ならいざ知らずソフ
ト面にあらぬ期待をかけて、あの高い
館費に納得することだ。確かに男性を
部屋に入れることはできないが（窓か
らの夜這いは別として）、男性の所へ
出かけて行くことはできる。たとえ門
限破りや外泊をしなくても、行先を
偽ってどこへでも行ける。

結局、会館暮らしでも親との同居で
も同じで、娘を信じられるかどうか、
信じるに足る娘を育て上げたかどうか、
ではないか。信じるというのは、うち
の娘に限って間違ったことはしない、
ということでもいいし、どんな経験で
も糧にして成長してくれる、というこ
とでもいいと思う。

育児歴四年弱の、しかも超親不孝者
のたわごとかもしれないが、私は同様
をして、本当によかったと思っている。

ここで同棲や婚前交渉の是非を論じる
つもりはないし、一人暮らしが必ずし
もそれらに結びつくわけではない。た
だ、娘が心配だから会館に入れるとい
うのであれば、ちょっと待ってと言
いたい。それは会館に対する買いかぶり
であり、過去十数年の、自分の育児に
自信がないということだと思うから。

自分の娘は入れないという

結論

私が会館から得たものは何だったの
か。K先生との出会いの他は、自分の
娘はよほどの事情がない限り会館には
入れないという、否定的確信だけかも
しれない。

確かに「らくちん」だった。しかし
それは、過保護なぬるま湯でしかない。
私はハングリー精神旺盛なタイプでは
なく、おまけに世間知らずで、厳しい
寒さの経験もなかった。もし入学と同

時に普通の一人暮らしを始めていた
ら、戸惑いと失敗の連続だったろう。

だが、そんな苦労から生まれた成長こ
そが、本物と言えるのではないか（ち
なみにこの「本物の成長」は、一般企
業の最も敬遠するところで、一人暮ら
しの住所だと採用試験どころか、会社
案内の資料請求で門前払いされる）。

私達夫婦の場合、うちの子に限って
品行方正に育つはずがない、きっと何
かやらかしてくれる、という諦めにも
似た覚悟はできている。それでも将来
娘ができて年ごろになれば、覚悟など
吹っ飛んで、母心が揺れることもある
のだろうか。

思えば本当に好き勝手に放題の大学
生活だった。両親がかわいそうと責め
られれば一言もない。が、後悔はして
いない。

ただ、世の中には知らないほうが幸
せなこともある。懺悔の記と言いつ
つ、両親にはばれないことを心から
祈っている。



忘れ得ぬ人々



宙一さんの思い出

山口県下関市

深田加奈

宙一と言うのが、私の祖父の名前です。

宇宙一の人となれとの親の願いは立派でも、チュウイチの響きは滑稽です。宙一さんは、私が大学を卒業した年に亡くなりました。今日は、真面目の上にクソがつく、正直の上にバカがつく、祖父宙一さんのことをお話ししたいと思います。

宙一さんは、私達の住居の近くで医院を開業していました。宙一さんの医院は小さくて、普通の民家の門の前にベンキのはげ

かけた看板が置いてあるだけのものでした。宙一さんには営業手腕が全くなく、患者さんからもらってよいお金さえもろつことができずにいました。おかげでいつも貧乏でした。私は宙一さんの小さな医院や粗末な身なりが恥ずかしくてたまりませんでした。

宙一さんは笑顔などほとんど見せず、いつもむつかしい顔をしていました。でもその実、私達に対して、とても愛情深い人でした。

医院には、よく患者さんからの戴き物がありました。お菓子を戴いた時は、宙一さんは仕事を放り出し、大急ぎで愛用の古い黒い自転車をこいで我家に届けるのでした。ケーキ、シュークリーム、栗饅頭、ひ

よ子、と何でもペロリと食べてしまう私や姉を、宙一さんは真面目な顔で見っていました。孫の喜ぶ顔を見るのは嬉しかったのでしようが、表情に出せない人でした。宙一さんは医者のかせして、甘い物を孫にせつせと与えました。おかげで私と姉の肥満はどんどん進んでいきました。

私が自家中毒になると、その度に宙一さんはすぐに自転車をやってきました。そして何も言わずに、大きなブドウ糖の注射をぶすりとやってくれました。痛かったけれど、気分はすぐによくまりました。

それだけではありません。台風が近づくと、宙一さんは今度は板切れを持って我家にやってきました。そして当時の木の窓枠に板切れをバツ印に打ち付けるのです。

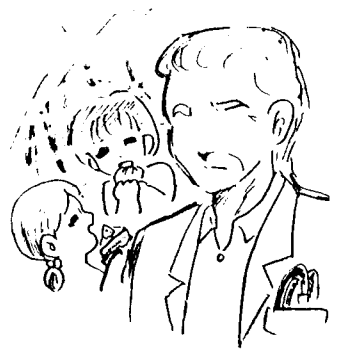
我家は父が船員でいつも不在でした。宙一さんはそんな母娘を必死で守ろうとしていたようです。このように宙一さんは、何かある毎に、自転車に乗ってスパーマンのように私たちの前に現れる、そんな人でした。

春、宙一さんは診察室の前庭の桜が満開になると、花見と称し、子供と孫を全員呼び集めました。この日のお膳には貧乏な医者には不釣り合いながら精一杯はりこんで、ふぐのお刺身の大皿が二枚並んでいます。宴会中も宙一さんは一滴の酒も飲まず、ただもくもくと食べるだけです。宙一さんは、家族が皆自分の元に集まってくれたことが嬉しいだけなのです。

宙一さんには、酒で死んだ息子がいました。時々宙一さんは息子が残っていた、今や縁の切れた孫の所へも、そっと様子を伺いに行っていたらしいのです。そんな宙一さんの姿を思い浮かべると泣けてきます。

宙一さんには、家族がとても大切なものだったのです。

宙一さんは八十歳の時すい臓を病んで亡



くなりました。宙一さんの葬儀にはたくさんのお客さんが見えました。何人もの宙一さんのファンが「せんせええ」「せんせええ」と言って、おんおん泣いていました。お金をとらない医者、宙一さんは、患者さんには神様に見えることもあったのかもしれません。

宙一さんが亡くなってから十四年、此のころになって母から、宙一さんは私が思っているほど立派な人ではなかったと聞きます。見栄っぱりで外づらはかりがよく、ワンマンな人だったと聞きます。私は、かわいがってもらった宙一さんの人間らしさを知って、楽しくてたまりません。宙一さんのことを思い出すと、昔の幸福感さえ甦ってきます。宙一さんは、今もきっとどこかで私を守っていてくれると思うのです。

看護婦A

東京都八王子市 楠元くみ子（35歳）

白いサンダル足の音も高らかに、看護婦Aはやってくる。

「はぁーい、おまたせ」

面倒臭そうな気だるい声。すらりとした肢体、小さな顔についた細い鋭い目で、威圧的にベッドの患者を見下ろし、
「なァーに？」

思わず患者は口ごもる。やっと勇気を振り絞り、

「トイレ、お願いします」

「えっ、トイレ？ 行くの、行くの、お？」

「行くから呼んだんじゃないかぁー！」

ある車椅子の患者の例。

ベテラン看護婦Aは、その特徴的な外見としゃべり方で怖い、いじわると思われるが、ちである。人によってはAが血圧を測るだけで、いつもより上がってしまうとか、部屋に入って来るだけで不整脈が起ると

か、Aが部屋担当の時はトイレを我慢しちゃうとか、とかとか……。

確かに、笑顔も穏やかな「白衣の天使」を望む人には、にこりともせず面倒臭そうに、「はい、なァーに？」と言われたり、つっけんどんに「あと、できるわね」と放って行かれたりでは情けない気分になるだろう。

でも、これはこの人の特徴であり、ずっと前からこうであり、誰に対してもこうであり、これからもこうに違いないのだ。だから、Aのことをいたずらに恐れたり避けたりする必要はない。むしろ、他の看護婦さんにはない反応を楽しむべきなのだ。

Aは、普通の看護婦さんがすることをしていかわりに、普通の看護婦さんがしないことをしてくれる。

私の腰が痛かった時、ある人から「雑誌を腰の下に敷いて寝ると楽よ」と教えてもらい、試してみたところ、翌朝は痛みが減っていた。その朝の検温の時、担当のAに言うつと、

「あっそうなの。つまり硬いマットのほうがいいのね。じゃ整形マット探して来よ

う」と言っただけに見つけて換えてくれた。普通のマットは少々腰が沈むが、整形マットは腰がまっすぐに保てるくらい硬くできている。しかし、整形外科病棟にはたくさんあるが、私の居る膠原病科には数少ないのだ。なかなか言うて探して来てくれる看護婦さんは居ない。

Aは、他の看護婦さんがしないようなミスをする。

免疫グロブリンという薬剤の五十ミリリットルの小びんを九個連結して点滴する治療の時、エア芯（空気穴の役目をする）を刺す場所を間違えて、途中で点滴が落ちなくなり、

「あれ？ どうしてかなァ。バカだからわかんない」と言って私をハラハラさせたのはAである。

Hさんの点滴に至っては、落とすのを忘れて行ってしまった——というAである。

「お風呂どうぞ」と言われ、すっかり支度をして勢いよく入口の戸を開けたら、まだ前の人、それも隣室のおじさんが入っていた。後で「楠元さん、ごめーん。エヘヘヘ」と笑ってごまかしたのはAである。

この他にも、ミスではないが、「あー疲れた。どっこいしょ」と患者のベッドに腰かけて休んだり、「人手不足の折、ちょっとそのワゴンどかしてくれろ？」と元氣な患者を使ったり——こういう時は、いつもの無愛想はどこへやら、「エヘヘヘ」と笑っている。その笑顔は、なんとなく出来の悪い子の照れ笑いのようで憎めない。

同室のHさん曰く、

「もしAが、あの顔ですることなすこと、すべてが完璧だったら、本当に怖いよね。ちょっと抜けてるところがあるから救われるのよ」

全く同感である。そしてAは患者に話題を提供してくれるユニークで貴重な存在でもある。皆が皆、品行方正の同じような看護婦さんばかりだったらつまらないではないか。

お陰で、Aの居る日、ましてやわが部屋担当の日などは、

「さあて、今日は何が起こるかな」と、楽しみにさえなってきた今日（このごろ）である。

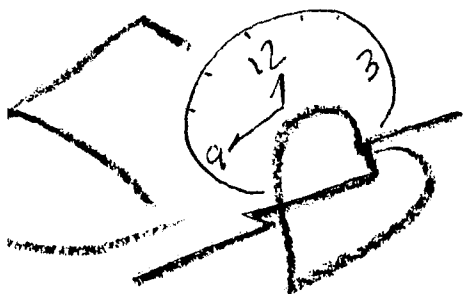
婚姻届と私

元夫ともう一度

離婚して早九年の月日が過ぎていった。三人の子どものうち二人までもが私の手元を離れていき、いよいよ最後の一人も今年巣立ちを迎える。

そんな私が元夫Nとの間の「婚姻届」を出そうかと考えたしたのは昨年であった。

なぜか私は結婚したくてたまらなかった。それは婚姻届を出すということとであって、実質的に仕事を辞めて同居し私が専業主婦になることではないつもりであった。



T・A

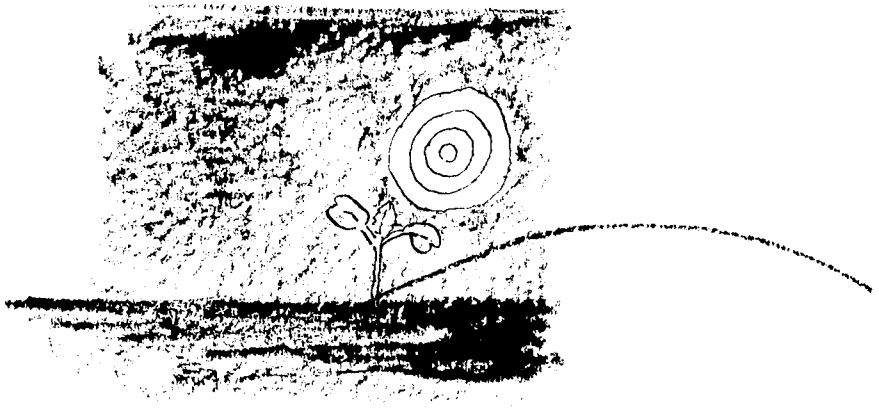
私は婚姻届を提出するために区役所に行き、まず自分の戸籍謄本をとった。当たり前だが本当に私一人。ぼつりと名前が書いてあった。それとNの謄本と婚姻届、三つの紙を並べてみたら、そのときになって予期せぬことが起きたのだ。それは「ああ私の生きざまが変わるんだ」という実感だった。わなわなと震え出すような、思ってもみなかった恐怖心であり、「出してはいけない」という心の叫びでもあった。これを出したら最後、私は今まで突っ張って生きてきた「崖っぷちに立ったような緊張感」を失ってしま

う。離婚して一人で三人の子どもを抱えて、もう後には引けないと頑張ってきた私。その私はどうなるのだ。

その場で私自身が消えてしまいそうな恐怖感が背中から這い上がり、私は区役所で身を震わせた。そして「老後の経済的安定」と「いい家庭」の幻想で早まったことをしそうになったバカな自分に気付いた。

この話を友人にすると彼女は言った。「あなたは甘い。たかが紙切れ一枚なんて言って。婚姻届を出したのと出さないのでは、話は全然違ってくるのよ。今までみたいに周りから自由であることなんてできないわよ。彼の両親は、あなたを老人介護の戦力として家庭に飲み込もうとするに違いないのよ。あなたがそれを進んでやりたいなら別だけど、そうじゃあないでしょ。あんまりバカバカしい」彼女の勢いは凄まじかった。

いわれるまでもなく私にはそれが分からなかった訳ではない。夫になる人、舅姑になる人、それぞれの思惑が



私をがんじがらめにしてしまいうに違いない。私には彼等を御することはできないだろう。

すでに今までも何回か、私は弱った彼を見捨てることができず自ら手を出している。三年前、彼が仕事を失い意気消沈したとき、励まし支え、再出発に力を貸した。そして一昨年、病に罹ったNにあれこれの面倒もみた。これが離婚した夫婦であるとはとても思えないと周りから言われたほどである。これからもきっと何かあれば手を貸すに違いない。

私たちは仲のよい元夫婦

現在、私と元夫は結構仲のよい関係だ。子どもたちとNと私、五人で過ごす時間は温かく快適だ。皆で一緒に食べる夕食、そしてみんなで批判しながら見るテレビ。彼等の麻雀の音を後ろに聞きながら一人で本を読む。そんなどうでもよいことに、これが「家庭の幸せ」かしらと私はやすらぎを感じていた。

私たちは離婚後も不思議なことに、夏休みの旅行やお正月のお年越しにはいつも家族で共に過ごしていたが、それはある時は義務として、またある時は便宜上のこととしての実行であった。離婚せずに別居していたころは、子どもへの義務だからいたしかたないと、顔を合わせるのもギクシャクとした夫婦二人。離婚後は「息子と楽しむなら私も外さないで」と意地で付いて歩いたときもあった。

それが何時のことだろうか、心を許しあえるようになったのは。互いに長い一人暮らしで寂しさを知り、人間として成長したのだろうか。Nは優しい人間になった。共に生きていくとしたら、私の周囲にいる男性の中では悪いほうではない。生活の自立だってできているし、経済力もあり、なにより子どもたちの父親なのだから。

「婚姻届」にこだわった訳

総合的に考えて、私たちは別居しているが同居して心の通わないヘタな夫

婦よりも、よっぽど夫婦らしい付き合いをしているのではないか。しかも、彼は困ったときにはいつも一方的に私を頼ってくる。それならいっそ「婚姻届」を出してしまったほうがいいに決



まっている。

なぜなら入籍していれば妻として扶養義務そして相続権など、圧倒的に有利な特典を持つことができるからだ。遺産は年金にも及び、もし結婚していれば夫が死んだ後も夫の受ける年金を妻が遺族年金として受け取ることがで

きる。それに比して離婚した女性には男性から経済的な何の援助も得られない。年を取るにつけ、アグレッシブな私にも弱気なところが出てきて、何か頼りになるものが欲しかったのだ。

離婚の一般論をいえば日本の男は養育費すら払わない。しかも高年齢の女性にはよい職場がほとんどない。日本で離婚を躊躇する女性が多いのは、正に経済力がないところに由来している。

アメリカで愛を失った後までも結婚生活を継続しない破綻主義が可能なのは、離婚後のケアシステムがしっかりしているためだ。日本では子どもやその他もろもろの事情で離婚しない夫婦が多い。それは何よりも戸籍制度の基本ともいえる一枚のこの紙が経済力を女に与えるからだ。

自由を求める本能

私自身の生き方としてはやっとうと子どもが巣立っていった自由な時間が生まれた今、結婚に安定を求めることになった。あと一步のところで踏みとどまっ

たのは自由を求める本能だった。

私はラッキーなことに、一人で食べていくには困らない経済力を身につけることに成功している。だから今更この自由を捨てなくとも生きていけるはず。これからの私は自分の意思だけで動けるのだ。旅行でも勉強でもなんでもできる。仕事も今までよりずっと頑張れる。これから私が実績を作っていくとき、まだまだ力を伸ばしていかななくては。気弱にならずもって自信を持っていこう。

思えば婚姻届にこだわったのには、もう一つの理由があった。それはやっぱり私にも普通でありたいという日本的な心があったからだ。離婚した当

初、私は特別視されるのを恐れて友人達にもそれを言うことができなかった。私はそのくらい実には平凡な日本人なのだ。

ところが、現実の離婚は人が思うのととはまったく逆であった。

私は離婚して自分で物を考え、自分の足で立ち、歩き、生きてきたという実感を掴むことができたのだ。離婚で私は数段成長したと思う。もちろん迷い苦しみがらだったが、生きていくことは壮快で素晴らしいことだった。

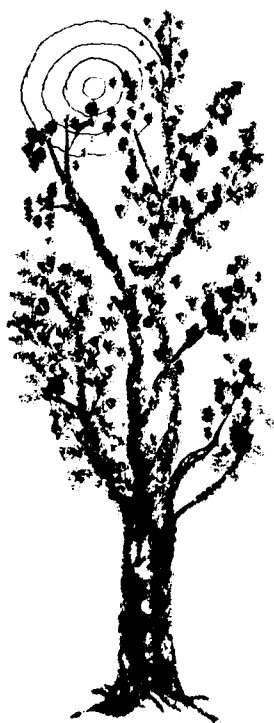
しかし周りはそうは見えていない。「離婚した女」という特別製のレッテルを、他人は私に貼りがたがる。特に中年男性のそれはひどいものだ。

見栄と傲慢の行く先は

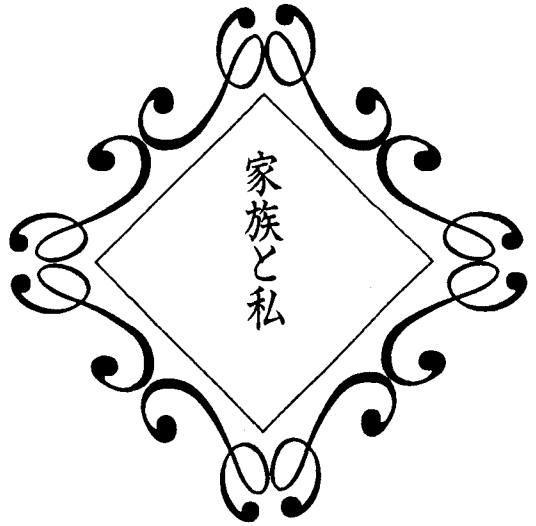
Nとの関係がよくなった今「入籍してちゃんとすれば、誰にも文句は言われないゾ」というつまらない見栄が私に起きてきたのだ。

この正月、「結婚しようかな、婚姻届を出そうかしら」とNに話してみた。すると「婚姻届を出したら、今まで通りの勝手な生活は改めてもらうよ」と言う傲慢な言葉が返ってきて驚かされた。私の世話になっていて「よく言うよ」とはこのことだ。だが彼は自分が経済力を持っていて、その力が強いことを知っている。そして根が子どもでもあるからペロリと本音が出てしまう。この先この人とうまくやっていくことができるか？

「婚姻届」を出そうとして、私は自分のこれからの生き方、老人介護、自分の老後など、問題点をまとめて目の前に突き付けることになった。何かとてつもなく大きな課題に足を踏み入れてしまったようだ。



婚姻届と私



ごめんなさい、おとうさん

仙台市太白区 横山のり子

私が大学三年になる前の春休みに、父は逝った。ちょうど十二年が経った。

癌との闘いは何年も前から続いていたが、私が鮮明に思い出し、後悔に胸を締めつけられるのは最後の一カ月のことである。

父は常に自分の病状を最もよく知り、積極的に闘ってきた。一家の大黒柱という自負もあり、母

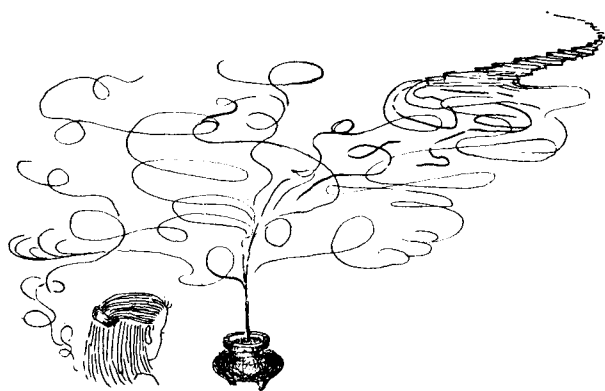
に持病があつてそれを氣遣う気持ちもあつたのだろう。一番つらいのは本人であつたはずなのに、いつも家族を励まし、心配してくれた。母は泣きごとを言うことがあつたが、父はそれをなぐさめる役だった。

そんなにして頑張ってきた父なのに、病魔は許してはくれなかった。手術。転移。つらい抗癌剤。最後に退院して家に帰って来た時は、近づいてくる死を覚悟していた。それでも「最後まで現役でいたい」と職場に復帰した。

日に日に体は弱ってくる。初めはドライヤーで髪を乾かすのも自分でできたが、間もなくドライヤーを持ち上げることができなくなった。少し動けばすぐ休まなくてはならない。クリスマスには力をふりしぼって、家族揃つてのパーティをした。そしてお正月、父は「写真を撮ってくれ」と言った。免許の書き換えのためだと言っていたが、私には何のための写真なのかすぐにわかった。

私の期末試験が終わり春休みになると同時に、父はついに入院した。今度は家から徒歩十分足らずの近い病院だ。母と私、妹で看病することになるが、妹はまだ中学生だったので、母と私が交代で泊り込むことになった。

ここまできても、なお私は父に甘えていたのだと思う。痛みや苦しみと闘いながら必死で自分の



死の準備をしていた父。どうして、その痛み、苦しみの部分だけでもいたわってもっと支えてあげられなかったのだろう。

父はこの病床で、信じられないほど具体的に自分の死後のことを考えていた。私にノートを一冊用意させ、まずその一ページに連絡すべき人のリストを作らせた。そして遠方から来る親戚が家に泊まるのに、必要な布団を用意するために貸布団屋も調べさせられたし、葬儀屋も告別式の会場も、父の指示で私が調べて一緒に選んだ。私達の生活についても、いろいろな可能性を調べ、あちこちに問い合わせの電話をして情報を集めたりした。また私には人生の指針となりそうな話をたくさんしてくれた。自分が五十一年間で学んだこと、悟ったことを残らず伝えようとするかのように。

こんなに立派な父だったのに、私はそれでも看病に疲れてしまった。苦しみゆえの父のわがまま、トイレにも行けなくなった父の世話、そして痛みや息苦しさと闘っている姿を見るつらさ。二十歳になったばかりの私に、それらを受けとめる余裕がなかった。

その日は、私が付き添いをしていた。初めは調子もよく、思い出話などをしていたが、夜になっ

夫の母

熊本県天草郡 松本とみよ

てまた父は苦しみ始めた。私は見ているのもつらくて、補助ベッドで本を読み始めてしまった。父は余程つらかったのだらう、私を枕元に呼んだ。「こうして手を握っていてくれるだけで、だいぶ助かるんだよ。そっぽ向いていられると何倍もつらい」

私は両手で父の手を包んだが、結局父の気持ちに本当に理解してはあげられなかったように思う。

「怒りは他人に伝えられるが、痛みは伝えられないっていうんだよ。どんなに怒っているかは態度や言葉からわかってもらええるけど、痛みの場合には、本人しかわからない」

父はいつの間にか、目をあけたまま意識を失い、翌朝そのまま逝ってしまった。

あれから十二年。私は先日、三度目の出産をした。何度経験してもお産は痛い。だが、助産婦さんが一緒に呼吸法をしてくれるだけでその痛みは半減することも知った。父の場合は、お産のいわば嬉しい痛みなどとは比べものにならないほどつらい痛みだったらう。あの時、なぜもっと心から親身になって、分かち合ってあげられなかったのか。悔やんでも悔やみきれない。

ごめんさない、おとうさん。

原因は、くだらないことではあったが、久方ぶりに、姑と私は激しく言い争った。

とるにたりぬとはいっても、そういうことが、実は一番、腹にすえかねるのではなからうか。

その、二、三日間。姑が突然、

「お互い気心が知れるまで十年かかったね。私も口が悪いほうだから、ずいぶん辛かったらうと思うことがあるよ」なんて言い出して、私も、さりげない風を装ってはいたが、本当はとても嬉しかった。

それなのに、この体たらく。いいかげんなものである。

原因とはこうなのだ。要するに、待ち合わせ場所に姑がいなかった。そればかりか、こともあろうに、私が車をとりに行つた五分の時間が待ちきれず、なんとバスに乗って帰ってしまったのだ。

ほんの、二、三分の間に子供が行方不明という事件のことが頭をかすめる。現代の神隠しかと青



くなって、あちこち捜した。正直言って、このまま出て来なきゃいいのにと不謹慎なことも考えなかったわけではない。

あぐく、とりあえず、いったん家に戻って対策をたて直そうと帰って来ると、途中にある叔母の家の前に姑が立っているではないか。

さすがに私も頭に血がのぼった。

「いったいどこにいたのよ!! どれほど心配したと思ってるの!!」

車をもってくるから、ここにいて」とたのんだ。私が車を置いている場所も、通って来る道すじも承知していながら、導く道を歩いてバス通りまで出て、そのままバスに乗って帰って来てしまったという。

姑は、少しもわるびれず、

「あんたとの待ち合わせじゃ、いつもひどいめにあう」と言う。

それは、こっちのセリフだ。だいたい、A地点でもB地点でもなく、すでにC地点まで行っちゃまっているやつを、どうやって捜せというのか。

「バカみたいにボーッと待ってとれるかね。長い時間待たせて」

五分を長いというのならそうであろう。姑はおも、

「道はどこにだって通じてるんだ。私の行くほうへ来ないのが悪い」

あいた口がふさがらない。

「まったく!! ここまでバカだとは思わなかったわよ!!」と私のはきすてるように言つと、

「ああ、私しゃバカだよ。だから、あんたにこきつかわれてるのさ」ときた。

あげく、エーイッって感じで軽くたたかれてしまった。アゼン。息子二人が、目を丸くしている。

翌日、職場で、

「ねえ、どう思う? 聞いてよ」と事の顛末を話すと、同僚が、

「本当に、お姑さんにそんなこと言ったの? すごい」

「言ったわよ。だいたい相手も、ぞこまで言う”みたいなことを平気で口にする人なのよ。遠慮はいらないわよ」

夕方、私と姑が普通に会話していると、六歳の二男が、

「仲直りしたんだね。おれ、どうなることかと思つたよ」と言つてはないか、姑と私は、思わず顔を見合わせた。

だいたい姑は、激しく言い争った直後に、

「ところで、私のメガネ知らないかい」と平静に



戻つて言うような人なのだ。

「知らないわよ!!」とつっけんどんに言いながらも、どこかおかしさがこみあげてくるのだった。

ふつう、けんか相手にそんなこと言つか?

夫が休暇で家に居た春休み、二男を乗せて、車で、職場の私をお迎えに来た。

夫が言うには、

「実は今日、お袋が、また、うちの嫁は、何でもほったらかし。今日は、一言いってやらなきゃ」って言ったんだ。すると二男が、ばあちゃん。ばあちゃんから言うのとけんかになる。おれが言うけん、ばあちゃんはまだまっというて」と言うんだ。これには、おれ達も参ったね」

私は、思わず二男を抱きしめ、

「あんたは、なんてよい子なの」と叫んでいた。

それで思い出したけど、実は私の父親は、祖母（父の母）に対して、

「妻の教育はおれがする。今後、妻に意見するのは無用に願いたい」と言って、嫁姑戦争を回避した人である。祖母と母は決して仲がよいとはいえなかったが、言い争うようなことはなかった。

ま、そういうわけで、私は二男を抱きしめつつ、夫に対して、

「私が求めていたのは、その一言だったのよ。なんで、あなたは、こういう潔い一言が言えないの？」と矛先を向けた。

「言って聞くような玉か」と夫。

留守がちの夫の仲裁をあまりあてにはしていない。しかしである。もっと夫が毅然とした態度を示してくれていたら、事態は、もっと違う方向へ向いていたに違いない。

私は、嫁姑戦争のそもその元凶は、姑が夫をバカにして、ハナであしらえる存在と思い込んでいるためと分析している。

バカにしている息子の、その妻なんて存在は、姑にとっては吹けば飛ぶようなものだろう。自分の言いなりになって当然と思っているのである。

いなかでは、嫁に人権なんてありはしない。私だって対等の人間だよ、と言いたくなるようなことばかり。それが一番辛いことだった。

やさしいばかりでメリハリがないと言われた私。それが、ある日ブツンと切れて、負けるもんかとはかり言い返すようになってしまった。本音で言い争うことの何と気持ちよいことか。

私も息子二人の母、やがていやおうなく、姑となる身。しかし、もう一度同じように、息子の嫁と戦争をして、平和協定を結ぶまでこぎつけるのはもう結構。

十年、長かった。もうとてもそんな気分は残っていない。

「私は、決して息子と同居なんてしないわ」と言ううと、すかさず姑が、

「あんただって、年とったら気が変わるさ」と答えた。

（元・橋本美智子）

或る母親の死（遁世）

東京都渋谷区 柴田照代

平成五年の暮、五十八歳でその一生を忽然と終えた友、倭文子さんのことが此のごろ頻りに思われる。

誠実で勤勉で有能だった彼女は寒風の吹く中、自宅近くの路上で突然昏倒した。買物の帰り道だった。救急車で運ばれた病院の集中治療室で二度と意識の戻ることなく、脳内出血のため一週間後に亡くなった。

＊

彼女が初めて我が家を訪れたのは昭和六十年の秋、保護司である私の夫の許へであった。

彼女の二男、光二が夫の保護観察となり、代々木の我が家にたずねて来た

大人になりかかった子供たち

のである。

玄関のドアを開けると、彼女は品のよい控え目な感じで来意を告げた。きちんとしたセンスのよい洋服に身を包み、ふくよかな顔立ち、身体付きに似合わず、おずおずとした暗く沈んだ目の色が印象的だった。

倭文子さんは昭和十年、中央線沿線のK町で生れた。父親は警察署長、優しい母と弟というきちんとした家庭に育った。素直な性格で努力家、学業成績もよく名門の立川高校を卒業していた。経理事務所で働きながら向上心に富む彼女は資格試験に次々とチャレンジして合格し、みんなに信頼されて楽

しい青春時代を過ごしたという。

どのような経緯があったのか、結婚について彼女は何も語らなかったが、時折もらす口ぶりから夫は小心な人で、当時彼女はほとんど頼りにしていないようだった。

長男が生れて八年後、昭和四十五年



に光二は生れた。母親似の色白、丸顔、発育のよい可愛い子だったという。

成長するにつれて、母は少しずつ光二の中に自分と異なる部分を発見し、戸惑いをもった。小学生になっても、どの教科にもあまり興味を示さず、宿題もしないでテレビばかりを漫然と見

ているのが好きな子供だった。

努力して、何事も着々と成就していくことが信条で、それが当然のことと思っていた彼女にとって、そんな光二は大きな驚きであり不安のたねでもあった。我が子を親の力で何とか変えようと彼女は躍起になった。「宿題やった?」「テレビばかり見てないで少しは勉強しなさい!」と自分は親から一度も言われたことのない言葉を言わざるを得なかった。日に何度も何度も。

だが言えば言うほど光二は依怙地になって、何もせずにそっぽを向いた。

楽しい会話も笑顔も消えて、光二はただ母を避けていった。やり切れなさに母は仕事を持った。もとより資格、免許はいくつも持っている彼女のことで、就職はたやすい。仕事に就いてさらに必要となれば新しい資格も獲得していく有能さだった。収入も増し、重く用いられることに生き甲斐を見出し、彼女は「笛吹けど踊らぬ」息子へのこだわりを仕事に転嫁してしまっ

た。結局、家庭のことは二の次となつて歲月は過ぎていった。

光二、小学五年生、成績は最悪、ついに万引きまで働いて警察に捕まった。驚いた彼女は狂気のように光二を本道に引き戻そうと悪戦苦闘するが、彼は黙りこくって母の意に反することばかり重ねていった。

登校拒否、また万引き、盗みを繰り返す。

それはだんだんと世間に知れ渡るようになり、長い間善良な市民として、ゆったり暮らしていた一族、親、弟夫婦、その子供たち（同じ学校へ通う光二のいとこ）をいたたまれない思いにさせた。

永年住みなれた家屋敷を処分し、弟一家は母親を伴って、噂の届かない神奈川県に移り住んだ。

小学校を終わる年齢になっていた光二は、仏性庵という修養所に預けられた。親が手を焼き始末に負えない少年たちを預かる所である。

それでも脱走騒ぎを起こし、多額の

搜索費用を払われた。

仏性庵で彼の性根は直るところか、喫煙、飲酒など悪事の数々を仲間から教わり、両親に対しては、苛酷な修養所へ自分を遺棄したという深い恨みだけを募らせてしまった。

仏性庵を出ても行き場のない光二は母の所へ寄生するが、その後も小さな警察沙汰を再三起こし、母の心は休まる暇がなかった。

それらのストレスは、更年期にさしかかった彼女の身体を知らずしらずの間に蝕んでいたようだ。

光二が義務教育を終える年齢になったころ、何らかの事情で代々木のアパートに母子で住むことになり、最寄りの保護司である夫の保護観察となつて、私たちと親しく付き合うようになったのである。

*

昭和から平成にかけて最好況期、バブルの時代に倭文子さんは建築関係の資格を生かしてよい仕事に恵まれ、高収入を得ていた。

光二は金蔓の母に決して暴力を振るうことはなかった。朝、母の出勤後アパートに戻り、休養し、母が帰宅するころ、新宿などの盛り場でいがわしいアルバイトをしているようだった。すべての事情を打ち明けれられ、頼られた保護司は光二のことをドンと引き受けたものだ。

光二も過去を問わない夫に不思議と親しんで、子供たちが果立ってしまった我が家の末っ子同然に、足繁くやって来た。

それでも時々、警察から呼び出されるような事を仕出かし倭文子さんから連絡が入ると、仕事のある彼女に替って夫はすぐさま警察へ出向き、留置中の雑事を片づけた。

これまで一人で背負っていた重い荷物をやっと肩代りして貰うことができたところ、彼女が、ちょくちょく我が家に立ち寄った。あり合わせの夕食を共に取り、夜遅くまで話し込むこともあった。

「これまで何度、光二を殺して死にた

いと思ったかわかりません。でも年取った母がどんなに嘆くかと思うと、それも出来ませんでした」

「多くの友だちを失いました。事が事だけに恥ずかしくて、私のほうから、もう友だちに会う気がなくなっていました……運命ですね、何事も……」

と涙ながらに本心を吐露して、ひとりアパートへ帰って行くこともあった。

結婚して十五年、それまでの平穩な人生は修羅の日々と変わり、弟夫婦と暮らしながら、いつも光二の所業に悩み、泣かされている不運な娘倭文子さんを気づかってくれている老いた母親に孝行することだけを、僅かに生き甲斐にして歳月を送ってきたようだ。

そんな間にも光二はまた悪行を犯し、とうとう少年院送りとなって雪深い施設へと送られた。我が家へ来て倭文子さんは、

「少年院に居る間だけは、夜の夜中の警察からの電話に脅かされないでホッとできます」と寂しい笑い顔で言った。

二年間の少年院生活を終え、光二は

成人となったが定職はなく、相変わらず母親に寄食していた。

何とか手に職をと夫も骨を折ったが、飽きっぽい彼には辛抱できなかった。

そうこうしているうちに平成四年四月、悪夢のような出来事が我が家を襲った。末娘の再起不能の重大事故！

静岡県の伊東市に駆け付け、そのまま奈落の底へ落ちこんで打ちひしがれている私のところへ、倭文子さんは飛んで来てくれた。

懸命に私を励まし、慰め、共に涙を溢らせて泣いてくれた。事情は異なっても成す術もない子を哭く母親同士だった。

しばらくの間、どうしても立ち直れなかった私だったが、一年を経過するころ、周囲の人々の支えでようやく元氣を取り戻してきた。

そのころから倭文子さんのお母さんが健康を損なわれ、十月にとうとう他界されてしまった。納骨の法要も済ませ、全てが終わった十二月三日、あの運命の日がやってくるのである。

光二からの知らせを受けて、茫然自失、言葉もない私たちだった。

*

葬儀の後、義妹さんは言っていた。

「本当に親孝行なお義姉さんでした。

お互いに思いあって仲がよくて一卵性？の母娘みたいでしたね」

母に愛され、母を愛し続けた彼女は、脅やかされる光二との母子関係から遁れて、幸福だった優しい母と娘だけの世界へ旅立って行ってしまったような気がしてならない。

彼女にとって結婚とは一体、何だったのだろう。そして子を持つということは？

「子、子たらずといえども親、親たれ」十数年を、くちびる噛んで、涙をこらえて働き続けた倭文子さん。今は安らかにと冥福を祈るばかりである。

矢の如く地獄へ落ちるつまづきの

石とも知らず拾いみしかな

山川 登美子

(え・筆者)

おこつてゐる場合じゃないね

反抗期に受験勉強の疲れがプラスして、何もかも氣にくわぬらしい十六歳の我が息子。「かあさん腹へった、なにか頂戴」と、久しぶりに夜食の請求をしてきた。

「よしきた」とばかりに、手打そばにとろろをかけて、おまけに卵の黄身ときざみねぎ、えい!! もひとつのりのおまけだ。出来あがったそばを二階の部屋に運ぶ。「おまちどう」と机の上ののせたが箸をとろうとしないで、しばらく無言、そして曰く「かあさん、これ、あてつけ? ぼくはねえ、腹へってる時にこうゆうもん見ると、吐氣がしてくるんだ」

大人になりかかった子供たち

また、すね始めてるぞと思っていると、「いいよ、仕方ない食うよ」と、まんざらでもなさそうな顔をしてまたたく間に、一滴の汁も残さずすすりあげた。

「ああ面白くねえ、公立の受験やめようか、どうせいいんだばく、学歴なんかいらねえ」「ふーん、でも中学だけじゃ職につくのが大変らしいからねえ」と言う私にそっぽを向いて「どうして親はそんなことしか考えないんだろ、おかしいよ、中卒と高卒とどれほどちがうのさ、いいよぼくはK農場で牛のうんこ拾いをするから」と言っ

岩手県盛岡市 工藤愛子

け加えて「T君のおかさんも中卒は人間のくずだみたいな言い方をしたと言ってT君がおこってたけど、おかあさんも同類だよ、情ない」……。

つい最近まで、絶対一高に入ってT大学を出てから新聞記者に、いや作曲家に、等々、夢をふくらませていた息子が、公立高校受験に疑問を抱き、気のりしてないふう。

「あなたねえ、私立高校が受かってるんだしそれほど心配しなくてもいいと思うよ。もう学費も納めたしクラブだっていろいろあるそうよ、特に剣道部はつよいんだって、それに家から近いし、いいことづくめじゃないの」と、ここまででやめておけばよかった

のに、息子が無言でいるのをいいことにして「難を言えば校舎が古くて汚ないけどね、あとは月謝が公立の三倍で市内で一番高いんだって」と、べらべらしゃべりまくっていると、いきなり「何くだらないこと言ってるの、そんなことばくに関係ないよ、井もって部屋を出てってよ」

日ごろは、めったに大声出さない息子が「ごちそうさま」のかわりに大声でどなる。びっくり仰天の私は、そそくさと階段をかけおりた。眠い目をこすりながら、せっかく夜食を運んでやったのに、何をおこってんだ、失礼もいいとこだ、全く腹立たしい、明晩から絶対構ってやるもんか、胸くそが



自然食通信 64

隔月刊／定価五七〇円
千二百〇円

特集
冷蔵庫やめて

ワイルドに暮らそ

何でもかんでも冷蔵庫にしまいこんで、結局生ゴミをふやしていませんか？ 冷蔵庫に頼らなくても食べ物をおいしく保存するちょっとした工夫、たくさんあります。そして冷蔵庫が無いからこそ暮しのお楽しみも。地震が来ても停電になっても、これでダイジョーブ！

寝たきり少女の喘鳴が聞える

山口ヒロミ・文と絵 定価二二六六円 A5判上製

明日を保証されぬ命としてこの世に誕生した天音あまね。這うことも立つことも喋ることもないまま、一刻も絶えることのない喘鳴を生むあかしに十四年の時を重ねて天音は今、匂いたつ少女期に。娘の内なる生命力の強さに支えられながら綴り続けた母の記録『あまね通信』が一冊の本になりました。

自然食通信社
☎03-3816-3857



悪いったらありゃあしない、すぐ反抗的になるんだから、バカ!!とかわつと頭に血がのぼる。

ところが時間が経って落ちついてみると、ここで私がおこってる場合でないということに気づいた。

息子は生まれて間もなく、急性肺炎、アトピー、小児ぜんそく、はしかをこじらせて小児結核、とあらゆる病気をさせてしまった。私が過労で倒れ、長期入院中のことで、息子の健康

に目がとどかなかった。病氣中も看病もしてやれなかったことへのもどかしさと、くやしきで悲しみの日々を送った一年半の入院生活だった事を思い出す。

身体障害者になった私は退院後迷わず職を去り、専業主婦になり息子の世話にあけくれた。しかし息子の体は、病氣病氣のくりかえしで、体力と共に氣力もなく、そよっと風が吹くとすぐ鼻水を流し熱があがる。

近所の人達は「ゆうちゃんが風邪ひいたら必ず名前のついた風邪がはやり出すのよね」とか、「風邪の神」のニックネームまで。

それが小学五年のころ、はげしいスポーツは無理だろうと言われながらも自分から進んで、スポーツ少年団に入りサッカーを始めた。そこで球ひろいをしているうちに食が進み体重もふえ始め少しずつ体力もついて来た。そして中学三年の今、一人前の体に成長し無事反抗期を迎え、「生とは、死とは」「何のための学問か」等々、順調に悩み始めている。

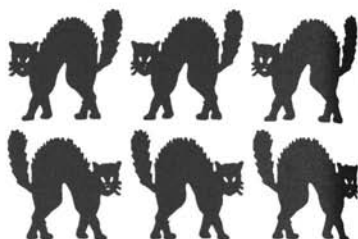
それを見て母親の私が本気で腹を立ててどうする、よろこぶべきことではないのか。

近い将来、社会に大きく羽ばたく日のために大いに悩め、苦しめ、そして考えよ。

私はどんな難問をぶつけられようと、反抗されようと、どんと受けようじゃないの、社会の宝になれるよう頑張れ息子よ!!

サブ

レ シ ー ブ



天皇陛下

茨城県北相馬郡

大庭杞子

「わいふ」誌上で、天皇論が活発にやり取りされているのを読んで、私はビックリしてしまった。

なぜならば、私自身はまったく「皇室」というものに、興味がなかったからだ。天皇家、というものが、日本にあることは物心ついた時から知っていたが、（なんて気の毒なところに生まれてきた人達だろう）と、思っていた。つまらなそうな行事には出席しなければならぬし、つまらない行事だからといって、身体をモゾモゾさ

せたり、ましてや居眠りしたりするわけにはいかない。

寝ころがってテレビを見られる、貧乏な庶民に生まれてよかったなあ、と常々思ってきた。

それでは、天皇家がなくなったほうがよいと思うか？というところ、そういうわけではない。雅子さまのご結婚の時に行なわれた行事、あのようなのは、天皇家がなくなると失われてしまう。あんなものは必要ない、と言われてしまえばそれまでではあるが……。

私としては、大変失礼な例えで申し訳ないが、トキを絶滅から守ることが必要なように、天皇家も文化遺産として守ることが必要なのではないか、と思っている。ま



た、現在の天皇家の位置はそのようなものではないか、とも思ってきた。

そのようなわけで私は、生まれてから現在に至るまで、天皇家の方々に一目お目にかかりたい、などと思ったこともなかった。

しかし、私と同じくらいの年齢(?)と思われる伊藤琴子さんが、美智子さまに会って、あれだけ感激なさるのだから、私も一度、天皇家の方々に身近でお会いして、自分自身にどのような心境の変化が起るのか、試してみたい気が、今はしている。

「親」はどちら?

仙台市太白区 横山のり子

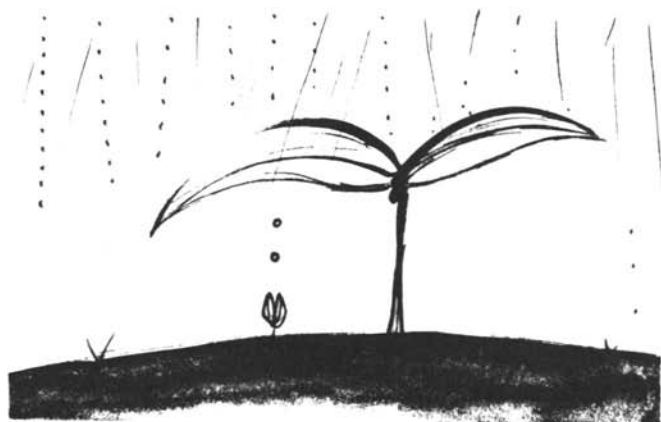
二五二号「賢明な義父母」「すべてをまかせる『子育て』」を読み、何となくやましいことかと嘆息をついていた私。そして二五三号のサーブleshootingで大塚さんの

「どうして自立している娘夫婦の生活に援助という名目で介入するのか」という意見を読み、また嘆息である。

私も初めての子を産む時、子供をどこに預けようかとまず考えた。育児休業制度がなかったので、産休明けから預けなければならぬ。が、六カ月未満の乳児を預かってくれる保育園は非常に少なく、遠い所にしかなかった。それで、とりあえず半年はというつもりで義父母に頼ることにしたのだが、これが失敗だった。

義父母にとって孫の面倒をみることは「援助」というより「権利」だったのだ。私と義父母は「親の座」を奪い合うようになってしまった。「すべてをまかせる」とができない私と、「賢明」でいられず次々と口を出す義父母。夕方、子供を迎えに行くとき、一刻も早く帰りたい私を引きとめ、最愛の孫を母親に返したくない様子がありありと感じさせられる(実際、義父は後に「引き裂かれるようでつらかった」と言っている)。そして、「今日はこんなことをするようにになった」などの話をして、自分たちこそがこの子を最もよく知っている

のだという事を強調する。私は私で、それに張り合ってしまったのだから始末が悪い。義父母が喜んで第二の子育てを楽しん



でいるのだから、それをほえましく、ありがたく見て、任せればいいのだが、それができない私。

離乳食が始まると、出てきた便を見て半日前に向こうで食べさせられてきた物に文句をつけ合う。私が小児科の健診で言われてきた事を振りかざせば、義母は、近所で孫を育てている友人の体験談をつきつける。義父母と私は急速に険悪になっていった。

半年が過ぎるころ、「保育園に預けたい」と言い出したら義父母は「実家で預かると言っているのに保育園とは何事だ！」と怒り出した。

私が「親の座」を取り戻すためには退職するしかなかった。こんな事なら初めから退職していたほうがマシだった。今でも情けなく思っている。

「三歳児神話の根拠」 を読んで

千葉県佐倉市 望月千枝

ここまで隙だらけの構えで反論を誘われると、気が小さい私はどきまぎしてしま

う。これは何かの罠だろうか……!?

まずこの人はバランスのとれた情報収集をしていない。この時点ですでに「三歳児神話根拠説」は破綻している。

なにしろ神話と名が付くくらいだから、三歳までは母親の手でなんてウソツパチですよという内容の情報は多い。私のようにボーンと活字を追っているだけの人間の目にもキャッチされるほど多い。しかも経験談に基づく分析が多い。

それらの情報にかくくなく背を向けて三歳児神話を肯定する説ばかりを受け入れるその強引さに、もしかしたらこの人は、育児に専念している自分に迷いがあって、それを振り切るためにあえて理論武装しようとしているのではないかと疑いさえ持ってしまう。

何を信じようと基本的には個人の自由だが、本に書いてあることをうのみにするのでは芸が無い。すりこみの話にしても、ホモ・サピエンスの場合はもうちょっとましというか、どうにかなるもんだと思うし、乳幼児期における母子関係と犯罪発生率うんぬんの引用に至っては大きな無理があ

る。そもそもこの説自体眉つばものだと思うが、それ以前に「母親との関係がうまくいかない」ことを即「母親が常に傍らにいない」と曲解していないか。それを以て三歳児神話を根拠と言いつけるのは暴論もいところだ。これでは、母親が長期入院を余儀なくされている子どもや、親と死別した子どもの立つ瀬がない。

私は子ども自身の育つ力というものを信じたし、それを社会全体で温かく見守るのが理想だと思っている。誠実に子どもを育てるといふことと、母親が自分で我が子を育てるといふことははっきりと区別されなければならない。

そしてナイス編集というか、続けて載った太田さんの「三歳児神話」考。ここに出てくる自治体の首長始め、三歳児神話を声高に唱えるオヤジたち。神話賛美度が高いほど、保守色が強くなると私は踏んでいるのだが、こういう輩を見るたびある質問をしたくなる。

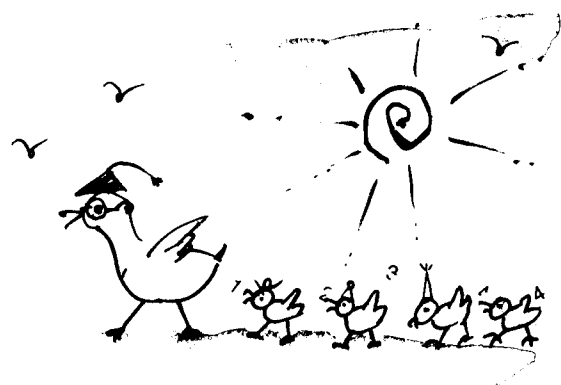
「ではあなたは、現在の天皇の人格形成に問題があったとお考えなのですか?」と。何と答えるだろう。すごく興味がある。

三歳児神話・聖母 幻想の危険な一面

東京都練馬区 安斉みちよ

三歳児神話という言葉が出てくるたびに不思議に思うのですが、この三歳までは母親の手で子どもを育てるべきだという説は、いったいいつから普及したのでしょうか。発生のきっかけとなったのは「三つ子の魂、百まで」という格言なのでしょう。詳しく存知の方は教えて頂きたいと思います。サラリーマン家庭が多数となって、専業主婦が数多く発生する前は、母親であっても農業や家内工業の重要な労働力でした。産後の肥立ちもそこに田や畑に立ち、赤ん坊はお年寄りや年長の兄弟が面倒を見ることも少なくなかったと思います。

実際、私の母の子ども時代には、学校に幼い兄弟を背負ってくるものもいたし、母自身は末っ子であったので兄弟の世話をしたことはないが、近所の赤ん坊の世話をよくしていたそうです。どうしても手のないときには、竈の中に赤ん坊を寝かせて、田



圃の畦道に置いたこともあったそうです。三歳までは母親がみっちり世話をしなければ、情緒面での障害がおきやすいという説をうのみにすれば、昭和初期までに幼少期を過ごした人の多くがあてはまっています。

本来、子どもは母親との関係を核とした中で、様々な人に接し、色々な影響を受け

ながら育ってゆくのが自然な姿なのではないでしょうか。

母親がどんなにがんばったところで、しよせん一人の人間が与えられるものは限りがあります。

わが家でお世話になっている小児科の先生は、

「働いているママの中で、子どもをおばあちゃんやベビーシッターに見てもらっている人もいるんですけど、そういう子は僕が見る限りなんとなく子どもらしさに欠ける面があるんですね。僕は子どもは社会性が必要な年齢になったら、なるべく早く子ども同士の世界に入れたほうがいいと思っています」とおっしゃっています。

三歳児神話や聖母幻想にとらわれすぎて、母親が自分の欲求を何もかも強引に捨て去って子育てに向かった場合、あきらめた欲求や目的を子どもに実現させようとずるケースがあります。

これは表面上は、わが子の幸せを考えてよりよい道を歩ませたいという大義につつまれていて問題が分かりにくいものです。子どもは母親の喜ぶ顔を見たい一心で、

母親の望む道を進もうとする。それがたまたま本来子ども自身が望む方向と一致した場合には問題は少ないが、ずれていた場合、子どもは他者のために生きようとし続けた結果、本来の自分自身を失ってしまい、成長してからも自分を持っていないという不安定さに苦しむことになる。こうした症状をもつ人をアダルト・チルドレンと言います(アダルト・チルドレンになってしまう原因は他にも色々あるのですが、それはまたの機会に)。

子どものために何かをあきらめたと感じ続けながら、ただ物理的に側にいるだけでは、はりぼての子育てになってしまいます。ひとりの人間として、どう生きたいのかという問題をないがしろにしてしまっただけは、結局、子どもにとってもよい結果は出ないと思います。

女性としての生き方も多様化しています。子どもとの関わり方も、人それぞれ違っていてよいはず。それは、各家庭の中で話し合ったり、試行錯誤しながら決めていけばよいことです。

「親の背を見て子は育つ」ということわざ

のほうが、三歳児神話よりずっと重みがあると私には感じられます。

アダルト・チルドレンの一人として、三歳児神話や聖母幻想に必要以上にとらわれてしまっ、役目としての母親をする事の危険性について書いてみました。

神話をのり越えられれば

千葉県流山市 福田豊子(33歳)

二五二号「おさない子を育てる」の「三歳児神話の壁」に対して、何通ものご意見ありがとうございます。これまで投稿した中で、初めて反響があり、正直言って驚いています。確かに私自身、多くの人に現状を訴え、アドバイスしてもらえたら……という気持ちがありました。サブプレシブに掲載された三つの意見を、貴重な助言として、参考にさせて頂きます。特に河野道子さんの文を読むと、私自身が認めたく

なかった甘さを見通されたような気分になり、批判を素直に受け止めたいと思っています。

私のその後について報告しますと、この四月から某大学の女性文化研究センター研究生となりました。女性学を修士レベルで学ぶための準備期間(受験勉強の期間)として位置付けています。

研究生に応募したのは三月。保育のことできりがりまで迷いました。上の子は幼稚園、下の子は週一〜二回近所のお友だち宅に預けるという体制で精一杯だったからです。それでもとにかく、やってみよう、みすみす一年待つのは耐えられない、と決断しました。

あらかじめ覚悟はしていたものの、研究生になってみると、中途半端な状態を改めて痛感する毎日。上の子が幼稚園に通っていると下の子を公立保育園には預けられない。やっぱり無認可保育園に預けようか。でもできれば公立のほうが安心だし……。

考えた揚句、以前相談に行った市役所の児童家庭課に再び行ってみることにしました。窓口では前回の担当者が出てきてくれ

て、好意的に対応して下さいました。幼稚園に慣れている上の子を今から保育園に入



れるのは、児童福祉の観点からかどうかと思われる、という主旨の理由書と、週四日以上、一日四時間以上の就労証明に類するものがあれば、なんとか申請できる、とのことでした(私の場合、就労証明ではなく就学証明となる)。

五月入所の申請の締切は四月十八日、つまり私が市役所に行った次の日だったので、即決を迫られることになりました。さっそく私は、保育園に子供を預けたこと

のある友人たちに電話で相談しました。皆、ここに至るまでの状況をよく知っている人たちで、彼女たちの「きっと大丈夫よ」という言葉を聞くために、電話をかけているようなものでした。

その夜、主人が帰宅する前に、「わいふ」二五三号を取り出し、サプレシブに掲載されていた「三歳児神話に関する意見」を何度も何度も読みなおしました。

主人を説得するには、私自身が確信を持って「大丈夫」と言い切らなければならぬのです。八月には三歳になるのだから、きっと大丈夫。主人への説得は、同時に私自身への説得でもありました。

先日、晴れて入所決定の通知を頂き、面接を終えれば、五月一日の入所を待つばかりです。しばらくは、泣き叫ぶ子供を見て、心乱れる日々が続くでしょう。子供のためにも、私自身が毅然とした態度をとらなければ、と思っています。

「子供がいるからできない」という言い訳はもうできません。保育体制も整った今、この一年を無駄にはできない、と自分自身に言いかせています。

黙っていてもはダメだ

横浜市磯子区 十文字圭子 (32歳)

二五三号の「いじめ」についての時事放談で、「誰かが強ければなんとかなる」「守るのは親しかない」という意見には、少なからずほっとした人も多いと思う。これから我が子を集団の中に入れようとしている親の大部分が、今の「いじめ」に脅威を感じているだろうし、かといってどう対処しているのか分からない、という状態だと思うからだ。

全く同感だ。「どんな理由があろうとも、いじめてはいけない」ということを徹底して教え、また「嫌なことは嫌だと言える」ようにすること。簡単なようで難しいが、これしかないと思う。

小学校四年の一学期、私もいじめられた。原因は顔の痣。私は生まれつき、左の頬の半分くらいを占める大ききで、赤い痣がある。周りに恵まれていたのか、それまではただの一度も言われたことはなかった。両

親は氣にして色々と手を尽くしたらしいが、本人はいたって呑気に、まるで氣にも止めていなかったから、そのショックたるや物凄いのだった。「お岩さんみたいな奴は俺たちの仲間には入れない。気持ち悪いから、そばによるな！」

十歳の私には「死ぬ」ということは思い浮かばなかった。毎日悲しくて「学校に行きたくない」と泣いていただけだった。鬼子母神を自認する母は怒りまくり、学校に怒鳴り込み、担任は何回もその度にクラスで話し合いを持った。特に激しく攻撃していたのは、同じ班の三人の男の子。それが徐々にクラスの男子にも波及しつつある時に夏休みが来て、班が変わると急に収まった。

記憶は定かではないが、今度の班の仲間、何かとかばってくれたようだった。さらに仲よくなった女の子たち。全面的に擁護してくれた親。それと私自身が強くなったことがあると思う。

それまで（自分でいうのも何だが）おとなしく内向的な優等生タイプだったのが、その時期を境に、周囲が驚くほど積極的にな

なり、自分の主張を大勢の人の前でさえ言えるようになった。「黙っていてはダメだ」、そのころ私ははっきりそう思ったことを覚えてる。

「いじめられるほうにも何か原因がある」とはよく言われることだが、たとえそうであっても、親が本人に向かって言うべきではないと思う。親はあくまでも、「あんたの味方よ」と頑張っ

二五三号の 田中慶子様

横浜市泉区 黒崎和子（59歳）

母堂を特養老人ホームに入れるいきさつ、他人事でなく読んでいる。私どもも軽度痴呆の義父が二月に特養ホームに入所した。

わが家の場合、きっかけは私の病気だった。一九九三年六月、おかしいと思いながら受診を一日のばしにしていた私が、いよ

いよ覚悟をきめて病院へ行った。見つかったのは子宮ガン、子宮体ガンだった。病院で日程のとれ次第手術ということになり、入院期間は三カ月か四カ月か開いてみなければわからないという。私は病院から福祉事務所へとんで行った。当時、夫は毎週末には帰るが単身赴任中であり、私としては父の行先としてショートステイしか頼るところがなかったのだ。

ケースワーカーは事情を聞くとすぐあちこちの老人ホームに電話して取れるだけの予約を取ってくれた（父はショートステイの利用者登録がしてあったのでその分話は早かったと思う）。ただ、すでに七月に入っていて夏はどうしても混むということで、予約は三カ所の老人ホームにわたったが取れない期間もあった。数日は教員の共働きをしている弟夫婦宅へ、別の数日は仕事の盆休みに合わせて妹に来てもらい、まだ埋まらぬところは息子の妻（名古屋在住）に応援を頼んだ。

幸い私の入院はちょうど二カ月で済んだのだが、この間に夫はきょうだいたちの了解をとりつけ、父の特養ホーム入所の申込

みをしたのだ。夫はあとで、もし私の発病がなければ思いつきもしなかったろうと言った。そして福祉事務所でも受付けてもらえなかったらと私も思う。この点では私は、失った自分の器官に一種の特別な思いを禁じ得ない。よくぞガンになってくれた！と。

私が退院してからはそれまでも利用していたショートステイ、デイサービス、ホームヘルパーという三方からの援助で何とかやってきた。

そして一年半。

昨年暮に入所の内示があったとき、私たちにも心残りはあった。しかし双方の幸福の総計を考えるとこの機会を逃す手はないと思った。

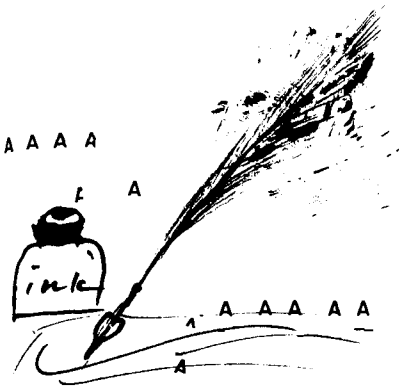
私は依然通院しており、夫も心臓にいわくを抱えていては、何かあったときどうにもならなくなる。

父は入所後帰りがたってスタッフの手を焼かせていた。私たちはいたたまれぬ思いをした。だが馴れてもううはかはないのだ。今、そう思いながらも一日一日を暮している。

投稿雑感

東京都武蔵野市 加藤泰子

“わいふ”に投稿した原稿がボツになった。びたりとキマったという感じがなかったから掲載される自信があったわけではないが、月が変わり、何日か経つと、それなりに郵便受が気になっていた。“わいふ”にはじめて投稿した前回の文章がへあまりにあっさりとして掲載されたので、ちょっとその気になっていたところがあった。二五二



号の大井さんや二五三号の西尾さんの文を読んで苦笑してしまうほど私自身の気持ちと似ている。この件に限らず“わいふ”の投稿者の考え方に全く同感！とうなるものがよくある。“わいふ”の読者になって一年余りだが、居こちのよさそうな雑誌に出会ったと思っている。

私が“わいふ”を知ったのは朝日新聞の家庭欄の記事からだ。た。「ひととき」欄に載ってみたいという私の目標が、二三年前から実現するようになって次の目標を探していたところ、同紙上で魅力的な紹介の仕方がされていた。“わいふ”を知って「これだ！」と心の中で叫んだのだ。「ひととき」は七百字までという小さな文章に限られるし、約六カ月以上投稿間隔をあけなければならないということでも、もっと長く書けて、いつでも出せるような場を求めている。でも会員となって“わいふ”が送られてくるようになってから、しばらくはなぜか投稿の意欲が湧いてこなかった。それには二つの理由があった。まず、あまりにも自分の考えていることと似ている人の文章が目につき、改めてペンを取っ

で切り込んでゆく目新しい何ものも自分に持ち合わせていないような気がしてしまったこと。そして、これは本音だが、会員となった人だけの〈書店で売っていない〉閉じた世界の雑誌だということ。「ひととき」

に載った時は日ごろの親しい友人から、すぐに「読んだわよ!」という反響があるし、年賀状交換くらの知人からも「読みました」という感想をいただく。揚句の果てに母の友人やら、おじ、おば、いとこたちまで声をかけてくれる。この新聞というものの持つ公共的な性格の魅力は何とも言えない快感だ。こう書いてしまうと自分が単に目立ちたがり屋だけみたいだが、自分の考えを「表現する」発表の場は広いに越したことはないと思う。でも逆の見方をすれば、読者が限られていることで、いろいろな本音が出やすいかも知れない。私も「わいふ」にならうということも書けると思って、心の中のこんなつぶやきまでもさらけ出しているのだから。

ところで私も西尾さんと同様、掲載の確率が低いほうが意欲が湧くと思っている。ポツを体験しての実感である。

新生「わいふ」に期待して

福岡県筑紫野市 重松順子（37歳）

二五三号、久しぶりに隅から隅まで読みました。サブタイトル「女の言いたい放題誌」が「読んで、書いてネットワーキング」に。

まずグラビアの村上信夫さん、三月まで朝八時三十分にお会いしていたあの方に、こんな私生活があるなんて……。

それから戦後50年記念連載二編、言葉もない阪神大震災の体験談。「わいふ」が少しずつ変わっていく、という実感、うまく言い表わせられないけれど、女にこだわらなくなったこと、拡がりを感じることでしょうか。

私事ですが、投稿を中断していました。昨年春から夏にかけて七・八編を送り、その中で二作がポツでした。書いていてこれは絶対に載るゾと自己満足した長編が採用されず（不採用の理由は、冷静にみて納得できるものでした）、反面書き飛はしてろ

くに推敲もせず締め切り間際に出した駄文が意外にも載ることがあり、そんなものかとも思っていました。

僭越な物言いですが、いわゆる常連の執筆陣の中には何の新味もなくなっているつも載るのかなと思わせる人もいます。多くの読者はおそらく黙殺してるのではと想像させる長い連載もありました。逆に、お墨付きをもらった私の採用作品にしてもある人からみると全くつまらないことも多々あるわけです。

何事も批評するは易く、行なうは難し、書くこともしかり。率直に言って原稿用紙五枚以上になると構成を立てる必要があるし非常に書きにくく、二枚程度ならスラスラ書けるのです。野坂昭如が中山千夏にもらした「書くのはやさしい、誰にでもできる。しかし書き続けることが大変なんだ」（細部は違っているかもしれない）という本音は胸に響きます。でも、二五三号の大井さん、二五三号の西尾さんと同じく、私も「これからも書くよ」と声を大にして叫びたい気分です。

（え・西尾順子）

戦

後

50

年

記

念

連

載

2

私と

英語

横浜市港北区

酒井智恵子

夢は英文タイピスト

学校は軍国教育から民主主義へと教育を変えた。社会の変化も著しかった。財閥の解体。農地解放。中でも婦人参政権が十二月に与えられた意味は大きい。せっかくの選挙権でさえ、お芋の一俵のほうが有難いと母は言う。GHQの命令で公娼制度も廃止に……。昭和二十一年（一九四六年）と年が変わると、学校では上級学校に進学する人のために補習授業が設けられた。





1年の2学期（昭和18年）英語劇に出た私。前列左から6人目

私も、父が進学を許してくれるかも知れないとの小さな希望を抱き、そのグループに入った。これとは別に学校では一年間の補習科を作ることになった。学業が三年から四年にかけてすっぱりぬけている、私たち学年のための応急措置だった。

補習授業に加わって間もなく父は会社を辞めた。直接的な原因はある当直の夜に、夜の女を連れた米兵に「部屋を借せ」と乱入され、「ノウ」と断った途端、物すごいパンチをくらひ、目の辺りに青アザを作って、何日も起き上がれない暴行を受けたからだ。父の勤務先の周りは米軍基地だからだったことから、おじけづいたらしい。敗戦というショックも加わっていたと思う。家にいる父を見て、私はきっぱり進学も補習科もあきらめ、好きな英語を生かせる道はないかと模索しはじめた。

私は英文タイピストになろうと決心した。それはどんな職業なのか知らなかったが、家の近くに住むフェリス女

学院出身の斉藤さんという母の知り合いが、横浜に進駐してきた米軍基地に英文タイピストとして勤め、たいそう羽振りがよいらしいと母から聞いたからである。とにかく語学力は必要と目につく物を片っ端から辞書を引きながら英語に直していくという自分流儀の勉強をはじめ出した。

卒業が近づき、私たちはサイン帳を回し、別れの言葉を連ねていった。血相を変えて弾丸を作ったり、焼夷弾の降る中、防空壕へ逃げていったのは、ついこの間のことだったのだ。

旧円の封鎖、新円切りかえなどのこととした世の中に、私は神奈川高等女学校本科第三十回生二百三十人の一人として穴だらけの仮校舎から、巣立っていった。

昭和二十一年春のことである。「学びの庭にも早や幾年……」と歌いながら……。

就職浪人

将来の夢は決まったものの、行く所

とてない私は、家でブラブラするしかなかった。

ちょうどそのころ、隣の町斉藤分町にYWCAがオープンした。そこに英文タイピ科があることを知り、父にねだって速成科に入った。私は初めて見るタイプライターの前に座って、上手そうに叩いている人の真似をしながらタイプをいじくっていた。そこにはインストラクターもいない。

YWCAに通う一方、家の近くにある塾のような小さな洋裁教室にも通い、自分の着る洋服を作っていた。

ちょうどそのころ私は英文タイピストを官費で養成し就職先をあっせんするという「神奈川県語学要員養成所」の広告を新聞紙上で見つけた。

「これだ！」私は飛びついた。

五月十七日の試験には、大勢の受験者が来ていた。大学出と思われる男性や、かなり年配と思われる婦人まで真剣な顔付きで集まっていた。定員は女子二十名。男子十名。

テストの内容はひどく難しく、知ら

ない単語ばかり。私は落ちた。もちろん学力不足もさることながら、テスト直前に初めて出くわした洋式トイレにも少しは責任があったと、今でも思っている。

洋式トイレのことは動員時代の級友、Tさんからそれとなく聞いていた。空襲で自宅をなくしたTさんはその後、湘南方面にある高級住宅に移り住んだ時、その家が洋式トイレだったことから、その様子を話してくれていた。「用がすんだらジャーと流すのよ」と。

テスト直前に入ったトイレがそれだった。そこには、見たこともない便器がある。卵型のふたを開けると中には水がたまっている。どうすればよいのか。後向きに座るなどの発想のないまま、U字型の便座に私は靴のままのつかった。その安定の悪いこと。私は壁に手つき、ほうほうの体で逃げ出そうと、水を流したついでに、せっかく覚えた単語まで流してしまった。テストに落ちたことで、私はしばらく

しょんぼりしていた。

そんなある日、米軍基地で働いている齊藤さんが訪ねてきた。勤務先の部隊長の家で緊急にお手伝いさんを探しているから、来ないかと名指しできたのだった。母がかねがね「うちの娘は英語が好き」と言っていたのを小耳にはさみ、声をかけてくれたのである。

母がインフレで家計のやりくりをしているのを肌で感じていた私は「渡りに舟」と誘いにのった。

〈生の英語に接することが出来る〉

〈母に食費を渡せる〉

その夜、同居している姉が、小さい赤ん坊がいるのに、急いでエプロンを縫ってくれた。

ペシアック少佐

真夏のような太陽が照りつける七月の初め、齊藤さんに連れていってもらった所は、東横線日吉駅近くの第八米軍通信学校の校長室だった。目の前には鼻の高い赤ら顔の大男がいた。その方が私が仕えることになった、校長

兼部隊長の要職にあるペシアック少佐だった。

日吉駅前にある慶應大学を中心に、この辺りの大きな建物は米軍に接収されていた。大学のある丘の地下は、戦時中、海軍連合艦隊指令部が置かれていたことから、戦後、いち早く米軍基地となった所である。

校長のペシアック少佐は、私を連れてきた齊藤さんやレジャー・オフィス（労務課）のマネージャーと話し合っていたが、急に椅子から立ち上がると私の所にきて「ハウ・ドウ・ユー・ドウ・チエコ」とやつでのような大きな手で私の手を握った。あまりの握力に私の手は折れんばかり。しかし、少佐の手からは暖かい血が流れてきた気がした。

ペシアック少佐は私をジープの助手席に乗せると、駅のほうに向かい、駅前の星条旗のはためく慶應大学の広い構内をつつ走り、そこから先は断崖で下の町が見える高台に連れて行った。その辺りには、五、六軒のかまぼこ型

の住宅が並んでいた。米軍のハウジングエリヤだった。

目の前のドアが開き、一人の小柄な白人の婦人が出てきた。その婦人が「マダム」と呼ぶことになったペシアック夫人だった。

促されて屋内へ。靴のままよその家に入るのは初めてだったので、私はおずおず分厚いじゅうたんとを踏んだ。十五畳はありそうなその部屋の壁際には暖炉があり、暖炉前には私が座ったらしずんでしまいそうな応接セットが置かれていた。

私が物珍らしげに見渡している間、少佐と夫人は何やら喋っていた。議論しているような話が終わると、少佐は私に「OK. チエコ。あしたからここに来てください」とりゅううちょうな日本語を発した。

「明日、来てくださいだってー」

〈奥様のおめがねにかなったんだわ〉

——それにしても日本語とは——。

翌日、進駐軍要員としてのややこしい手続きをふんだ。両手の指紋もとら



昭和22年の初夏。姉と

れた。これは身長何フィート、体重何ポンド、髪と眼の色、性別、国籍などを記入するアイデンティティカード（同一人物であることを証明するカード）をもらうための必要な措置であった。それがすむと医務室に連れて行かれ、発疹チフス、腸チフス、種痘などの予防注射を一遍に打たれた。

手続きが終わってハウスに行くところ、意外にも一人の日本の婦人が奥から出てきた。前任者というその人は、私に仕事の内容を大まかに話してくれた。英語のよく出来るその人は、むしろマダムより背が高い。

帰り際に「本当は辞めたくないの。でも親戚がうるさくてね。主人が戦地から戻らないのに敵国だったアメリカ人の家に勤めるなんて！と非難されるのよ」と、さも残念そうな顔をした。私は彼女のピンチヒッターだった。

その夜、床に入っても昼間の色々な出来事が浮かび、深閑とした闇の中で目は冴え寝つけない。予防注射をブツブツ打たれ熱っぽかったことも重なっ

ていた。

思い起こせば一年前には、忠君愛国の沁みこんだ軍国少女として鬼畜米英を心の中で叫び、弾丸作りに励んでいた。同じ自分が今度はアメリカ人の家で働こうとしている。

コーヒーブレイク

翌朝、和英と英和の辞書とエプロンを後生大事に抱え出勤した。

メイドとして働き出して分かったのだが、この家は見た目より大きかった。

玄関は建物の中央にあり、リビングルームの一部となっていた。リビングルームを中心にして片方には二つのベッドルームがあり、もう一方は台所兼食堂と小さなベッドルームがあった。

仕事は台所の片付け、ベッドメイキング（これは意外に骨が折れる。シートをしっかりとマットの下に挟みこまねばならなかったから）そのほか掃除、洗濯、アイロンがけ、などなど。

朝一番に流しにある食器をカチャカチャ洗う。次は洗濯。たった二人の家庭なのに洗濯物は山のように。匂いも泡立ちもよく、その上すべすべした石けんでごしごし洗った。Yシャツ、ブラウス、テールブルクローズなど色とりどりの衣類が春の泡雪のような泡のなかで見え隠れした。

毎朝十時になると、奥のベッドルームから絹ずれのような音がきこえてくる。と同時にうっとりとする香水の香りと共にペシアック夫人がシースルーのネグリジェの上にヒラヒラしたピンクのハウスコートを羽織って、汗だくの私の前に、蝶々のように現われる。「グッド モーニング チェコ」「グッド モーニング マダム。ハウアー ユー」朝のあいさつが始まる。私はすぐ奥様のブレックファーストにとりかかると。ご主人様は、私が朝八時に着くころにはもうお出掛けになっている。

奥様は一旦、旦那様を見送った後、またベッドにもぐりこまれるらしい。

十時がマダムのお目覚めタイム。

ブカブカとパーコレクターがコーヒーの香りをまきちらすころ、私は窓辺のテールブルに花模様のついた食器を二人分並べる。

「カム ヒア チェコ」

奥様はしなやかな白い手先を自分のほうに向けて私に声をかける。

「イエース、マダム」

朝から息つく暇なく動いている私には、それはうれしいコーヒーブレイクだった。

テールブルの上には、我が家のちゃぶ台に決して乗らない白いふわふわのパン、バターにチーズ、ハム、砂糖などが目の前に並ぶ。しきりにすすめてくれる奥様。欲しいのに遠慮する私。奥様はハムなどを取って私のお皿にのせてくれる。

会話

コーヒーやチーズもさることながら、ここでゆっくり話す会話に私は心を弾ませていた。うれしさにどきまぎ

仲のよいご夫妻

しながらも、私にはちょっとした言葉の戦争であった。何か言われてもチンパンカンパンで即答が出来ない。しばらく相手の言葉を頭の中で反すうし、それでも分からないとスペルを聞いてやっと「イエス」か「ノウ」と答えた。

一カ月ほど前の五月末に日本に着いたというペシアック夫人は、なにかと日本のことを知っていた。

写真の舞妓さんを見ては「だらーりと垂らす帯は何の目的？」

「どうしてあんな固そうな物を身にまともの？」

「着物にはボタンがないようだけど、どうやって止めるの？」

夫人の心には好奇心が一杯つまっていた。飽くことなき質問に活躍したのが和英と英和の辞書だった。説明の足りないところは下手なイラストを書いたり身振りを加えてボディラングエイジを使った。

この戦争は戦えば戦うほどに親近感を増し、二人で納得がいくと、ケラケラ笑った。

ペンシルバニアから来日したご夫妻のルーツはポーランド。少佐は見るからに精かなふうぼうをしていた。鷹のような目が鋭く光っている。父親を早く亡くし母親の手で育てられたと奥様は言う。名門、ウエスト・ポイント陸軍士官学校出身の二十七歳。奥様は一歳年上の姉さま女房。お二人が知り合ったのは、陸軍士官学校主催のダンスパーティだと言う。奥様は日本語を全然口にしないが、ペシアック少佐は日本語が上手な人だった。

私の女学生時代は、敵国語の名のもとに英語放逐の憂き目に会ったのに、アメリカの陸軍士官学校では日本語科を作り、そこでは英語を禁止し、日本の新聞や雑誌、「軍人勅諭」や「戦陣訓」まで教材にしたというから驚く。

二人はカソリック信者であった。「ハニー」「ダーリング」と呼びあう二人は仲がよい。ご主人が家を出入りするたびに、私が側にいようがいまいが

お構いなく、吸いつけられるように抱きあい長いながいキスを交わした。

ご主人は背を丸めて奥様を抱きかかえ、奥様は背伸びをした。それは西洋の恋愛映画の「こまを見ているようで、私はポカンと眺めた」。

私は一度も父が母を抱きしめている光景を見たことがなかったので、初めて見るキスシーンは強烈だった。

行方不明の荷物

庭の草むらでこおろぎが鳴き出したところから奥様の機嫌が悪くなった。

日中、二人しかない家の中で、使用人としてはいたたまれなかった。こちらまでへんな気分になり、辞めたい衝動が私を襲った。しかし、私が一人前に働き出したことを喜んでる母に「辞めたい」とは言い出せない。

どんなにつらくても我慢しくなくて、自分に言い聞かせ、奥様の顔を見たい見たい頑張った。

ペシアック夫人の憂うつの原因は、来日する際に本国から送った引越し

荷物が待てど暮らせど着かないこと
だった。ご主人とその話になると

「ミッシング（行方不明）」と言い、
奥様の白いひたいに縦にしわがよった。



19歳の私

日本人が盗ったと言っているみたい
だった。「ステイール」とよく言うの
で発音通り辞書をめくると、「STE
AL＝盗む」とあった。そのとばっち
りが同じ日本人の私にきているのだっ
た。私はひたすら荷物が無事に到着す
ることを願った。

それから半月もしないある晴れた秋
の午後、待ちに待った荷物がどさっと
着いた。

途端に奥様のきつい目がゆるみ、ご
主人様は愉快そうにピーピー口笛を吹
き出した。奥様にはウイंकをして喜
びを体中で現わしている。頑丈に梱包
された荷を腕まくりしてはどき始め
た。木箱の釘をぬくペシアック少佐の
腕の、金色の毛は西日に当たって光っ
ていた。

とにかく私はほっとした。一歩基地
のゲートを出た日本の社会は極端に貧
しく、人心はすさみ、物量豊かなアメ
リカ軍への犯罪は多発していたから、
日本人が盗んだと早合点されても無理
ない状況にあったのである。

荷ほどきがすみ、それぞれの家具がそれまでのガランとした部屋に納まると、見違えるほど立派な住まいとなった。机の上には、ウエスト・ポイント士官学校卒業記念の厚いガラスの灰皿や、ウェブスターのデイクシヨナリイなどが並んだ。私の背よりも高いランプも置かれた。暖炉のマントルピースの上には、肉親の写真がいくつも並んだ。

ベッドルームには分厚い鏡付きのドレッサーが置かれた。傍らの鏡台には一対の桃色のフリルのついた、ランプシェイドの電気スタンドが鏡の両脇に置かれた。そこに灯をとすると、ランプシェイドからもれる淡い光が、奥様の彫りの深いギリシャ人のようなノーブルな顔に陰影を浮かび上がらせた。奥様は、栗色のゆるやかなウェーブの毛をなびかせながら、せっせとブラッシングをした。

それまでツインベッドのように離れてあったアーミイ用の鉄製ベッドをぴったりとつけ、ダブルベッドのよう

にし、その上に着いたばかりのベッドスプレッドをさあっとかけた。全体に淡い空色のタオル地で、中心に濃いブルーのリボン模様が浮き上がっているベッド掛けを広げると、殺風景だったベッドは途端に豪華な雰囲気をかもし出した。

長持ちのように大きなトランクの衣裳箱も着いた。奥様は中に詰まっている衣類をひとつずつまみあげ説明した。刺しゅうのほどこされているテールブルクロス。そろいのナフキン。レースの花瓶しきなどが次から次へと出てくる。どれもがメルヘン調で豊かな色彩にあふれている。アメリカ人っていい生活をしているのだナァーと感心してしまった。

戦後、初めて公開された外国映画「春の序曲」の中に繰り広げられる、アメリカ人の生活を現実に見る思いがした。

豪華なテールブルクロスを手にした奥様は、「これはブライダル・シャワーの贈物」とにこにこした。

奥様の衣裳の中のピカーはミンクのコートだった。その毛ざわりのなめらかなこと。黒光りして毛足が長かった。クローゼットにズラリと並ぶ洋服の下に、これまた色々の靴が並ぶ。それはそれは幅が狭い靴であった。私の足は成長期にはく靴がなく下駄ばかりはいていたので、横に広がったせいか幅広でその上短い。全く対照的なのだ。私は勤めに行くのにもちゃんと靴もなく、さりとて下駄をはく訳にもいかず運動靴をはいていた。その数量に「アレ、マァー」と声を上げてしまった。こんなに物の豊かな国となぜ戦争をしたのだろうと、疑問が持ち上がった。

色々な事情はあったろう。しかし、戦争は軍部の一部の人によって突っ走ってしまったのではないだろうか。当時、アメリカに行きアメリカの豊かさを知っていた人もいただろうにと、色々と考えさせられる勤務先であった。

—つづく—

(写真提供・筆者)

おすすめの一冊

簡素な食事の本 四季の味・いつもの味

千葉道子 著

東京都新宿区 辻浦知津代

勤め帰りの電車の中で、あるいはマーケットの陳列だなをのぞきながら「今夜のおかず何にしようかな」と考えながら経験はみなさんお持ちのはずです。時には楽しく、時には面倒で放り出したくなるような毎日の食事作り。その中で出会ったこの本は、従来の料理書とはちよつと違った新鮮な印象を受けました。

筆者の千葉道子さんは「シンプル（簡単）でおしゃれ（素敵）なおいしさ」をモットーに、四季折々の身近な食材にこだわる人です。さらに日本の伝統的な家庭料理を、若い人向きに新しくアレンジ

して広く紹介することに努め、朝日カルチャーセンターで教えたり、また自宅で和食塾も開いています。

この本は二三〇ページ程度で手軽な装丁ですが、旬の野菜を主調にした季節料理や、いつでも作れる飽きのこないおかずなど、約百六十種がわかりやすく紹介されています。この他、ご飯類・汁物とか、各種調味料・薬味についての知識など、盛りだくさんに掲載されていて、今すぐにでも作りたくなる親しみやすい家庭料理ばかりです。

近ごろは学校を卒業してすぐ就職し、



そのまま結婚して台所経験をあまりもない女性が多くなっています。でも食に対する関心は一般に強く、栄養のバランスにも気をつけているようですが、昔ながらのいわゆるお総菜が作れない、という声をよく聞きます。

そういう人にこそぜひおすすめしたいのがこの一冊。そして「おいしく食べて元気に生きよう」という、筆者の食に対する姿勢を大いに学びとってほしいものです。

農山漁村文化協会 一五〇〇円

ここから風が



小室等対話集

日本短波放送の「ソングス・小室等の物語」は、福祉をテーマとした番組である。

シンガーソングライター小室等さんがホストをつとめる。本書はその対談の部分をまとめたもの（一九九二年から九四年までの）である。

対談相手は、家族にハンディを持った人がある景山民夫さん、おすぎさん。自分自身にハ

ンディを持っている長谷川きよしさん、萩生田千津子さん、甲斐聖二さん。また、ハンディを持つ人を支える田島征三さん、大滝昌之さん、山田太一さん。

小室等さんがそれぞれの障害について、臆せず、素直なままに本人に聞いている言葉にドキッとす。が、読み進んでいるうちに自然と涙が出ていたり、大声で笑ってしまったり、

その対談の場に一緒に参加しているようになる。

障害を持つということは個性のひとつである。障害＝不自由なのではなく、不便なところだけを手を貸してもらい、また、貸しましょうという自然なかたちで、共に暮らせるようにしていかねければと、読み終えて強く感じた。

ぶどう社 一四〇〇円（書）

老親の介護で力尽きるまえに

行政サービスとことん利用する法



門野晴子 著

「老親を棄てられますか」につづいて、著者の体験にもとづいた老人問題作の第二作目である。

十一年の間、愛憎劇を繰り返し離婚の原因ともなった舅が亡くなり、ほっとしたのもつかの間、ねたきり状態になった妻母の面倒を自宅でみなければならなくなった著者は、社会福祉サービスを受けて非常事態を乗り切ろうと地元の福祉事務所に向く。「まばゆいばかりの老

人福祉サービスが並んでいた。美味しそうなメニューを一見した限りでは福祉国家日本を思わせるが、いざ老母の状態から利用しようとなるとひと筋縄ではいかない行政の鉄壁」（本書まえがきより）

持ち前の明るさとねばり強さでひるまず臆せず、老人介護はうちの中で女がするものだ、ときめてかかっている行政側から各種福祉サービスを獲得してい

くようすがユーモラスに描かれている。

この本を読みながら、四年まえ、突然姑を介護することになり、すぎるような気持ちで福祉事務所を訪ねたときのことをにがにがしく思いだした。

老人介護中のひと、これからひとには勇気づけられる一冊。とくに福祉行政にたずさわるひとたちに読んでもらいたい。

学陽書房 一三三九円（岩）



戸辺政光 著

「平成の米騒動」を心にとめて
いる人が、今いるだろうか？
日本人得意の「喉元過ぎれば」
で、今では自由に美味しい
お米を選んで買っていること
でしょうね。

町のおコメ屋さん、戸辺さん
の書いたこの本を手にして、彼
のように真面目に取り組む人間
ばかりであつたら、あの騒ぎは
なかったのではと思う。

戸辺さんの考え方は、生活ク

ラブ生協の活動に似ている。生
活クラブ生協では米、野菜、肉
etc 業者と契約し、約束を守
ることで、安全で美味しい食品
を手に入れることが出来る。

農家や業者に育ってもらわな
ければ消費者も困る。生産者も
努力するから、消費者のほう
も、価格、形状、量について歩
みより、契約を守ろうと戸辺さ
んは提案する。

家の近くにある。糠を買いに
行ったら「お宅お米買つてない
でしょ」とけんもほろろの言
葉。常に暇そうなおの主人にこ
の本を読ませたい。自由、自由
とおいいいことだけ、おいいい
時だけ摘まみ食いする人にも是
非読ませたい。

戸辺さんの言う「参加する消
費者」の役割を面倒がらず、担
うことに目覚めてほしい。

ゆい書房 一二〇〇円(税)



宮地良樹 著

きめ細やかでしっとりお肌の
人に会ったら尋ねてみたくなる。
「どんなお手入れをしているの
ですか？」

美しさへのあこがれは、顔の
造作よりも、髪や肌の手入れに
関心がいき、ときにはCMに惑
わされて、モデルのようになれ
ると錯覚をしたりする。

群馬大学医学部の宮地先生
は、スキンケアの第一条件は清

潔にすること、普通の石鹸で丁
寧に洗い流すことだという。
どんな高価な化粧品も肌に合
わなければ悲惨だ。トラブルを
避けるためにも商品の選び方や
使用方法を理解しておきたい。

先生はニキビ、水虫、おむつ
かぶれ、アトピー性皮膚炎、
パーマをかける際に注意したい
ことなど五十五の質問に答える。
ところどころ夏にむかって気にな

るのがムダ毛の処理。自分でや
るのなら脱毛クリームを使えば
簡単にできるが、最近ではエステ
サロンで永久脱毛を受ける人も
多く、そのためかトラブルが増
加しているそう。この本、好
きなページやテーマから読み始
められるので、スキンケアに関
心のある人は是非、読んで欲し
い。

ミネルヴァ書房 一六〇〇円(税)

政治って おもしろい

ニュースクール叢書 8



永井よし子 著

「専業主婦」から「活動専業主婦」へ、そして「議員」へ。それが現在東京都文京区の区議会議員である著者のたどった道。仕事を捨てて専業主婦の道を選んだ彼女は、PTAをはじめとする地域の活動のなかから、

学校や教育委員会——大きく言えば政治が子供を守ってくれない現実にめざめていく。住民の声に耳を傾けるどころか、それをおしつぶそうとする男の議員たち。住民運動にかかわるなかで、著者は自分自身が

議員になる選択に踏み切っていく。女性が政治にめざめる道筋が具体的に描かれているこの一冊は、後に続く女性にとってよき手引きともなるだろう。カタツムリ社 九〇〇円(喜)

日本人の老後

60歳から100歳まで100人が語る



グループなごん 編

六十五歳以上の人口が一四パーセントを超えた「高齢社会」日本。その中で今、老後を生きているごく普通の人たちはどんなふうに暮らし、何を楽しみに生きているのだろうか。生き甲斐は何だろうか。年をとることをどうとらえているのだろうか

——そういった私たちの関心事に答えを与えてくれるのがこの本。六十歳から百歳までの男女百人分のインタビュー集である。衣食住、人間関係、心と体、趣味など、あらゆる角度からの老後が、本人の語り口を生かした一人語りの形式で綴られている。

る。ゆえに人柄や生き方がより鮮やかに浮かび上がってくる。「いいな、こういう暮らしも」「ここはぜひ、夫に読ませなくては」——登場者が普通の人であるだけに、自分の老後を設計する上で大いに参考になる。晶文社 二九〇〇円(小)

立ち上がる地球市民

NGOと政治をつなぐ



堂本暁子 著

著者は環境保護や人口問題などで活躍している現役の参議院議員。その活動の軌跡を生き生きとした筆でまとめた一冊。私たち市民が、自分たちの主張を政治の世界に生かすにはどんな筋道があるのだろうか。さ

らにそれを国際的にひろげていくにはどんな手立てがあるのか。それが見えてくるという点で、これはいままでほとんど例のない貴重な作品といえる。TBSのディレクターとして取り組んだベビーホテルキャン

ペーン、生物多様性を守る運動、女たちの性と生殖の自由を守る活動など、柔軟な筆で書かれた内容は抜群の面白さ。多くの女にとって、政治をぐっと身近にしてくれる一冊である。河出書房新社 一五〇〇円(野)



フリースペース



円形脱毛体験記

東京都世田谷区 萬匠 範子（43歳）

「ハゲだったの私」と、なかば自慢気に口にして、またやってしまったと反省する。

「喉元過ぎれば熱さ忘れる」どころか、私の場合、口に入ったとたん何を食べたのかを忘れてしまう傾向にある。三年前に同様な症状だった友人の家では、いまだにその言葉は禁句だそうである。

去年は、他人が口にする「ハゲ」という言葉にビクビクし、ひどく傷ついていた自分を忘れないためにも書き記しておこうと思いたった。

去年二月中旬。セミロングの髪を時折なでつけると、いつもなら二、三本の抜け毛が、数十本単位で指にからみついていた。毎晩髪を洗うたび、排水溝のあみ目が、黒いフタでもしたように、水の流れをせきとめる。中学生の娘が「お母さんの後にお風呂呂に入るのは怖い」と言いだした。風呂場

の三角ゴミ箱の中の、子供のこぶし大の髪のかたまりは、気持ちのよいものではない。捨てても捨てても毎日新しいかたまりができる。

毎日続けば、のん気な私も気になりだした下旬、ラグビーをしている高校生の息子が、練習中に眼球が突出するケガをした。大学病院の眼科・耳鼻科で検査をすることになり、待ち時間を利用して、私も皮膚科で診察を受けた。医師は多発性の円形脱毛症の治りかけであり、「あなたの場合、人より髪が多いので今ぐらいがちょうどよいでしょう」と言う。なるほど、私の髪は天然パーマで、毛質は細いが、量はたっぷりあり、ずいぶん抜けたにもかかわらず、三面鏡を毎朝みてもハゲは全くみえなかった。気になるならと一応養毛剤をもらう。

息子のほうも眼底は骨折しておらず、鼻が折れただけ（ラグビー界では一般的なケガらしい）で、二人そろってひと安心して帰ってきた。

三月。医師の言葉もあり、少しはよくなったかとあまり気にせずすす。でもでも、どうみても確実になくなっていく。プ

ラシにつく髪をみて、恐怖は現実となつて、髪をとくと床にサワサワと音をたてる。スリッパの下がザラザラする。認めたことはないが、私の抜け落ちた髪の仕事だ。

四月中旬。突然夫が入院した。胃かいようで、緊急手術かと心配したが、なんとか薬で治療することになった。会社関係の人や、地方に住む夫の母、兄がかけつけてきた。病状が安定し、皆ホツとし、見舞ってくれるが、目はどうしても私の頭部に来るような気がしてならない。夫の母と兄は、帰ってから後、夫に私の髪のことを尋ねたようだ。その話を聞き、やはり結構目立つのだと、今さらながらショックを受ける。直接聞いてくれたほうがずっといいのに。改めて治療の必要があると感じて、近くの皮膚科へ。漢方薬、養毛剤、ステロイド系の塗り薬を処方してもらう。

五月。夫が退院。私はヘアピース探しに、やっきになりだした。前髪五、六本だけになったという友は、全カツラを利用したそうだが、私はできれば残った髪を日光にさらしておきたかった。兄嫁がレディースマープ館のパンフレットを送ってくれた



が、一度植毛(?)などしたらいへんと、足が向かなかった。退院早々の夫とデパートに行き、ほぼ希望通りのヘアピースを買い求めた。それは抜け毛三分分くらいの量のものだが、うすく広げて残り少ない自分の髪にピンでとめ、ヘアバンドをし、後はシニオンにするとなんとか格好がつく。ゴムで止めた髪は、全部で小指ほどの太さもない。それでも地肌がみえなくなり、久しぶりにウキウキする。夫と入れかわりに同居の父が入院。

六月。人と接することの多い仕事であったため、人の目は気になったが、元気に通う。満員電車の中で、ついついみてしまうのは人の頭ばかり。若い女性でも、ひどく髪の少ない人がいる。何も隠さず、堂々としている人を見ると、少しでも被い隠している自分が恥ずかしい気がした。机に向かって仕事をしていると、太陽が地肌をジリジリ照りつけ、皮膚がピリピリ痛い。

七月。電車の中で偶然、例の友に会った。ちっともわからないと友は言ってくれるが、ヘアピースの件は、この友にも内緒である。見栄っばりの自分がなさけない。

彼女は、三年前のことがうそのように、フサフサのロングヘアである。時がたてば、私もこういうふうにできるのかと半信半疑ながら、勇気がでてくる。この友と話している時が、一番安らぐ。

八月下旬。大勢で泊まらねばならず、いやいや出かける。「ねえ、この人ハゲちゃったのよ」と心ない知人の言葉に血の気が失せる。人の言葉、人の目に過敏になる。私も何もないときは、この人のように、人を傷つける言葉を発していたのかも知れない。今は、みてみぬふりをしてくれる人がある。こうなってみると、人の品性がよくわかるというのは、少々オーバーか。

子供たちには、「髪がなくなっても、私の美ボウは変わらない」と、外では言えない、精一杯の強がりを書いて、あきれられる。

九月。すっかり地肌だけになっていたあちこちのハゲ島に産毛がチョコボチョコボ育ちはじめてきた。ヘアピースで押さえつけても、ピョンピョン元気に立って、昼寝から起きた赤ん坊の頭のように。二十三日、そ

の産毛にそろえて、美容院でベリーショートにしてもらった。評判は上々だし、自分の髪だけというのはやっぱり爽快だ。

十月。復活した髪のかわりではないだろうが、突然職を失った。

その後、胃にポリープもみつかった、自分の健康を過信していた私に、警告を発した年だった。時がたてば、元通りになる一過性のもので、重大深刻な病気ではないにもかかわらず、その動揺は、ひどく大きかった。

脱毛の原因は、今もってわからない。家族のケガ、入院も、症状を促進することにはなったようだが直接の原因ではない。自他ともにストレスとは無縁な生活を送っていると思っていたが、ストレスの積み重ねがあったのかもしれないし、四十歳を過ぎ、心身ともに、バランスが微妙にくずれたのかもしれない。

月日が、何よりの薬だと思い、時がたてば必ず元通りになると信じこもうとした。

現在は、以前よりよい髪質になり、一本一本がとてもしとおしい。もちろん、どんな時にも「ハゲ」をはじめ、不用意な言葉

を軽はずみに口にすることは、今後ないだろう。

「人生に無駄はない」。これもよい経験と、自分に言いまかせて、思いこませ、ひらき直ってすごした七カ月だった。

「パンツ」へのこだわり

東京都新宿区 時尾 松子

人はみな固有の名前をもっている。同じようにモノにもそれぞれ名前がつけられていて、私たちはその名前によってモノを認識することができる。ところが世の中が進み、モノが豊富に出回るにつれて、実体と呼び名の結びつきがどうも怪しくなってきたような気がする。

古い話になるが、昭和三、四十年ごろのこと、私は二人目の子供が生まれた後、バスコントロールの必要から避妊用具を買うのに、その役を夫に押しつけた。これ

は男の責任なんだから、と言われて夫はしぶしながら引き受けて、薬局へ出かけたのだがなかなか帰ってこない。当時、避妊用具は衛生サック、またはただサックと呼ばれていた。夫にとってこういう言葉を口に出して買うというのは、かなりの決心と勇気のいることだったのだ。

何回目かでやっと慣れてきたころのある日、別の店へ買いに入った夫はそこで「サック?……ああコンドームね」と言わ

れたとかで、ゆううつそうな顔をして帰ってきた。サックという呼び名はもうすたれてしまったらしい。その新しい名前もなんとか言えるようになったころのまたまたある日、今度は「はい、スキンですね」といって渡されたという。「スキン、なんて呼び方はいやだね。もう絶対に買いに行かないぞ」と夫はすっかりつむじを曲げてしまった。

うまい具合にこのころから通信販売とい

う方法がひろがりはじめ、私とそのスキンとやらを買いにゆく役はまぬがれたが、内心ではいつもながら融通のきかない夫を少々軽蔑していた。ところが……である。

またまた古い話で、しかもあまり品のよくない話題つづきで恐縮だが、昭和一けた世代の私の子供のころは、下ばきのことをズロースと呼んでいた。ドロワースの転じた言葉らしい。これが戦後になってまもなくパンツと言ひ換えられ、しばらくすると子供ものはパンツ、婦人ものはパンティになり、それがショーツと呼ばれるようになって今日に至っている。

そのパンツなる呼び名であるが、このころは別のものに使われ出した。いわゆるショートパンツに対応したロングパンツという意味で、これも曾てのズボンから、スラックスに言い換えられたものに対して使われるようになったのだ。

誰が、いつ、どこで、こうもくると呼び方を変えるのか知らないが、「パンツ」というと、私の頭の中には昔みたパンツ裸の子供の姿が浮かんできて、店先で「このパンツを下さい」とはどうしても口



ぜいたくな悩み

京都府 井川 真弓 (31歳)

に出せないでいる。モノと名前がずっと結びついてくれないのだ。以前、夫がスキンという言葉は絶対使いたくない、と強情をはっていた気持ちに今になってわかる気がしてきた。

ただ都合のいいことに、最近ではモノの名前をいちいち言わなくても、自分で勝手に選んでカウンターに持ってゆけば買えるようになった。逆にいえば、モノの名前なんか知らなくても用が足りるわけで、便利といえれば便利なことこの上なしの世の中になったが、それだけ呼び名についての人々の心遣いとか、関心は確実にうすれてゆくだろう。

街にはモノがあふれ、メーカーはひたすら売れ行きを伸ばさんがために、次から次へと奇抜なネーミングで人を釣ろうとする。その結果、いったいこれでも日本語かと首をかしげたくするような意味不明、根拠曖昧な商品名のなんと多いこと。

今更言葉の乱れを嘆いてみてもはじまらないし、いちいちこだわってはいは生きてはゆけないと知りつつも、これでいいのかしら、と思わずにはいられない心境である。

結婚九年目、子どもは六歳と三歳。平穩無事な生活の中で最近、性生活にあれこれ思案している。

夫は独身のころと同様、性に対する姿勢や欲求は変わらないようだが、私はちがう。一言で表現すると、セックスするのがめんどくさくなってきたのだ。

私の年齢、三十一歳といえは脂ものり、女さかりのはずが、夫とのセックスは半分おつとめ的情感が芽生え出している。誤解のないように付け加えるが、決して苦痛ではない。

私たち夫婦は四年の恋愛期間後、夫が二十七歳、私が二十二歳で結婚した。独身のころ月に一度、夫と肌を重ね合わせるのが待ちどおしかった。行為そのものを楽しむというより、長い間いっしょにいられるのが嬉しかったのだと思う。

結婚したら、毎日でもするのではないかと思うほど性の相性はよかった。が、結婚後は週に一回程度、月に三、四回のペースが定着して、最近まで続いていた。

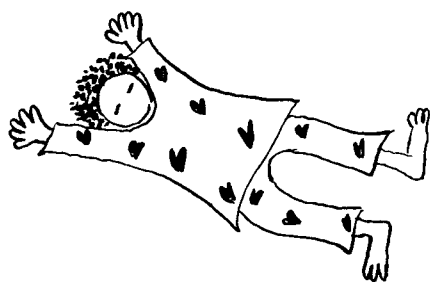
それがここ数カ月、ふとんの中で夫はよくすねたり、怒ったりしている。求めるのに私が「NO」とかたくなに拒否するからである。以前から、はっきり「NO」と言っていたが、断る回数が増えているので、夫が気分をこわすのも多くなった。「せっかく夫婦の愛を高めようと思っているのに」とか「もう俺に愛情がないのか、子どもばかりに目が向いている」などと、背を向け、恨みがましく文句を言う。

その言葉に同情して「しかたがないか」と、応じる時もある。以前なら情事が始まれば、私もいつのまにか快樂を味わっていたのだが、今は感じられない。

私はセックスが嫌いではない。どちらかといえば好きなほうだと思う。今からでも心ときめく恋がしたいと思うし、夫の体だけしか知らないの、他の男の人に対して好奇心もある。だが、気持ちはあっても、夫に申し訳ないし、隠しとおす自信がない

いので実行しないでいる。

夫には先ほど書いた、私の本音を話したことがある。返ってきた夫の答えに耳を



疑った。「真弓が他の男とやっているところを見たい。そして研究したい」。私なら夫が他の女の人なんて想像するだけで嫌なの……。

夫は性について夫婦は話し合うべきだと考えている人なので、先日、夫に打ち明けた。「以前のように燃えない、感じない。どうしてやる」と。夫は「それは真弓は、自分が一番大切やからや。俺が誘っているのに、遅くまでワープロに向かったり、本を読んで、自分の都合を優先させている」と手厳しい言葉。図星だと思いつつも反論する。「それはお互いさまとちがうの」。即、夫は「俺は真弓のことを一番考えている。その証拠に真弓が誘ってきたとき、眠くても応じている」。私はとどめのせりふを言った。「それは私の体が好きなだけやろ」。この言葉は夫が大嫌いなので強く否定する。そして夫は「もう、いっしょのふとんで寝るのをやめよう。同じふとんやから肌が触れたりすると抱きたくなるし」。でも次の日もいつものように同じふとんで寝ている。我が家の住宅事情のほうを優先させたからだ。

夫婦は体のコミュニケーションもあったほうがより充実すると考えている。では、どうすればめんどくさくならずに楽しむことができるのだろうか、悩みの一つに

なっている。

これを読んだ人は、なんてせいたくなく悩みだ、とか、結局はのろけたいの、と言いたくなるかも知れない。でも、恥ずかしい言葉を使い、正直に書いたのは口に出して言えないことを聞いてもらいたかったからだ。できたらご意見などを聞けたら、なお嬉しいのだが……。

保険

奈良眞生駒郡 高松 恭子

ふつうの保険か、救助保険か

大震災以来、地震保険に入ろうかどうかどうしようかと迷っている人が増えているらしい。

現在、たいいていの家庭では生命保険や火災保険をはじめとする保険に一つや二つは入っているだろう。しかし家が火災になっ

て全焼することや事故死することは稀で、多額の掛け金はたいがい掛け捨てられ、保険会社を太らせる。

それがわかっていても、焼け太りを期待するわけでも死後の一獲千金を夢見るわけでもないが、私たちは保険に入ってしまった。つまり安心をお金で買わずにいられないのだ。

私は病氣持ちなのでたいいの生命保険には入れないのだが、生協の助け合い共済や夫が職場で加入している団体共済には最低額で入っている。

もっぱらよく加入するのは旅行保険である。海外に出かけるときは必ず入るが、今まで旅先で病気をしたこともなく、大きな盗難に遭ったこともないのでこの保険の世話になったことは一度もなかった。無事帰国して、証書はそのままゴミ箱へ………というのがいつものパターンだった。

ところでこの旅行保険というのはセットになったものは意外と値段が高いが、バラ掛けにすると安くて済む。つまり私の場合、子供もいないので死亡保険はたくさん掛ける必要はない。そのかわり後遺症の残

る怪我などの保険は多めに掛けておく。掛け捨てなら捨てる額は少ないに越したことはない。

これを初めて実行したのは二年五カ月前、夫とネパールへ行ったときである。期間は三週間だったがケチって一人七千円余りしか払わなかった。ただ気にかかったのは、私たちの目的が観光でなく冬山トレッキングだったことである。ふつうの旅行保険では、登山、スカイダイビングのような危険を伴うスポーツの事故まで保証してはくれない。そのためには遭難救助保険をかけておかねばならないのだ。ただし、これは非常に掛け金が高い。

心配なのは高山病だった。厄介なことにこの病気は、体力、経験、技術に関係なく、その時の体調によって起こるのである。私たちはトレッキング（山裾歩き）とはいえ、高度四千二百メートルまで登る予定をしていた。高山病にかかった場合、交通手段のないヒマラヤでは、ヘリコプターでの救助に頼るしかなく、この費用は救助保険でしか出ない。

さんさん迷ったが、ベテランのシェルパ

がいたし、具合が悪くなったら早めに下山することに決め、結局ふつうの保険だけで出発した。そしてよりにもよってこんなときに事故が起こったのである。

遭難救助保険に入っていれば……

トレッキングを始めて十日目に目的地に到達し下山を始めた翌日、危険箇所をほぼクリアした安心感から軽快に歩いていたら、前夜の雨で濡れた石に足をすべらせあつという間に二メートルほど下の岩場に転落し、尖った石に肩をぶつけた。起き上がると左腕が支えられない。恐る恐る肩を触ると皮膚の下で鎖骨がにゅつと飛び出していた。スリットと血の気が引いた。

ちょうどそのときまたま通りかかったイラン人のパーティが、日本人の医学生がこの地域にいると教えてくれた。

その医学生を捜し出して診てもらった、骨折しているかもしれないからヘリコプターをチャーターしてカトマンズの病院へ行くようアドバイスされた。

遭難救助保険に入っておくべきだった！と悔やんだのはいうまでもない。ネパール

軍のヘリコプターでカトマンズへ運んでもらったのだが、航空運賃は一時八百五十ドル(当時のレートで十萬二千円)だった。

ヘリコプターは途中で着陸して給油したのだが、私は支払いが気になって思わず電卓を出して計算した。一分間千七百円だ。給油しているおじさんとのむだ話はやめて一刻も早く離陸してほしかった。パイロットの一人がガムを食べ出したときにはたまりかねて「急いでください」と、丁寧に頼んだ。

保険にさえ入っておけば、こんな思いはせずに済んだのに……。結局ネパール軍から届いた請求書には、出国までに二千四百十二ドル払うよう書かれていた。日本円で約二十九万円、なぜこんなに高いかというと、往復と給油で二時間四十分の割合で請求されたうえ、百ドル以上の手数料を取られたからだ。

そんな大金は持ち合わせていないので、カードで引き出して払った。そしてカトマンズの大病院で手術するかどうか迷ったが、応急処置だけしてもらって手術は日本で受けることにした。

ヘリコプター代を取り戻す

帰りの飛行機で私は保険の約款を徹底的に読んだ。何度も保険に入っているがこれを読んだのは初めてだ。それによると、ふつうの保険で事故に遭った場合、救出に必要な交通費は出るようになっていた。あの場合、ヘリコプターしか手段はなかった。だから出るはずだ。問題は日本の保険会社が、トレッキングをどう扱うかということだ。八千メートル級の山が珍しくないヒマラヤでは四千メートルはトレッキングだが、私たちの感覚ではどう考えても登山だ。

しかし幸いだったのは私の怪我した場所が高度千五百メートルくらいの所だったことだ。これはトレッキングで押し通せるぎりぎりの高度だろう。

よし！ いける。私は合法的に絶対このヘリコプター代を取り戻そうと決心した。手術に要した費用は、二十万円余りだ。これは確実に旅行保険から出る。しかも約款によると、事故のために要したホテル代も出るらしい。怪我をしてもしなくてもホ

テルには泊まらねばならなかったのだが、それもくれると言うならもらおう。

退院してすぐ申請書類を出した。申請には支払い領収書や診断書、そして第三者の現場に居合わせたという証明が必要だった。

私にとって幸運だったのは、たまたま怪我をしたときに日本人に出会い、それが医学生だったことであつた。この人は大阪市大の医学部の五回生で、事故のとき居合わせたわけではないがその場にいたことにしてくれた。

念には念をと、ヘリコプターをチャーターしたのはこの人の医学的判断に従ったものであるというただし書きまで添えて提出した。一応万全の状態だったが、担当者によるとやはりヘリコプター代を出すかどうかで非常にもめたらしい。

トレッキングが登山か。しかし最終的にはザイルを使用していないということでトレッキングとみなされ、医療費、ヘリコプター代、ホテル代の五十三万円がもどってきた。

確かにいくつもの幸運が重なった。たま

たま通りがかったイラン人が日本人の存在を教えてくれたこと、恩人の医学生であるが、彼は帰国直後に交通事故に遭い生死の境をさまよったそうだ。

「ご無事でよかったですねえ（彼にとって私にとってでも!）」

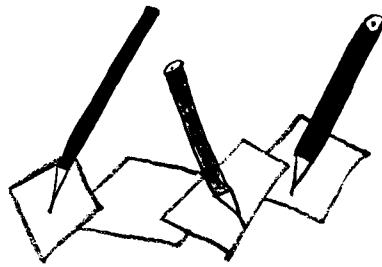
私はしみじみと言った。彼の電話番号を聞いていなければヘリコプター代はもらい損ねただろう。

やはり保険はありがたい。でも……

それにしても私は保険に関して、入っていないが知らないことが多すぎた。あの細かい字の約款を読んだのも初めてだった。持病の悪化では保険金が出ないことも初めて知った。

先日夫が職場で入っている団体共済の更新した証書を見て、入院特約で一日千円もらえるのを発見した。

あのとき二カ月以上も入院したのに!と思って時効を見ると二年とある。怪我したのは一年十一カ月前だった。さっそく手続きをしたらずい六万七千円が振り込まれた。



知らないで損をする人も多いに違いない。また逆に知っていてずる賢く計算する人もいる。たとえば入院保険だ。たいていは何日目からしか保険金は出ない。だからそれを満たすため不要な入院を求める人が結構多いのだ。これは保険会社自身も考え直す必要があるのではないだろうか。

もしあのとき、高い遭難救助保険に入っ

ていたら、私は初めて乗ったヘリコプターでヒマラヤ上空からの眺めを楽しめただろうし、入院中ももっと安心して寝ていられただろうにと思う。

無知だったにもかかわらず、最低の掛け金で私は運よく保険金を手に入れた。やはり保険はありがたい。もし運悪くヘリコプター代が戻ってこなくても、

「ああ、高い授業料だった。やはり保険は万全に入っていないければ……」と思ひ、次からは救助保険にも迷わず入るだろう。

無事帰ってきたら、「無駄になっちゃった、無事だったんだもの」と、自分に言い聞かせる。

どんな状況でも、私たちは先のことがわからないという弱みがある以上、保険の誘惑から逃れられず、保険会社はますます太っていくのだ。

でも私は地震保険に入るのはやめた。半世紀に一度というような大震災に備えて保険金を支払うには余りにも高すぎるからだ。

運悪く遭遇したならば、そのときは運命だと潔く諦めよう。

母の特別養護老人ホーム入所（続）

奈良県奈良市 田中慶子

床ずれができた母のお尻

十月九日の日曜日、夫の運転で五日に特養ホームに入所した母を迎えに行った。ホームに着き、

昼間だというのにパジャマのまま寝かされている母を見て、五日の入所日に感じた不安が当たっているのではないかと気持ちが悪くなった。母が入所していたA老健施設ではパジャマは夜眠る時だけで、昼間は普通の服だった。ここでは寮母さんの姿もなかなか見掛けられなかった。

兄の家がこのホームから車で二十分のところにあるので、夫は母を兄宅にいる父に会わせに連れて行くと言う。兄宅までの道を知っている夫が運転している今日、この機会にと言うのだ。予告

なしの訪問の、兄たちの迷惑を考えて気の進まない私に、

「（父母たちが）いつまで会えるかわかれへんのに。機会がある時には会わせてあげないと」と夫は言う。

いきなり兄の家へ行ったので上へ上がるのは遠慮し、夫と私は門のところで、立てない母は車の中から父と兄夫婦に会った。母は父を見ると懐かしさのためか、それとも脳梗塞の後遺症のためか、泣きそうな歪んだ顔になった。父に会うのはお正月以来お盆と今日とで二回目である。

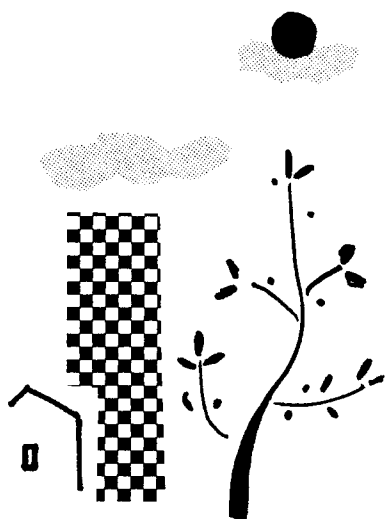
母を我が家で三泊させホームへ送った後、次の日曜日にまた迎えに行った。帰宅して母のおむつ交換すると母の下は真っ赤にかぶれ、毛が便で固まっていた。タオルをお湯で絞って拭くと茶色に

なった。母を横向きに
させてお尻を拭こうと
すると、尾底骨のあた
りに直径五ミリほどの
床ずれが、皮がめくれ
て赤くなっていた。十
月五日に入所してわず
か十一日、しかもその
間三泊四日は我が家で
過ごしているのに、床
ずれができたことに私
は愕然となった。

すっかり慌ててしまった私は翌朝すぐにキリス
ト教系のC特養ホームのCさんに電話で訴えた。
母の様子を言い、できることなら退所させたいが
そうすると二度と特養ホームへは入所させてもら
えないのだろうか、仮に入れてもらえるにしても
新規申し込みということになり、入所の順番は一
番最後になるのだろうか、ということなども言っ
た。彼女は午後二時に我が家を訪問すると言っ
て電話は終わった。

次にB診療所に往診をお願いし、午後床ずれ
の治療に来てもらうことになった。

午後二時、Cさんは看護婦さんを伴って訪れ



た。彼女がこちらへ来
る前に市役所に寄り私
の話を担当者にしたと
ころ、母と同じホーム
へ入所した家族から
も、私と同じ声が寄せ
られているということ
である。今私が母を退
所させても、最初の入
所申し込みと同じ扱い
で入所の順番を回すと
いう担当者の答えだっ
たらしいが、私は本当にそうしてもらえないかどう
か半信半疑だった。担当者が変わってもだいじょ
うぶなのかどうか。今すぐに入所させてもらえな
くてもいいが、一度入所してこちらの都合で退所
すると、もう特養入所の権利はなくなるのではな
いかという不安があった。

ホーム内に寮母さんの姿があまり見えないとい
う私の不安に対しては、開園して間がないからか
もしれないとCさんは言った。ただ寝かせつきり
ではないかという私の不安については、そのの
ホームはずっとそのやり方かもしれないと言っ
た。寝かせつきりにしない方針なら最初が肝心で最初

からすぐ車椅子に移すはずだと言っ

C特養ホームでは寝たきりの人は車椅子へ、車椅子の人は立てるようにという方針で、寝たきりの人が入所して来たらその日のうちに車椅子に移すというのである。母のホームでは車椅子に座っていられる人も、すぐ寝たきりになるかもしれない。うなだれる私にCさんは言った。

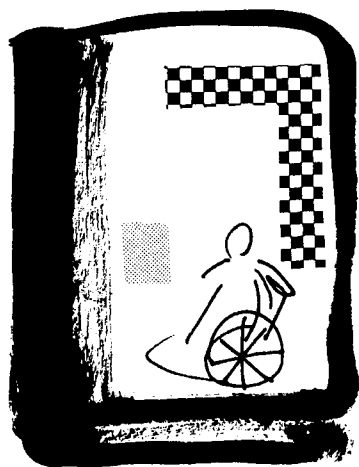
「入所者の家族とホームの職員とでホームをよくしていくのだから意見、希望は率直に言うべきです」

退所させるべきかどうか考えたが、その後往診に来てくれた医者は二、三カ月様子を見れば、と言

希望を言えば「文句」と取られる

二十日、母をホームに送って行った時担当者に、床ずれができていてショックを受けたことを言った。この後私が母の部屋（四人部屋）で衣類を引き出しに入れていると、先程の担当者が来たので私の希望をさらにお願した。

一、今まで四カ所の特別養護老人ホーム（二カ所は数年前取材で行った。後二カ所は母が世話になった所）を見たが、どこでも入所者をで



きるだけベッドから離そうとしていた。ここでもそのようにしてほしい。

一、昼間母をできるだけ車椅子に座らせてほしい。

一、現在残っている機能をできるだけ維持してほしい。

一、ベッドに寝かせきりなら母の退所を考えないといけないと思ってる。

一、寮母さんの数が少ないのではないかと。

一、ホームをよくしていくために意見、希望は率直に言うべきだと看護婦さんに言われたし、私もそう思うので率直に言わせていただく。その後彼が私に、今まで床ずれはできたことは

ないのか、と無然としてきくので、脑梗塞で入院直後の安静時にはできたが、ベッドに座れるようになってからは全くできていない、と答えた。言うつもりのないことまで口をついて出て来たのには我ながら驚いた。

その後も母は大体週の半分は我が家で過ごしたが入所して一カ月ほど経ったころ、いつものように母を送って行くと、施設長とおぼしき人に、「増田末子さんの家族の方ですね。ちょっとお話があります」

と呼び止められた。私がこの前担当者に言ったことについてだろうと心を構えた。

「回り回って耳に入ってきて来ると、あなたが文句を言っていると聞こえて来ますね」

と言う。回り回って、という彼のことがばが理解できなかった。私は担当者に言っただけで、担当者は直接彼に言ったと思うからである。この前担当者に言ったのと同じことを彼にも言った。

「つまりところ人手の問題ですね。足りないのですね」

と私が言うのと、

「基準の人数はいます。人手が足りるか足りないかは人所者によります。手のかかる人が多ければ人手が足りなくなりますし」

と彼は言ったがつまりは足りないのだ。

「基準の人数が少ないのですね。基準が低くて。これは福祉政策の問題ですね」

と言ってからここまで言うことはないと思った。B老健施設もC特養ホームもボランティアの人が多いと聞いている。

「ここはボランティアの人はいないのですか」

と、私は言うと同時に自分の言葉を不愉快に思った。福祉の仕事にボランティアを当てにして組み込んでしまうのはおかしいと思っている私が、ボランティアを当然のように当てにした言い方をしたからである。ボランティアの人は、いつも決まって当てにできないので仕事がいやにくく、来てもらっていないということだった。

私はしゃべりながら先程の彼の言った「文句」ということばにひっかかっていた。そして、「文句ではなく、希望と受け取っていただきたい」と思います」

と訂正をお願いした。私はとにかく床ずれをつくらないために、夜寝る時以外は母を車椅子に座らせてほしいと希望した。我が家ではずっとこれで床ずれはできなかったのだから。

「これはできます。おばあさんによつては横になりたい人もいます。増田さんは何も言わないか

ら」

と彼がはっきり言ってくれたので嬉しかったが本当に実行してもらえるか一抹の不安があった。意見、希望は率直に言うべきだというCさんのことばを言っと、

「希望はどんどん言って下さい。床ずれを作るのはうちの恥です。(親を)預けっ放しで知らん顔の人もありますがそんな人より、そう言ってくれる人のほうがいいのです。午後職員会議がありますので増田末子さんは車椅子に座らせるように言います」



と言ってくれて、話のわかってもらえる人であると思い、ひとまず安心した。嫌われてもいいから母を車椅子に座らせてほしかった。

老人は「国の発展」の足かせ？

しかし床ずれはなかなかすっきりとはおさまらなかった。診療所でもらった床ずれの薬を私はいつも母のお尻に貼った。ホームでの精神的なケアは期待しないにしても、せめて肉体的苦痛は取り除いてほしかった。母を退所させることを考えたが、訪問看護のB診療所の在宅介護支援センターの婦長さんは、私に母を最後までみる自信がなかったら退所させるべきではない、入れてもっているだけでもありがたいと考えるべきだと言った。

少し前に私は、ホームに母の床ずれのことでお願いをした、と友人に言ったことがあった。その時彼女は私に、

「心臓やわ。自分は(親を)みないで、人にみさせて、ようそんなこと言っわ。それに自分の親にだけよくしてもらおうなんて。寮母さんがどれだけ大変か知ってる？」

と言って呆れられたことがあった。その時は私は

非常に反発を覚えた。私が母を在宅でみることに、寮母さんが仕事としてみるのでは条件がまるで違う。在宅介護は一日二十四時間の仕事の数カ月、数年、毎日毎日続くのである。彼女はおむつかぶれができて、床ずれができてもしかたがないと言った。それなら、と私は言った。

「仮にホーム側と預けるほうはそれで双方納得しても、当の入所者の人権はどうなる？」

彼女は自分が入所者ならそれでもかまわない、と言い切った。寮母さんの仕事の大変さは人手を確保することでもかなり解決するはずだ。結局予算の問題なのだ。これについても彼女は、こんなことにお金を使つては国の発展がないと言った。

老人ホーム入所者の、人手があれば解決できる精神的肉体的苦痛を取り除くことと、国の発展とはどちらが切実で急ぐ問題か。それに福祉と国の発展は二者択一のものではないだろう。現在の日本は必要な予算を福祉に回せるほどには十分発展しているはずである。彼女の意見は納得できなかったが、このような意見は案外一般的なのだらうとは思つた。

友人のことには反発を覚えた私も、人権意識もあり、諸々の事情を承知しているこの婦長さんの、入れてもらっているだけでありがたいと考え

るべきだということばは素直に聞けた。入所者が権利意識を持てるほど、老人ホームの水準は高くないのだ。これが今の日本の老人福祉の実態なのだと思つた。

また彼女は、この前、C特養ホームのCさんが市の福祉課に尋ねてくれた時の、今母を退所させても入所申し込み時期を、最初に申し込みをした一年前として順番を回すという市の答は信じられないという意見だった。入所希望者のリストから一旦消えた名前が復活することなど考えられないというのだ。

誰が「扶養者」になるかの問題

母をホームから退所させて在宅介護に戻ることについて兄がどう言うだろうという懸念もあった。両親の年金その他のお金は兄嫁が管理し、母を在宅介護していた私は彼女から毎月五万円を受け取っていた。私はそれを母のショートステイ、紙おむつ、訪問看護代に当てていた。使用明細は領収証を付けて彼女に渡していた。それ以外の、食費生活費はこちらで負担した。

特別養護老人ホーム入所後の月々の費用は本人と扶養者の収入で決まる。普通なら扶養者は兄に

なる。これは兄が男だからではなく、兄には収入があり私にはないからである。収入のない者は扶養者にはなれないのだ。

ところが福祉課の説明では、ホーム入所に際し



ての扶養者は本人と同居の妻子ということで私になった。一昨年母の入院中、兄嫁の、退院後の母の世話はできないと言うのを私も納得し、私が母をみることにした。母の住民票を移すことについて抵抗のあった兄と夫を説得して、市のサービス

を受けるために母の住民票を私達の住所に移したのである。自営の夫の仕事を手伝っているとは言え、私は無収入なので母の入所費用は母の年金だけですんだのである。

母が特別養護老人ホームに入所した場合、母の年金以外、扶養者である兄の出費がどれほどになるか、兄は非常に気にしていたので、兄の負担がゼロになり私も気が楽になった。

ただ一般的に考えて、この点は現実には即していないのではないかと思う。例えば、離婚して子供を抱えて働いている女性の親がホームに入所し、彼女が扶養者であれば、生活が苦しくても彼女が月々の費用を少額といえども負担しなければならぬ。

母がホームにこのまま入所していれば母の年金だけですむが、以前の我が家での在宅介護に戻れば、母の年金以外に出費が増える。それを兄たちに私が言うのは気が重かった。

いろいろ考えると母を退所させる決心はつかなかった。婦長さんの「お母さんを最後までみる自信がないのなら退所させるべきではない」ということがずっと頭にあった。

私は母がキリスト教系のC特養ホームのようなところに入れたらどんなにいいだろうと思ってい

たが、それは不可能なことだった。母は既に他の特養ホームに入所しているのでCホームへの入所資格はないし、第一、特養ホーム入所は市が窓口であって、個人的に頼めることではないと頭から思っていた。

ところが私の悩みを聞いたクリスチャンの友人が、C特養ホームへ母の入所を頼んでくれた。その話を受けたC特養ホームの事務長さんが、母を入所させるについて市の福祉課にたずねたところ、福祉課の人は私のことを「文句が多い」と言ったという。さらに「増田末子さんのことは他の人からも聞いているのですが」という福祉課の人のことばを事務長さんは、私が母の入所を他の人にも頼んでいるものと受け取り、不愉快に思っただけ。勿論私は他の人に頼んだことはない。頼めることだとは思っていなかったのだから。

ただ思い当たることはあった。母に床ずれができた時、C特養ホームのCさんにすぐ電話し、母の状態を訴えた。彼女は自分の判断で市の福祉課へ行き私の母のことを報告し、その足で話をききに來てくれた。

もう一人、母のことをたずねてくれた人がいて、私はやはり、入所してすぐ床ずれができてショックであることを言った。後日彼女から「市

の福祉課に頼んでおきました。福祉課の人が、他の人からも聞いているのですが、とおっしゃっていました」と言われ、愚痴はこぼしても福祉課に何も頼む必要を感じていなかった私は、何を頼んでくれたのだらうと不思議だった。また母の入所しているホームから市の福祉課へ、私が母の床ずれができたときにホームに言ったことについて、何らかの報告が行っていたかもしれない。ホームの人が「回り回って耳に入ると」と、私が理解できないことを言っていたことも思い出された。

福祉課の人が二人以上の人から私のことを聞けば、私に対して「文句が多い」という印象を持つのもわからないではない。組織の実体は人間だし、人情としてはそうなることもうなずける。また母の入所直後にホームに、

「寝かせきりなら退所させたい」

などと、よくもまああんなにストレートに言ったものだといながら身の縮む思いである。

人々の好意、善意が結果として裏目に出ることはよくあることである。入所が駄目になったのは気持ちに余裕がなくすぐ思い詰め動揺し、ばか正直で単純直情な私の責任だが、その結果が私にはなく、母に返って来たことが私としては辛かった。

父の最期

C特養ホーム入所のことであるいろいろあった同じころ、父のほうでも大変なことがあった。

十一月六日の日曜日の朝、兄から電話があった。兄嫁は留守だそうである。母の特養ホーム入所当日もその後もずっとご無沙汰だったので、母の様子をきいてくれた電話が嬉しかった。

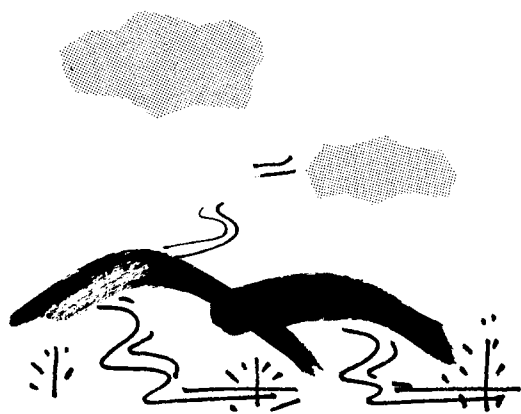
夫の運転で母と私の三人で、ホームのパンフレットを兄宅へ持って行くことになった。

父が弱り、散歩もあまりできなくなると兄から聞いていたが、家の中では以前と大きく変わったところはなく元気そうだった。父が、今朝から書き始めた自伝を読み上げるから聞いてくれと言う。夫と私を前に声を出して自伝を読み上げ、父は嬉しそうだった。NHK大河ドラマ「花の乱」の批評もひとくさり言ってまだまだ意気盛んに見えた。

十二日は父の九十二歳のお誕生日なのでお祝いに何がほしいかときくと、お菓子と痔の薬がほしいと言う。元気な父を見たのはこれが最後だった。この日母も連れて行ったのでよかったと今つくづく思う。何カ月も会わなかったのに十月に続

いて十一月もまた父に会いに行ったのは虫の知らせと言ふべきか。

十五日に、父が入院したと兄嫁から電話があった。翌日私は父の好物の格子せんべいとお寿司を持ってお見舞いに行った。痔の薬を送っていいものかどうか迷って、私はお誕生日祝いのお菓子をまだ送っていなかったのである。



大食漢の父は横になったまま、ポリポリと格子せんべいを食べるように食べた。父の脚はパンパンに腫れて痛々しかったが死ぬとは夢にも思わなかった。

「わし、大丈夫かな」

と言う父に、

「当たり前や。治るわ」

と私は屈託なく言った。

二十日もお見舞いに行くつもりをしているところへ病院から父危篤の電話が入った。我が家には母も一緒に病院の父に会いに行った。意識がなく酸素吸入を受けている父を見て、痴呆の母も泣いていた。数時間後に父は死んだ。死因は貧血が原因の、血小板がどんどん減っていくDICという病気だそうである。

六日には森本哲郎の「生き方の研究」を読んでいた父なのに、二週間後に死んだ。古代ローマの思索家セネカの、

「人びとはまるで永久に生きられるかのように生きていく」

ということはこのころに、父は傍線を引いてからすぐに死んでしまった。

毎年、父のお誕生日には図書券をプレゼントしていたのに今年に限って痔のお薬を送ることを躊躇

躇している間に父は死んでしまった。「会える時に会わせてあげないと」と言う夫のことばに、十月会いに行った時には、

「今度の正月は慶子とこやな」

と私の家に来たそうだったのに。入院中も兄に、

「慶子とこへ行きたい」

としきりに言っていたというのに。

二十二日のお葬式には兄が反対して怒るのを押し切って、私の娘たちが痴呆の母を参列させた。娘たちがホームへ母を迎えに行き、そこで母に喪服を着せ、黒い帽子をかぶせ、顔におしろいをはたいた。そして兄宅近くの葬儀場へ着いた母は貴婦人のように凛として見えた。

お骨上げの帰り、車の中から見た山々は夕陽を浴びて輝いていた。悠久の自然に比べ、私達は束の間この世に在ることをひしひしと感じた。風雅を愛した父だったが、もうこのすばらしい夕映えを見ることはできない。死ぬということはそういうことなのだ。死ぬということは、笑い、落胆し、騒ぎ、感動していた魂と肉体が大自然に吸収され、存在しなくなることなのだ。親に死なれて初めて、人が死ぬとはそういうことだとほんとうにわかったような気がした。父の死後、人の死に対する感慨が大きく変わった。



時事放談

社会党—この奇妙な政党

出席者 有澤妙子
梶本玲子
編集部 和田好子
司会 田中喜美子

司会 今回のテーマについて前号にお知らせ

を出したところ、非常に反応が悪かったんですよ。皆さん、もう社会党に愛想も何もつきはてて無関心になってしまったんじゃないか、それほど社会党は沈没しているんじゃないかと思って、私はガッカリしているわけです。

全体としての政治、その一環としての社会党に興味を持ってくださることを期待していたんですが、ともかく反応が全然な

かった。

私は社会党支持者ではないけれども、日本に社会党があったことはよかったと思っているし、一定の役割を果たしたことは認めざるを得ない。

その党が、どうしてこんなことになってしまったのか。それについて真面目に考えることは、今後われわれが政党に対して無用の期待、怒りを感じないために必要じゃないかと思います。

「非武装中立」

では最初に、皆さんが社会党に対してどんなイメージを持っていたらいたか。まず、そこから話していただきたいと思います。

梶本 私は社会党支持者ではなかったけれども、小さいころに村山富市さんが若き代議士として、大分で選挙カーに乗っているのを見て、好感を持ったことは事実です。



有澤妙子さん

われわれ地元民としては、彼が党首になり、まさか総理大臣までいくとは思っていませんでした。ただ、労働組合や地域の人たちの気持ちを反映して、真摯に戦っているという意味では大変好感を持っていた。私にとって身近ではあったけれども、実際の政治の上では社会党にあまり好意は示

してなかったと思います。

有澤 私は社会党に関してはまったく無知なんです、やたら暗いイメージがあります。

私みたいに政治的に下地のない人間からすれば、戦後発展してきたのはとりあえずは自民党のおかげだと。社会党はそれにずっと反対し続けてきた。ただ文句はおっしゃる。反対はなさっているんだけど、あんまり伝わってこない。

司会 「何でも反対、社会党」……。

有澤 そう。そのイメージが非常に強い。

それと私、一年間だけです、郷里の鹿児島で教員の経験があるんですよ。日教組に入らないと村八分じゃないけど仲間外れの雰囲気があった。

司会 それ、何年ごろですか？

有澤 昭和四十七、八年です。その時に教頭が間に立ってかばってくれたんですね。

日教組が午前中とか一時間目の授業をボイコットしているときに、私は手持ちぶさたで、教頭とお茶を飲んでいたので覚えていません。

梶本 私も子供のときに、日ごろ授業を受

けている先生が、思いがけなく教育長の家のまんな前で座り込みをしているのを見て、何なんだろうと思いました。

司会 子供としては嫌だった？

梶本 驚きでした。その後に、時代の大きな移り変わりがあって、イデオロギーの対立もありましたので、子供心に社会党に對してちょっと嫌悪感を感じたかも知れません。

有澤 ただ、長崎出身の石橋元委員長が「非武装中立、非武装中立」とおっしゃってたのは、非常に印象に残っていますね。

私は親戚が沖縄にあるんですけど、「国旗」っていうとイトコが過激にワァァ言うので、なんでこんなにこだわるのかと不思議な気がしてました。

アメリカの占領時代に私は何度か沖縄へ渡っているんですが、まあ、知らないということはこれほど平和というかノンキというか、高校時代でしたのでね、楽しんでパスポートをつくった記憶があります。

司会 これ、時代の差を知りたいので、恐縮ですけど、皆さん、年代を。

有澤 四十代後半、もう五十に近いです。

梶本 四十代前半です。

和田 われわれより二十年くらい違っている。

運動が定着しにくい日本

梶本 この五年くらい、フランスの女性運動や女性団体、研究者を調べることがありまして、六八年とか七〇年代のすごかった学生運動、女性運動のその後を調べてみると、フランスの場合は運動が実際の政治や研究に結びついて、発展的に展開しているような気がするんですよ。

今度、大統領選があつて保革が入れ替わるんですけど、政治というのは保守政権と左翼政権の両方必要なわけで、両方がバランスを取りながら全体をつくっていつていく。

ところが日本の場合は、例えば七〇年代の学生運動は何だったんだろうか、あの女性運動は何だったんだろうか、と。運動が実際の政治や行政の中にどのように定着していったのか、見えにくい。

さっき私は社会党を支持してこなかった

と言いましたけど、逆にこういう勉強をしてくると、社会党にもっと頑張つてほしい、党を再生してほしいという気持ちがある私の中にはあります。やっぱり社会党の重要性を感じる。なくなつては困る。

和田 ああ、ちょっと伺いますけど、一九三〇年代に人民戦線というのがフランスにあったんですって。ご存じですか。

梶本 私は専門に調べたのが戦後および七〇年以降なので、よくわかりません。

和田 その人民戦線の時代に、いろんな権利をめちゃくちや取っちゃったらしいんですよ。バカンスだとか、普通の働く人がほしいものを。

私、面白いと思つたんだけど、日本人はヘンな心配をするのよ。社会党や共産党が政権を取つたら悪くなるんじゃないかと思ふわけ。ところが向こうの人は、それ、わりと平気だね、保守政権が悪ければ革新に政権を渡すということを恐れない。

で、革新政党は、自分の時代に権利を何でも取っちゃう。そうすると経済的に破綻してきますから、また保守党が出てくる。保守党は既に取られた権利を全面否定でき

るかつていたら、やっぱりできない。既得権の半分ぐらいは残るわけですよ。それで一般の人たちの生活がだんだんよくなつていったんだと思います。

日本にはそれが無い。自民党に政権を取らせておかなきゃ何か悪いことが起こるんじゃないかと、ヘンな心配ばかりしてるから、結局過労死しなきゃなんなくなってくるんじゃないかと思ひますね——。

梶本 やはり下からの声が少ないんじゃないでしょうか。

和田 もちろんです。

梶本 それが問題なのと、最終的には常に上からある程度満足できるような行政とか、いろんなものが与えられてきたような気がしますね。

和田 ええ。基本的に日本人の生活は戦後ずっと上がつてきて、ガタツと下がっていないですから、それで自民党が支持されているわけでしょう。

一種のカルト集団

司会 私は司会者だから、あまり喋っちゃ

いけないんだけれども、この間「ファム・ポリティック」で社会党のことを調べて、一応自分としては納得がいったんですね。和田さんの意見と違う部分もあるので言わせていただくと、まずフランスのバカンスの話ね、三〇年代に一挙に獲得したんじゃないの。ジワジワ拡大していったの。たぶん三〇年代に基礎の部分はできていたんだらうけれども。

もう一つ、皆に、社会党にやらせたらマズイんじゃないかという恐怖心があるのは、私はある点では肯定するわけ。冷戦の時代に共産党が政権を取ってプロレタリア独裁を目指すとしたら恐ろしいことになる、とおぞけをふるっていたのはある程度わかる。

ただ私の論は、もう日本は終戦直後に社会主義になっちゃったんだと。まず農地解放をした。税制も累進課税にした。私、相続税でひどい目にあつたからわかるんだけど、今でも日本は三代たつたら全部取られちゃうほど社会主義的なわけです。建前だけにしても男女平等、財閥解体……、法的にもあらゆる権利をわれわれ日本人はもらった。

他の国が内発的に下からの盛り上がりでジワジワと獲得した権利を、戦争に負けたことで、革命と同じくらいすごいことをアメリカから輸入した。保守反動の人たちがいくら食い止めようとしても駄目で、われわれとしてはいいものを全部もらったわけです。

そうするとね、戦後の日本の動きは、保守側が占領軍にもらった体制を元に戻そうとして少しずつ掘り崩してきた、その図式だったという感じがする。

昭和二十五年の朝鮮戦争のときに、岸首相は再軍備をしたかった。はっきりと。改憲して軍隊を持ちたかった。ところが駄目だった。それは労働組合の力だったのよ。三十万人が国会周辺を取り囲んだ恐ろしさっていったらなかったって。

あれは、和田さんは動員だと言うけど、私はどうも労働組合ばかりじゃないという気がするのよ。あなたみたいに組合に入っていない人でも行ったわけでしょ。

和田 われわれは動員じゃないけど、彼らは動員で来てたわけよ。そんなに革新インテリはいないよ。やっぱり全体としては動

員だった。

私、今の話を聞いてね、その通りと思うところもあるけれど、一つの問題は、日本人に民主主義ってものが全然身につかなかったことです。社会主義的な政策は輸入したけれど。

要するに、下から盛り上がってきたもの



和田副議長



堀本玲子さん

を取り入れるという考えが、上のほうに全然ない。いくら運動しても駄目。社会党もそうだけど、運動した側も民主主義とはいえないヘンな組織になっちゃう。日教組じゃないけど、それぞれの集団が昔の村社会的になっちゃう。

日本の組織は会社も含めて、一種のカル

ト集団だと「週聞朝日」に書いていた人がいた。まったくその通りだと思う。仲間内だけのものになってしまっただけ、外に通用しなくなる。どうも日本人は、運動をするときに純粋性がかりを指して、運動を広げるという考えがない。

学生運動にしても、そうだと思う。私、七〇年安保のときに出された文章を見てビックリしたんだけど、何を言っているのか全然わからない。不思議だった。

司会 だって、オウム真理教にだって入るんだからサ。

和田 だから、入る人のほうに限界があるわけよ。

司会 そうね。だけど、ちょっと言わせて。あの三十万人出てきた背景には、戦後社会党の票がかなり伸びた時期があって、民衆の心に訴える部分があった。

冷戦構造の中で戦争に巻き込まれたくない、二度と戦争は起こしちゃいけない、戦争は悪いものだ。私たちの望みと同じことを社会党は言っていた。日本人の心に訴える部分で勝負していた。

ところが岸さんなんかは善し悪しより、

戦争に負けたのがくやしい。アメリカの言いなりになってるのがくやしいって感じなの。そういう連中はいっぱいいる。

和田 いる、いる。戦争に行かないで、生き残った人達が言うのね。

パリテポリティック

和田 この間、自衛隊がカンボジアへ行くという騒ぎがあったでしょう。NHKがインタビューで隊長に「もしゲリラが襲ってきたらどうしますか？」って聞いたのよ。

隊長は本当に真面目な顔をして「作業止め！ 退避！ と言います」って。私、本当に戦後の反戦運動が効いたなと思った。昔だったらこんな弱い軍隊なんかあるもんじゃない、昔の軍人が聞いたら泣いちゃうよ……。(笑)

司会 つまり逃げろってことね。

和田 そういうことを堂々と言えるような雰囲気や反戦運動がつくってきたということとは痛感した。その面では、社会党は大いに貢献した。

司会 社会党の正体を知ると、どう見ても

市民の声を反映するのがうまくいかない構造的必然があるのがよくわかって、望みを託すのは止したんだけど、私は終戦の時にアプレゲールといわれて青春時代を生きた人間だから、体制側の人間をいっさい信用しないわけ。だから自民党と社会党とを比べたら、いつも社会党に票を投じていた。

ところがよく勉強してみると、社会党はこれだけわれわれの支持があったにもかかわらず、どうしてこんなに私たちの思っていることをやってくれないのか、という理由が見えてきた。でも私のような人間がゴマンといいたからこそ、社会党の票は伸びたんだよね。

和田 そうだと思う。反戦で伸びた部分もあるし、労働組合の動員で伸びた部分もある。つまり組合員は家族まで票を投じるから。

梶本 三月にバリへ行ったとき、大統領選についていろんな所で聞いたら、皆喋らないですよ。職場でも家族の間でも、これを話題にすると喧嘩になる。おかしかったのは、修道院でもそうなの。皆が自分の主義主張を持っていて譲らない。ムードで選

挙をしないようですね。

日本も、自分の判断で投票するように変わっていくんじゃないでしょうか。

和田 そうでもない。

これね、社会党に絶望してるんじゃないくて、皆政党嫌いなんだと思う。愛想がつきてるのよ、どっちもこっちも。

司会 それはあるわね。

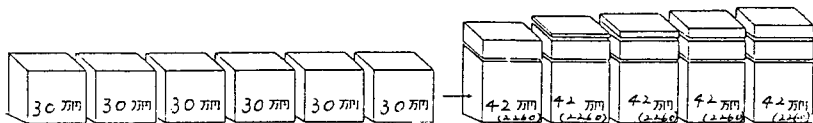
梶本 私は政党ボケしてるところがあるんじゃないかと思えます。逆に言えば日本は平和で、幸せすぎた。一票で世の中が変わるかどうかわかんなくても、まあ無難に暮らしてきた。でも国の危機だとか大変な状況が起きたときには、やっぱり国民はちゃんと選挙に行くだろうと思うんですね。

司会 それはあると思う。どう？ フランスの運動している女性たちって。

梶本 フランスの女性団体は、はっきりした実体はつかめないけど右翼から左翼、小さい団体から大きな超フェミニストの団体まで千七百あるそうなんです。

その中で、中心的に権利獲得運動をやっているのはフェミニスト的な、概して極左とか左翼系運動体ですね。インテリ層で

長いもののきらいな方用年金プランです (積立期間 6 年、給付期間 5 年という年金です)



〈例〉 年払い保険料30万円を6回積立。給付金は6年後から42万2260円を5回受け取り。これに加算給付金、増額給付金がプラスされます。ニーズにあわせていろいろな設計ができます。

親・丁寧・シツコくない、わいふ指定代理店杉本保険事務所です ☎03-3260-4771

あったり、労働者階級の出身だったり、経済的にもいろんな立場の人たちがいる。

フランスには九二年から大変面白い動きがあります。フェミニストグループだけじゃなくて、いろんなグループに一つの運動目標ができた。パリテポリティックといって、国民の半分は女性なんだからすべての政治の場に女性を半分入れよう、と。司会 クォーター制とは違うんですか。

梶本 違います。クォーター制は女性議員の比率を三〇パーセントとか、割り当てを決めていくのに対して、パリテポリティックはすべて平等にと要求している。

なぜこの運動が起ってきたかというと、八〇年代の社会党政権で、ほとんど女性の権利は獲得された。でも権利が獲得されることと社会的に平等であることは違いますよね。その落差を埋めるためには、やはり意志決定の場に女性を出さなければいけない。それが政治なんだと。

それともう一つ、女性たちが言っていたのは、九〇年代は政治とメディアが非常に大きな動きをしている、と。その点、日本は弱いような気がします。



田中編集長

例でお話すると、今月大統領選挙がおこなわれますが、一九〇一年にできた古い女性団体が三人の大統領候補を招いて、四月七日にテレビで公開インタビューをしたんですね。

バラデュールは、三〇パーセントクォーター制にして女性議員を入れます、女性の

閣僚を十人入れます、とはっきり公約をした。シラクは、何人とは言えないけれども、対等かどうか監視システムをつくって、補助金も検討すると言った。

司会 シラクは、ちよつと右翼でしょ。

梶本 右翼です。でも社会党とほとんど言っていることが同じなんです。ここで大切なのはフランスの場合、有権者の五〇パーセントの女性たちのことを政策に取り入れられない限り、政権の座につけないということがハッキリしている。女性たちの権利獲得運動が政治に反映してきている。司会 無視できないわけですね。

本格的な政党になれなかった理由

梶本 さっきから世代のことをおっしゃっていますけど、NHKテレビなどで戦後五十年間のようすを見ると、学校給食とか学生の売血だとか、本当に貧しかった。困難だった。その時に労働組合などの権利要求運動が内発的に生まれた、ということを感じますね。

和田 日本に革新的な政策がたくさん輸入

されて、制度だけは変わったけれども中身は変わらない。そのうちに国際社会に巻き込まれて経済も変わっていく。

私思うんだけど、下請け体制をつくって労働組合をどんどんなくしていったことが、日本の革新政党が本格的な政党になれなかった一つの理由だと思えますよ。皆、自分のことしか考えない体制をつくっちゃった。

司会 日本の社会党って党内で喧嘩したらよくいえばラディカル、悪くいえば極端な考えの連中がいつも勝っちゃうのよ。いつもそうなの。どうしてだろう。

和田 だからサ、カルト集団なのよ。イデオロギーの動き方ってのは同じなのよ。有澤 喧嘩って、声の大きいほうが勝つんですよ。

和田 (笑) マア、どうして彼らが勝ったのか、よく調べてみないとわからないけど、イデオロギーの問題だけではなかったのかも知れない。

梶本 昔の政治家に比べて、今の政治家は魅力がなくなっただんじゃないでしょうか。昔は書画をやるとか和歌を詠むとか教養が

あって、バランス感覚のとれた人たちが政治をやっていたんじゃないか。個性があった。

和田 それは戦後教育で平等ということが盛んに言われて、試験でとにかく振り分ける。そこへ経済が拡大したから、優秀な人材はみんな経済界へ入っちゃって、政界にまわってこなかったんじゃない。

有澤 日本の大臣のイメージとしては、品のないインテリジェンスに欠ける人たち、というイメージがあります。

梶本 経済人も教養者といわれてお茶の道具を集めたり、写経をしたり、幅広いものを昔は持っていた。

和田 戦後、全部それ、なくなりましたね。試験さえ通りゃいいって考えで。

梶本 ある意味で、社会党も世代交代をうまくやらなければいけなかったんじゃないでしょうか。

司会 この間の参院選挙のときに、社会党はマドンナ旋風で女性がたくさん出てきたわけですよ。オレんところが一番女性が多い、弁護士を引っ張ってきたって威張っていたけど、その理由がおもしろいの。

社会党が引っ張ってくるのは、弁護士と主婦。弁護士は落選しても商売があるんで仕事をしながらチビチビ活動をやっている。主婦もまた、落ちたら元に戻る。なんていうのか、非常に現実的……。

和田 いじましい。(笑)

司会 そうなのよ。

和田 しかしね、革新政党というのは、庶民全体の利益がどこにあるかの確に判断して、今何をするべきかわかった上で、最重の目標を定める。それに向かって運動する団体だと思うのね。それが全然できていない。

社会党がとても不可解だと思うのは、あれだけ労働組合に支えられて出てきたのに、なぜ組合を下請け企業にまで広げようとしなかったか。あれは不思議ですよ。

労組の党でバツチリ

司会 けど日本は、皆で何とかやっていた方向を模索し始めているんじゃない。梶本 いろんな分野で、日本の風土にあった、伝統にあったやり方をやり始めている

と思います。ただ政治の世界が非常に遅れているという感じがしないでもない。

有澤 本場に単純な発想で言いますが、官僚と政治家の力関係が微妙で、上がったりが下がりたりでよくわからない。ある時は官僚にオンブにダッコ、ある時は官僚を押さえつけ、ナンカそこら辺がよく見えないんですよ。

あの政治家にお願いすれば何とかなるだろうとか、状況がわかるだろうとかっていう見当がかいもくつかない。

司会 政治家がもっと独自性を持ってリーダーシップを取ってくればいいのに、実は官僚集団に動かされているんじゃないか、もっとしっかりしてくれ、ということですか？

有澤 はい。

和田 やっぱり歴史を動かすのは力関係なのよ。私、このごろつくづく思う。本当にみんな利害関係がなきや動かないです。それは保守もそうだし、革新もそう。全体の動きは大きな力の流れだと思う。

日本の場合、全体に国民が政府の味方をしていて、自民党に票を入れ続けていて、

要するに革新を育ててこなかった。今までは得をすると思ってやってきて、實際得をしてきたわけだけど、今後得をしなくなつた時が見物みぶつですよ。

司会 まあ、今はだいぶん、そういうところに来てはいるわけよね。今までの高度成長路線だけではやっていけなくなった。働けば働くほど田高が進む構造なんだから。

梶本 やはり根本的に日本の国が何を求めるか。保守と革新は政策をキチツと打ち出して、選択をしながら社会がバランスを取っていく、というのが本来の政党政治の在り方だと思うけど、その機能が今壊れている。わたしたちはどこへ声を託していいのかわからない。

和田 ウン、そうです。

梶本 だから新進党のような政党がいくつも出てきて困るわけです。大きくキチツと、社会のビジョンを提示してもらわないと。

今回の統一地方選で無所属の人が大勢出たけれど、それはやはり一過的なものであって、われわれの声を反映するにはあまりにも弱い。やっぱり個人には限界がある

と思うので、政党は大切なんじゃないかと思ひます。

司会 同感ですね、それは。

最後に、私はもう社会党は駄目だと思っているわけ。お気の毒さまなんだけど。なぜかという、どうしても選挙に勝つことが第一義になっちゃう。その時に彼らはやっぱり労組に頼るよりしようがないの。社会党の内部では市民の力なんて、ほんのチョッピリですよ。人手も集まんないし、お金も集まんない。だから市民の声をもっとも有効に生かしてくれる政党を探すつもり。

有澤 だから、本来の社会党は必要なんですよ。今存在している社会党は駄目なんで、社会党という名前をなくしちゃえばいいんですよ。

司会 そう。労組の党なら労組の党で、労組の利害を守るためにバッチリおやりになればいいんじゃないかと思うの。

まとめ・富前和

(次回の時事放談のお知らせは、一四九ページをごらんください)

女たちの情報紙

ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 750円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

アジア・たべもの・せっけん・がっこう
おんな・はたらく・げんぱつ

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子 七月号 五〇〇円・千七六円

今月の視点 (見本誌(旧号)進呈)

大震災と学校・教師

母と子 二月臨時増刊 一〇三〇円・千八四円

いじめの迷宮

私の意見

いじめ、いじめられの体験者、その母親や教師などからの
手記、意見16通。

「いじめ」という迷宮 佐々木 光明

追いつめられる子どもと必要なこと

いじめの再生産システム 前田 功

娘をいじめで自殺させられたことによって、いじめら
れている親からのメッセージ

いじめとわが国の社会文化構造 福田 雅章

いじめ事件への弁護士の間わり 児玉 勇二

いじめ事件裁判の見方 山岸 秀

裁判所の判断と教育の論理

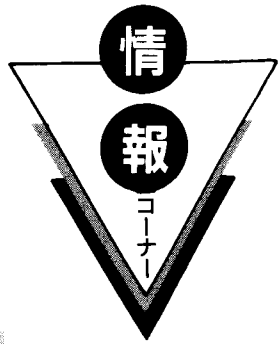
資料 いじめ自殺への社会的対応

新聞報道で読む岡山県総社市での事件とその後

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203 東久留米市中央町五四八
☎〇四二四一七四一九一二五

母と子社



自分流子育て 発見セミナー開催

自分のやりたいことを一〇〇パーセントやりながら、専業主婦も楽しむママ、再就職講座を経てみごと再就職を果たしたばかりのママ、フルタイムで働き続けたママ。彼女たちをパネラーに迎えて、セミナーを行います。題して「がんばるママ達にエールを送る」。

専業主婦VS兼業主婦なんておかしよね。その人なりの子育てを認め合いながら、リラックスして子育てしましょう。ふるってご参加ください。

▼日時 六月十日(土)
十四時〜十六時

▼場所 エポック10(池袋メトロポリタンプラザ十階)

▼入場 無料

▼託児 有り(二歳以上。五日前までに予約)

▼企画 グループコスモス

▼問い合わせ エポック10

☎〇三ー五九四一ー〇一五

十年前の「わいふを 読んでみませんか？」

一九八五年十一月発行の「わいふ」一九六号から二五〇号まで五十五冊を、取りに来てくださる方、または送料負担で受け取ってくださる方に、誌代無料にて一括進呈します。

ご希望の方、詳細につきましては、左記住所まで「往復はがき」にてお問い合わせ下さい。
〒146東京都大田区仲池上二二二
六八ー五〇三 榎山信子

私のPR

テーマ冊子「揺れる家族」 を出版しました

平成六年度「大阪府ジャンプ活動助成事業」並びに「財団法人船舶振興会ボランティア活動援助事業」の選定を受けて作成していたテーマ冊子「家庭に優しい企業・社会とは」揺れる家族」が完成しました。

妻達の揺れる思いを、「揺れているのは私だけではない」と一人一人の心へ、そして企業戦士をはじめ、企業や社会へも語りかける目的で作られた冊子です。

女として、妻として、母としてのそれぞれの今を大切に、自分を見つめ考えることを目的に綴ってきた私達の作品を、一人でも多くの方に読んでいただけたらと願っています。

▼定価 九百円 送料三二〇円

▼問い合わせは猪木恵美まで

☎〇七ー三三ー三〇一ー五九四

ヤマギシズム

夏の子ども楽園村に 参加しませんか

「すべての子どもたちに本来の子どもらしさと子ども社会の復元の体験を」との趣旨の下、二十年の実績をもつ、「夏の子ども楽園村」が今年も開催されます。

▼期日 七月二十一〜二十八日

八月一〜八日

八月十一〜十八日

▼場所 各地ヤマギシズム生活実顕地(全国二十三个会場、海外会場もあり)

▼対象 幼稚園児(年中)〜小・中・高校生まで

▼参加費 三万五千元(十消費

税一〇五〇円)

▼問い合わせ 〒169東京都新宿区高田馬場二一九一七ー四F

ヤマギシズム楽園村実行委員会
東京事務局

☎〇三—三二〇〇—八六七五
FAX 〇三—三二〇〇—三六〇四

障害者へ

ファッションを

ハンディ&シニア企画では、
「高齢者・障害者のための衣服
作り」をしています。

障害はひとりずつ違うため、
既製服では対応出来ず、衣服に
困っていることを知りました。

着やすく、着て楽しい
ファッションを提案し、共に喜
びのある暮しをめざしています。

一緒に製作してくださる方
を募っています。和服のリ
フォーム教室も開催しています
ので、ぜひご連絡を。

▼問い合わせ 〒142品川区小山
五—一七—二三 菊池裕子
☎〇三—三七八六—四二〇九
連絡は夜の。

「田奈の森」

—学徒勤労動員の記—

沖繩の少女が自決に使った手
りゅう弾。それはもしかしたら
私が作ったものかも知れない。

第二次大戦中、学徒勤労動員

令で田奈の森（現在のこのもの

国）の東京陸軍兵器補給廠田奈
部隊内火薬工場で、弾丸作りを

させられた女学生時代の体験。

「わいふ」に連載中の「私と英
語」前篇に当たります。

二度と再びあのような不幸が
繰り返されてはならないと、祈
りつつ書きました。

▼近代文藝社刊 一三〇〇円

ご希望の方は近くの書店か、
☎〇四五—五三一—五三三〇
酒井智恵子まで



相談室再開

かつて「わいふ」編集部内で
行っていた相談室を再開する
ことになりました。

再就職や職場の人間関係、家
族、生き方探しなどさまざまな
迷い、悩み、不安を抱えている
方、お電話またはFAX
にてお申し込みくだ
さい。

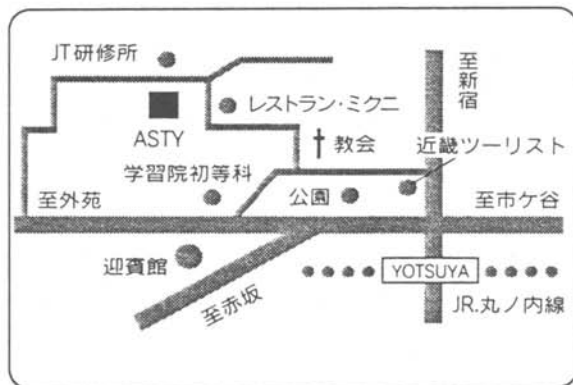
職業興味テストや心理
テストを生かしてのアド
バイス・カウンセリング
をいたします。

▼原田ワーキングライフ
研究所

再就職アドバイザー

原田 静枝

（わいふ）編集委員、日本
交流分析学会会員、新宿
区立女性情報センター総
合相談員、かながわ女性
センター労働相談員他）



▼相談料 一万円

▼場所 〒160東京都新宿区若葉

一—二二—一六ASTY—〇二

& FAX 〇三—三三三—五九一九

七三〇

▼JR、地下鉄丸ノ内線四ツ谷駅
下車徒歩八分、迎賓館近く。学
習院初等科裏の閑静な場所です。

Femme

ファミPolitique

Politique

編集室より

「オウム真理教」は国家のミニ版

田中喜美子

●この数十日、マスコミ、とくにテレビは明けても暮れてもオウム教の報道一色に塗りつぶされています。

いったい明日はどこで何が起こるか、誰が殺されるかはかり知らない現在進行

形の状況では、それも無理のないことかも知れません。でも私には、オウムについて肝心のことを言ってくれる評論家がないのがもどかしくなりません。

●オウム教は「存じ」のように、自分たちの組織を国家に似せてつくっています。建設省や科学技術省と、国と同じような名前をつけた省をつくり、それぞれふさわしい業務(?)を担当しているというのですから、呆れるやら驚くやら。

これを、単なる模倣の問題として片づけるのは皮相な見方のような気がします。実は深いところで「国家という組織それ自体が、オウム教に似ている」というのが事実に近いのでは？

●最近、アメリカ陸軍がブルトニウムを人体に注射して(もちろん本人に知らせず)その影響を調べる、という慄然とする実験を行っていた事実が明るみに出て、ついには全米を震撼させる大事件となりました。小さな地方紙の女性記者が、たった一人で七年かけてその事実を調べあげ、一九九三年に同紙に発表したのがことの始まりです。

ドイツのナチがやったことは誰も知っています。日本でも過去の大戦に、中国人を「マルタ」と呼んで残虐な実験の対象にしたことは知られています。何と、同じようなことが「民主主義国」アメリカでも行なわれていたとは！

戦争での殺しあいもそれ自体、おそろしいことですが、人間を——それも同胞をまで人体実験の道具として扱い、どんな残虐なことをしても許される——こんなことがあってよいものでしょうか。

●それが許されてしまうのはなぜか。もちろん「国家のため」という大義名分があるからです。

「信仰のため」に人を殺すのは、昔と違い、現代では許されないことになりました。オウムの行動はだから「犯罪」として扱われています。

しかし同じ行動を「国家」がとってもそれは「犯罪」ではないのです。それどころか、ほめ讃えられさえするのです。

アメリカのクリントン大統領が、四月十八日の記者会見で「日本への原爆投下は正しかった」と強調しているのがその

よい例ではないでしょうか。

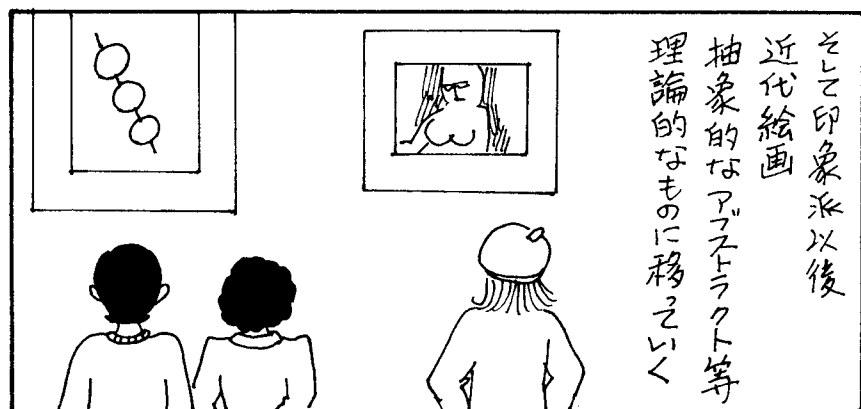
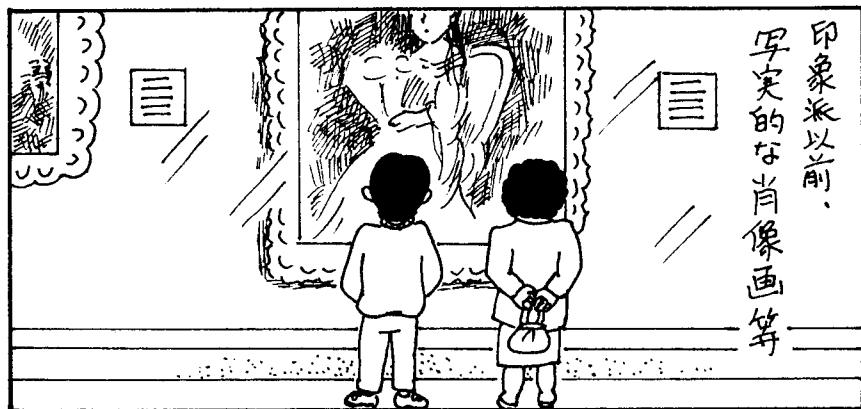
もしも自分の国が侵略されたなら、国を守るために銃をとって戦う……その行為を否定する人はほとんどいないでしょう。しかしその「国のため」が無限に増殖していくと、そのためにどんなことをしても許される、というオウムの狂気に近づいていく、それが「国家」という集団の持っている本質的なおそろしさではないでしょうか。

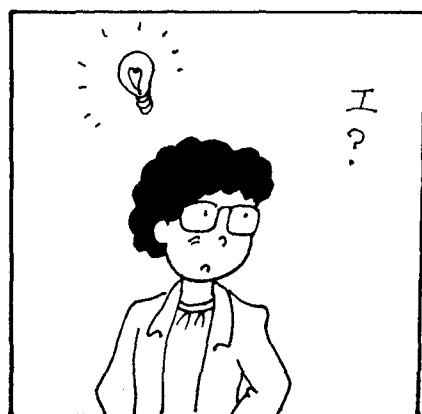
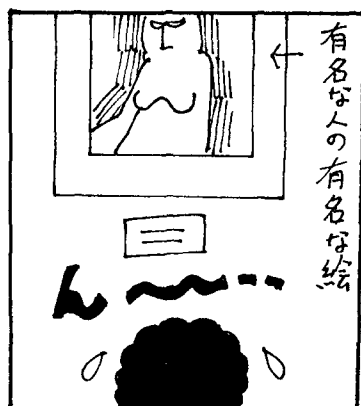
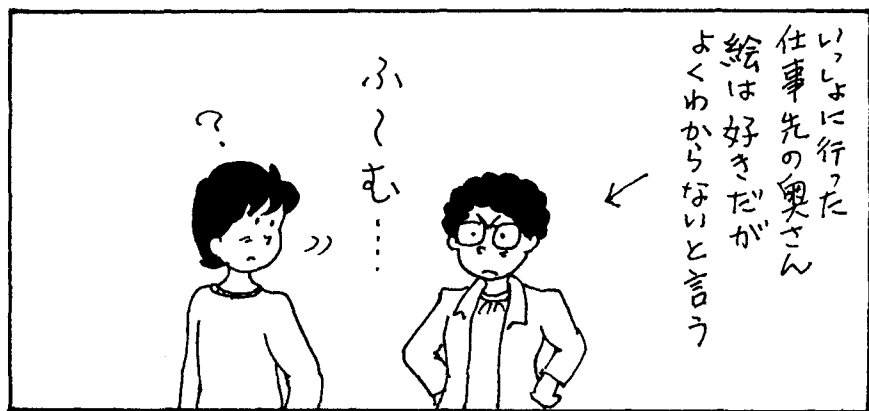
●でもアメリカで、一介の地方紙の女性記者に、国家の犯罪を摘発することができたのは、圧倒的な力を持つ国家に対して、情報公開をはじめとする市民の側からの歯止めの機構が存在し、それを利用することのできる市民が存在していたからです。そこにこそアメリカの真のすばらしさがある、と思われてなりません。

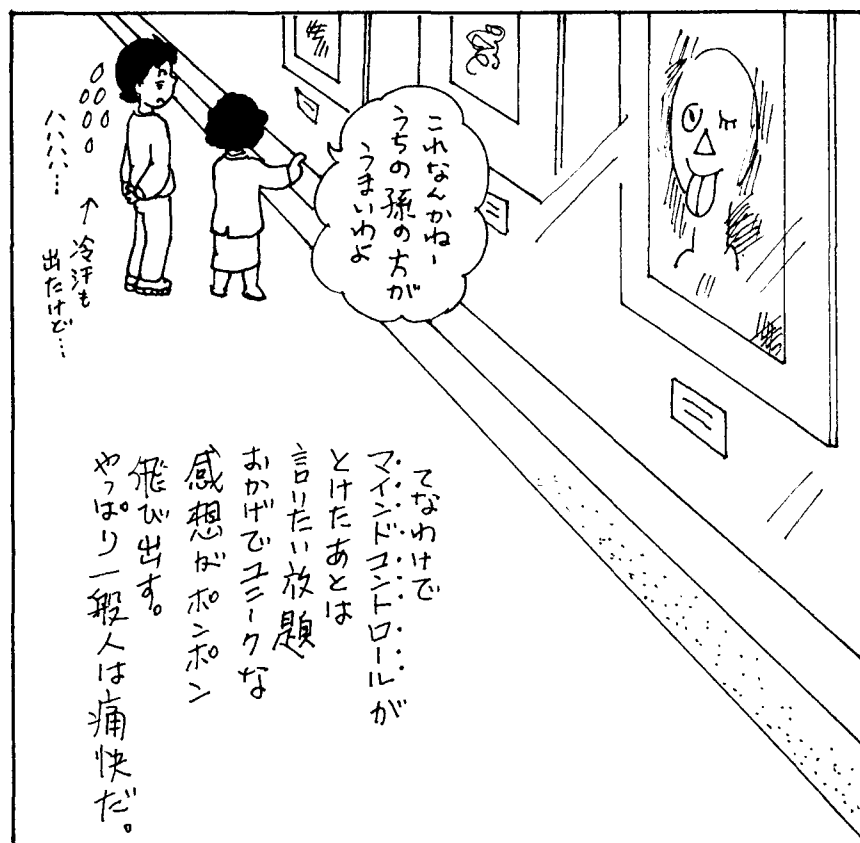
幸いなことに、日本でも「情報公開」は少しずつ進んでいます。でもそれをどう利用できるかは、私たち市民にどれだけの力量があるかにかかっています。

しっかりと目を見開いて「力量ある市民」になろうではありませんか！









精神的自立のすすめ

高齢者福祉の話をする時、スウェーデンの福祉政策がよく引き合いに出されます。スウェーデンは高福祉ですが、ご存じのよう
に高負担の国でもあります。

国の政策はそれぞれの国の事情があり、単純に比較できるものではありませんが、政策の違いよりも、もっと大きな違いは、国民一人一人の意識の違いではないかと感じられる事例に多く出会います。

現在日本の多くの高齢者は、長男と同居することを強く希望します。「幼にして父母に従い、嫁して夫に従い、老いて子に従う」の教育のせいなのでしょう。自分の老後のことを深く考えるゆとりがなかった、社会の仕組みもあったのでしょうか。

それにひきかえ、子の意識には変化の兆しが見えてきました。

夫の親は夫やそのきょうだいが看取ればいい、私は自分の親を看取ると考えている妻。夫の親の介護をめぐる離婚にまで至った夫婦など、介護が家族のなかで重大な問題になりつつあります。

高齢になったとき、どこで、どう住むかを、子育てが一段落したら真剣に考えてみましょう。

スウェーデンの高齢者は厚い福祉政策のもとで、自宅で介護を受けながら一人で生活しています。毎日の生活には介助を希望しますが、精神的には他の人に強く依存することはありません。孤独の生活にも耐えていける精神力があるようです。

私たちが高齢になった時、独立した精神を持ち、社会的な介護を受けながらも一人で生きていけるような、強い精神力を養う必要を感じます。

少子化の傾向にある現在、社会を背負って立つ若者に、老人介護の負担を押しつけてしまわないようにするためにも。

▼情報センターにお便りをください。また高齢者の受け皿としての施設について情報の欲しい方は、ぜひ老人ホーム情報センターまでお電話をください。

担当 水落

わいわいがやがや

ほんの一時のことだから

栃木県鹿沼市●神山寿子

「可愛い写真送って下さって、ありがとございます。」

大きくなったものだ、つくづく思います。

子供と遊べるのは、一生の内のほんの一時です。あまり文句を言わずに、楽しんで下さい。貴女は少し文句が多すぎるので、注意します。

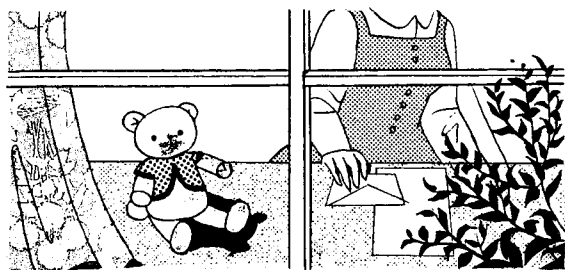
私は病気で、少しも子供達と遊ぶ事がなかったから、丈夫と一緒に遊べることは、幸せな事です」

母からの手紙は、まことに、まことにごもっともである。

夫からも文句が多いと、おこられたばかりである。

ここで深く反省して心を入れ替えればいいのだけれど、「文

句の多い」私としては、ついっ
い余計なことを言いたくなる。
子供が小さくて、手がかかる



時期は短い。

幼稚園に行くようになれば、食事や排せつといった生活習慣

への手助けもずいぶん減るはずだ。そのぶん他の悩みや、わずらわしさがでてくるとは思うが。でも一生の内の、そのほんの短い時期のために、大事だと思っていた仕事をやめ、ガマンするのがあたりまえだと言われ、自分自身を見失ってしまい、一人だけ取り残されたような気持ちになってしまふのは、ちと情けない。

考えてみると、子育てばかりでなく、病人の看護や老親の介護など、決して一生続くわけではなく、むしろ「一生のほんの一時のこと」と後から思えることのために、一生の計画を棒にふる女性が多いのではないだろうか。

先の見えないトンネルの中にいる時に、「トンネルは必ず出口がある」と激励されても、なんで私だけが出口を見出せないのかと不安に思っばかりだ。

「ほんの一時のことだから」と黙って耐えてきたことを、本当にあたりまえのことだったのか考えてもいいのではないのと、「文句の多い」私は思うのである。

シチリアから “わいふ”に 仲間入り

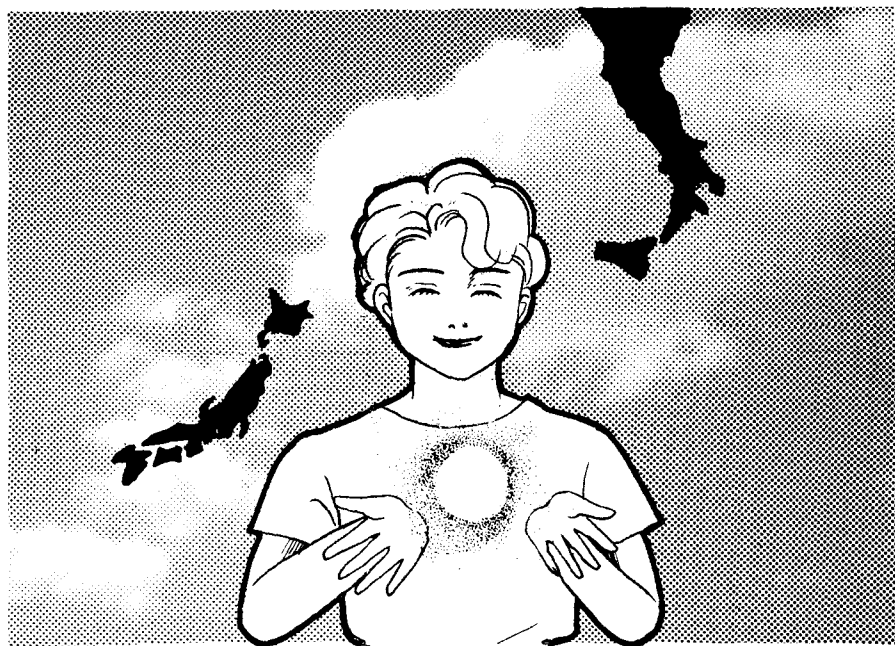
イタリア・メッシーナ市

●和子 S カンパネッタ

私、友人の高山幸子さんのご厚意で貴誌を三五〇号から購読させて頂いております。

イタリア本土とを結ぶフェリーの行き来を家の窓から眺められる、シチリアの玄関メッシーナ市の小高い丘に住んでおります。

たった一人の日本人ですが、



もう二十年近い当地での生活、家庭の主婦としていそがしい毎日を通しております。

買物とか時々果樹園やオリブ園のある田舎へ行く以外、外との交流が少ない生活をしております私に、“わいふ”はいろいろと話しかけてくれ、自分も仲間入りしたような気分させてくれます。とても素晴らしい雑誌です。現代の日本の家庭の主婦達がどのようなことを考えているのか、どのように行動しているのかを身近に感じ、日本から遠く離れている事を一時忘れさせてくれます。

横浜のような大都会に育ち、ほとんど自然のうつり変わりを感ずることの少なかった自分が、どのように、このシチリアの自然とうちとけて生きているか、いつか文章に表わすことが出来ましたと望んでおります。

(え・梅村 恵)

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二五五号の特集テーマは「家事サービスを利用してみたら」です。

最近、忙しい主婦のためにいろいろなかたちで家事を代行する会社が増えてきました。主婦がどんなに忙しくとも、いまや家庭のなかに昔のようにお手伝いさんを住みこませるゆとりのある家庭はほとんどありません。その分クリーニングにはじまって、家事代行業がさかんになるわけです。

そこで今回はぜひ、あなたが利用なさった家事サービスのご体験と、その結果についての率直なご意見をお寄せください。

経済面、時間面、サービス内容などに加えて、ご自分や家族の心理的抵抗やトラブルについても書き込んでいただけると嬉しいです。

四百字詰原稿用紙十五枚前後。
締め切り六月二十五日。

●時事談

今回は「私にとっての宗教」です。

オウム真理教のおかげで宗教、とくに新宗教と呼ばれるものが疑いの目をもってみつめられ始めているのではないかと思えます。

ところがよくよく周辺を眺めてみると意外にも、えーこんな方が？と思議になるほど、「新宗教」「新・新宗教」に帰依している人が多いのに気づきます。

宗教は両刃の剣、すばらしいかたちで使うことも出来れば、おそろしいかたちで人を傷つけることもできます。

オウム事件にアレルギーを起こさず、この際私たち「ふつうの人間」がどんなかたちで宗教と関わりあっているかを見つめてみたい、と思い立ちました。

もちろん、新宗教ばかりでなく、いわゆる正統的な宗教を信じていらっしゃる方でもかまいません。一人でも多くの方のご参加をお待ちしています（誌上匿名でも結構です）。

日時 六月十六日（金）午後二時より
ところ「わいふ」分室

申し込み 前日までに編集部へお電話で。
道順はそのときお教えします。

ご要望がしばしばあるので、原稿の添削をすることになりました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。

●「わいふ」に投稿して、さらに添削希望の方は「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。

●投稿して、ボツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ボツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき（ワープロ原稿は20字×20行で打つこと）二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名遣い、文法、文脈などの誤りを正したうえ、編集長が副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」も、基礎を勉強したい方にはおすすめてです。ご注文ください。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所(郵便番号、都道府県名から)、氏名、会員番号を明記のこ
と。誌上匿名・ペンネーム可。

次のコラムを設けています。

●エッセイスト・クラブ
(二六〇〇字まで)

びたりとキマった文章、豊かな内容を持
った随筆をお寄せください。

●ズバリ一言(二六〇〇字まで)

オピニオン、評論、改善策の提案などの
欄。政治、事件、芸術から身近の商品、
サービス、その他細かいことまで何でも遠

慮なく言ってください。ただしなるべくあ
なた独自の考えを。

●マイジョブ・マイホビー
(二六〇〇字まで)

本格的な職業生活から、パート、アルバ
イト、内職までの仕事について、また楽し
み、生きがいとしての趣味について、いず
れにせよあなたの活動報告をお待ちしま
す。

●家族と私(二六〇〇字まで)

一つ屋根の下にいる夫や子供はもとよ
り、別居している親(舅・姑も含み)、成
人して離れた子供、他人の始まりといわれ
る兄弟姉妹など、とにかく「身内」とあな
たの関係レポートをどうぞ。

●おさない子を育てる
(二六〇〇字まで)

子育てはやはり、女性にとっての最大の
関心事です。おさない子はいかいいい、だけ
ど子育てはホントにしんどい!
現実のなかから、あなたと子供のありの
ままの関係を浮きぼりにしてください。

●大人になりかかった子供たち
(二六〇〇字まで)

反抗期、思春期、青年期の子供と親の関
係についてお書きください。大きくなった
子供の問題は、これまであまり言い立てら
れなかったと思いますが、若いお母さんに
も将来の参考になるはず。体験談をお待ち
します。

●忘れ得ぬ人々(二六〇〇字まで)

印象の深かった人の姿を描写してくださ
い。想い出の中にある人、現在関わってい
る人どちらでもけっこうです。いやな奴、
すばらしい人、奇人変人、あなたの詳しい
観察を。

●フリースペース(二六〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条
にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自
由のある「わいふ」ならではのコラム。

●わいわいがやがや(八〇〇字まで)
誰でも気軽に書けるコラム。

●サーブレシーブ(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載
せします。感想、反論、何でもどうぞ。

●ピンポイントニュース

(四〇〇字まで)

ねえみなさん聞いて聞いて!と聞きたいほんのちょっとした話のページ。こうやって簡単に天井の掃除ができた、でもよし、安い旅館をうまく見付けた、でもよし。安い買い物、すてきな商品、何でもみなさんの役に立つごくごく小さいニュースを集めたいのです。

●おすすめの一冊(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

●情報コーナー(四〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

コラム以外の投稿募集

●特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

●特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も

自由。本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。

●ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。サブレシープ・ピンポイントニュース・情報コーナー。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みですので、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直すことになるので)。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字、二士行を一枚に、行間をあまり詰めないよう、また禁則処理をしないで打ってください。

●ファックスでの投稿は受け付けません。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日

(当日必着)。それ以後に着いたものは次号まわしとなります。規定枚数はきっちりではなくともよく、長くて内容がよければお載せします。

●他誌との二重投稿はお断わりします。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に。住所、本名は、そのすぐあとに併記してください。

また整理の都合上、住所には郵便番号を付記し、本名には会員番号(本誌送付封筒の宛名の下と、振替用紙にあります)を付記してください。

●ペンネームをいくつも使い分けるのは、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価します。濫用は困る、ということです。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下に算用数字で。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

編集だより

●この前の号からハページ増やし、その分割りつけをゆったりさせるつもりでしたが、出来上がってみると、まだまだ字がぎっしりの感じ。今回は心してゆとりのある割りつけにしたつもりですがいかがでしょうか。

●七月四日(火曜)二時～四時、東京都女性情報センターで、わいふ主催の文章講座をいたします。講師は田中編集長・和田副編集長。お友達をお誘い合わせの上、お出かけください。前日までに必ず電話で編集部までお申し込みを。参加費二千円。

●今回は投稿数がたったの六十八通と異例の少なさだったのです。会員数は変わらないのに、不思議です。大震災、サリン事件などと続き、みなさんテレビにかじりついていたのでは? とまあ、次回にはぜひ、より多くの方が投稿をお寄せください。

●投稿をなさった後で、「ここをこう訂正してください」といってこられる方がときどきあります。大きな間違いなどで、著者の面目にかかわるような訂正なら当然お受けいたしますが、直しても直さなくても、

あまり関係のないような訂正の場合はご遠感ください(非常な手間がかかるので)。

●グラビアの「ヴァラエティ・ライフ」に登場してくださる方を紹介ください。面白い、ユニークな活動をしていらっしゃる方を、自薦・他薦でお待ちしています。

●「わいふ」に数々の名文を寄せてくださり、著作も何冊ある結木美砂江さんが、昨年十二月五日亡くなられました。「わいふ」を始めてから二十年、いろいろな出来ごとがありました。これほどの痛恨事は初めて、といっても過言ではありません。

この度彼女をしのんで、せめて皆の筆でささやかな追悼文集をつくらうということに決まりました。文集に寄稿なさりたいというお気持ちのある方は、六月末までに編集部にご一報ください。また編集作業を手伝って下さる方、ぜひお声をかけてください。遠隔地の方でも歓迎します。

●いつもお願いしていることですが、定期購読をお友達にすすめてください。また年間分プレセントも結婚・出産祝いなどにどうぞ。おれをさし上げます。詳しくは五十二ページを。

購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様。

WIFE・254

(隔月刊)

1995年7月1日発行

編集・わいふ編集部

定価550円(本体533円)

(年間購読料送料共4500円)

印刷・平河工業社

発行所・鶴グループわいふ

東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

〒162 TEL (03)3260-4771・4773

郵便振替00150-3-110430

加入者名 わいふ編集部

購読中止は……

必ずお申し出ください。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

最新刊

簡素な食事の本 ●四季の味、いつもの味
千原道子著 簡素とはちう洗練された簡単に素敵な「簡素なおいしい」食事の基本と応用百六十のレシピ ●巻頭カラー付 *1500円

減糖・自然派おやつ
江島雅歌著 素材の風味を生かしてつくる手づくりおかしの数々を紹介。食べすぎても安心! ●イラスト満載 カラー口絵付 *1350円

あまとんさん ●小学上級・A5判・26頁
浜田糸衛作・高良真木絵 大正モクラジの高校・自然の中でおてんば「あまとんさん」が成長していく姿を描く伝説的童話 *1600円

いのちをあそび事典 ●したいさせたい、感じろる実験200集
山田卓三文・トニイ・チロ・絵 朝顔を夜中に咲かせる? サリガ? 料理・動物物を素材に遊びながら科学の心を育てる実験集。 *1800円



●ダンスを舞うように、女たちはお産を してきた! ●
いいお産がしたい
*1500円 ●写真多数

農文協、シーラキッティング・他著 あなたの多彩なお産をささえてくれるのは誰でしょう? 少子化時代の多様なお産の現場から産む側に立っていいお産を提案する本。

■農文協の妊娠・出産の本
シーラ
おはさんの妊娠と出産の本
お産がゆく
お産つて自然でなく
お産つて水中出産
タイミング妊娠法
私さで産む、産まない
お産つて楽しいね

●産む立場からの妊娠・出産 ●育児百科 *8000円
●少産時代のこたまりマタニティガイド *12500円
●自然なお産の実験をマンガで解説 *13000円
●好きな姿勢で産みたいともうれしい *12500円
●丈夫な子を産む具体的方法を解説 *12500円
●青木やよい・丸本百合子著 女性の選択権 *15500円
●自然流安心お産の実例を楽しく紹介 *12000円

大好評! /

好評発売中!

猫とみる夢
藤村かおり著
1500円 310
かわいくてしがない。猫と一緒に過ごす素敵な時間の数々をカラー写真をまじえて綴る楽しいエッセイ。

オーロラの大地 アラスカの12カ月
相原なおみ著
1600円 310
知られざる極北の地。その自然、人、歴史などをいきいきと描き出す。魅力あふれるアラスカ見聞録。

あやしい日本語学校
吉武保子 著
1400円 310
憧れの国にやってきた留学生たちの夢の行方は……。日本語学校の教師になったお母さんの国際貢献奮戦記。

わが子を守るお母さんの知恵
高辻玲子 著
1400円 310
思春期の危機を親子で乗り切るために、心理学の知識とカウンセリング実績豊富な著者が適切にアドバイス。

離婚すべきか、避けるべきか——岐路に立つ人における具体的ノウハウも収録。

愛する夫には若い愛人がいた!
岡野厚子 著
真壁英二
1400円 310
自らの体験をもとに、赤裸々につづった離婚の真実。おかしくも哀しい数多くのエピソードのなかに「平成の破局」が浮かびあがる!

話題沸騰! 大増刷出来

女のホンネ版
完全離婚マニュアル

発達心理学と フェミニズム

柏木恵子／高橋恵子編

“ベニス羨望”や“母子愛着論”は、単に時代の産物でしかなかった——女性は今「(家長、会社人間、ぬれ落葉)男のようになりたくない」のである。自立した女性として心理学を再構築するところみが、いま始まっている!!

二八〇〇円

学んでみたい女性学

フェミニズムと女性の生活

中田照子／杉本貴代栄／J・L・サンボンマツ／N・S・オズボーン著

フェミニズムという新しい視点で、私たちの生活を見つめなおすために、女性をめぐる「現在」に焦点をあて、わかりやすく解説する。日本とアメリカの女性学者が語る暮らしに生かす女性学。

シリーズへ女・あすに生きる⑤ ●二〇〇〇円

高齢社会を生きる 高齢社会に学ぶ

シ・ローウィ他著 香川正弘／西出郁代／鈴木秀幸
訳 ●福祉と生涯学習の統合をめざして 二五〇〇円

生きがいさがし

濱口晴彦著 ●大衆長寿時代のジレンマ
一筋縄ではいかない! 生きがいは 二〇〇〇円

早期発見・早期治療のために

拒食症・過食症のQ&A

東淑江編著 重要項目99問を収録。 一六〇〇円

不思議・からだ再発見! ①

ふしぎ? 早川一光著 わらじ医者の人体探訪 意外に知られていないからだのスパラシサ! 二〇〇〇円

エイズという名の社会現象

新井節男著 32のテーマから、年齢や知識に応じて興味のある問題から学べるように編集。 一八〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607京都市山科区日ノ岡堤谷町1
振01020-0-8076 ☎075-581-0296